

と描寫のうま味が殆どない。描くよりも語り、語るについて、考證さへ伴ふほどであつたのみか、必ず隨所に、儒教、武士道の説法を挿入したのである。

洒落本の第一人者だつた京傳の傑作『櫻姫全傳曙草紙』(文化二年)を見ると、序の次に引用書目を掲げ、本文の中には『丹波志』とか、『大系圖』とか『盛衰記』、『義經記』とかいふ風に引用書を記入してゐる。また結末に「櫻塚楊貴妃櫻の來由」と題した考證文が掲げられてゐる。馬琴にあつては、それが當然であるが、理窟嫌ひの京傳が、かうしたことをしてゐるのを見ると、一寸不似合な感じがする。

更に京傳は『曙草紙』の冒頭からして教訓の意を述べ、「事林廣記にいはく、善に善報あり、惡に惡報あり、善惡報なきは、時節いまだ到らざるなり……天網恢々として疎にして漏さず、善惡若し報なくば、乾坤も必ず私ありといへり。この語、宜なる哉。」と云つてゐる。藝術家肌の京傳さへも、讀本になると、附焼刃式に直ぐ勸懲主義の旗印を露骨に示すことを辭しなかつたのである。馬琴になると、この色合がもつと濃厚であつた。

以上のうちで、考證のことは當時の一風潮となつてゐたにもよるが、一つは、兎角、戯作者を無學と見る一般人に對して、示威的になされたものと解釋することが出来る。も一つ、勸懲の方は、彼等の體驗から出たか、どうか。否、それは支那式思想を武士道に加へたものに過ぎない。殊に儒教思想を中核とした趣が強かつた。京傳が『事林廣記』の言葉をその儘、受け入れてゐるのも彼れとしては一種の自衛手段であつたら

うが、何等思想上に發明したところはない。概して思想界の新現象に伴うて、勸懲主義の必要を認めたとはいふ丈だつた。勿論、馬琴は、一個の理想を持つて人倫鼓吹のことを第一緊要事としたやうに思はれるが、京傳には馬琴ほどの自信も無かつた。

小説に道徳思想を注入することは、必ずしも悪いとのみ云へぬ。けれどもその道徳思想が、體驗に裏付けられ、若くは深い思索を包有したものでなくてはならぬ。ところが、馬琴らの道徳思想は大體儒教のみで支那の儒學者がいつも説くユウトピア(仁政)を繼承宣傳し、それが少しも體驗にも裏付けられず、深い思索の所産でもなかつた。それは單なる抽象觀念に過ぎぬ。茲に缺點があり物足らぬ節がある。殊にそれは馬琴にあつて、唯支那式の道徳たるに留まり、日本化が十分に加へられてゐない。故に眞の底力もなく、感激性にも乏しかつた。

### 三 濃厚な支那的色彩

それに彼等の浪漫主義は支那の色彩に満たされ、その小見出や回数を設ける具合、材料の出所迄が支那的であつた。黄表紙、洒落本にも、いくらか支那の匂ひがしたが、より多く日本的香氣の方が多い。ところが、讀本になると、人物、地名は日本であるが、内容は支那趣味が勝つてゐた。讀本中に現はれる異常な事件、異常な人物は必ず支那的であるのみに止らず、その趣向、組立迄が、往々、支那的であつた。今日から、それ

らを見ると、餘りに滑稽な位であるが、當時は、今日の人々が尙ほ西洋文學をわけもなく相當に尊重するやうに化政期には、支那文學を金科玉條視したのであるから、右の如き傾向を示したことも、餘儀なき次第だつた。

これが一例を京傳の『本朝醉菩提』(文化六年版)に採つて見る。『明本醉菩提傳』を始め支那書籍十餘種を参考用の資料として擧げてゐる。それに全八卷、十六回に亘る回毎に『法華經』の品目に擬した小題を附し、善悪因果の理法を篇中に寓することを明かにした。が、必ずしもそれに留らず、書中、狗子佛法の有無を滅却して本來空にいたらば、仇も恨もあるべからず。」といふ意味を一休禪師の言葉として挿入した。佛教思想に着眼したのは、流石に京傳で、儒教一邊の馬琴よりも融通性があるけれども、結局、鵝呑的に佛教の旨を時々ちらと説く丈で、京傳自ら體驗、看得した思想でなかつた點に物足らなさがあつた。

それから彼れの『櫻姫全傳曙草紙』は支那小説『金翹傳』、『離魂記』及び支那戯曲『風箏誤』などから材料、趣向を借りてゐる。その怪奇趣味、殘忍趣味は、日本的でなく、支那的で、グロテスクの色彩が強い。京傳自身は、そこに最も新しい工夫を示した積りであらうが、餘りに支那式になり過ぎた。

馬琴になると、支那的傾向が一層、甚だしい。彼れは小説の工夫、趣向を支那文學に多く求めたのみならず、その回数に分け方、小見出の附け方迄、『水滸傳』に倣ひ、また支那の俗語をも、日本の振假名を附して小説中に用ゐた。その初期に於ける讀本『復讐奇談、稚枝鳩』(文化二年)は「卷之一」に、

第一篇 女兒息津勉斷二兩頭蛇二桶縫九作得二口劍一

第二篇 腰越浦壯士嘆二薄命二天城山神女題二福禍一

といふ風に『水滸傳』式の小題を附けてゐる。また彼れの小説は、ひとり本篇のみならず、必ず漢文の序が掲げられてゐる。その『三七全傳南柯夢』(文化四年)は支那の寓意小説『搜神記』、『南柯記』などの趣向を一部分に借り、篇中人物の姓氏一覽表を『史記』に模して、世家、列傳の二つに分け、卷頭に陳翰の『槐宮記』全文を引用してゐるなど、益々支那趣味が深い。

それに『南柯夢』のうちに挿入されてゐる教訓は全く儒教的で續井順昭の家臣、典膳が「小臣の息を近習にすすめるについて、それ俊徳を明にして、能を擧げ、不能を矜給ふは君の心にあり。しかれども長流、船横つて、渡すものなくば、又燕石に劣りなん。」といひ、一小臣の子、半七が二十歳の時、許嫁の女おさんに對して義理を立て、重臣の女と婚するを父に向つて辭するとき、「御慈の深き事は、わきまへて候へど、信義の係るところ、いかにともすべなし。公事にあらずして權家に入るは、士たるもの、恥なり。況て一の宿老の婿となりて、肩を聳さんは嗚呼がまし。人の貧富は天なり命なり。よしや生涯、薪を樵て世を渡るとも、心清くば朱買臣にも恥べからず。死灰の人に愛せられんは、愛せられざるにしかず。銅臭を羨んで好を締ぶは、禍の端なり。」といふなど、支那道學先生の言葉その儘である。

かう云ふ風であるから、國文學者として知られた六樹園(石川雅望)の如きも、支那の李笠翁の戯曲に材

を借り、その『唇中樓傳奇』によつて、『飛彈匠物語』を彩り、更に『巧團圓傳奇』を翻案して、『近江縣物語』を書いた。また『天羽衣』と題した作品も、『今古奇觀』などに得るところがあつた。唯六樹園はそれらを日本化するに力め、馬琴の如く、露骨に支那趣味を示さなかつた丈である。

何れにしても、當時の知識階級の一半は支那崇拜者であつた。それは今日、一部の西洋崇拜者がするところと同様だ。それ故、今の眼で見ると、すぐに馬琴、京傳などの支那偏重を笑ふことは出来ない。當時の讀者は、この支那趣味の横溢を以て、新しいと考へ、それを振廻はす作者を學的素養深き人と見たらうと思はれる。これが古來、日本人のよい癖か、悪い癖か、今一々云はずとも、識者はこれを心に明斷するであらう。

#### 四 眞面目な態度

讀本の支那臭は聊か鼻に付き過ぎるが、その作者の態度が比較的眞面目であつたこと、長篇小説の脚色、結構を複雑にして、讀者を飽かしめないやうにしたことは一つの進歩だと見てよい。蓋し黄表紙、洒落本（滑稽本はまだいくらか宜いとして）の作者の態度は、餘りに不眞面目であり、フザケ過ぎた。通と洒落との連發で、一切を笑殺しようとした。「藝術のための藝術」といふ立場からすると、それも或程度迄容認せられよう。

けれどもそれらが風教の上に及ぼすであらう影響を當時の功利的文學觀に起つて考へる場合、黙過せら

れ難いことにちがひなかつた。馬琴らの功利主義的文學は、洒落本、黄表紙の不眞面目な態度を不可として起つた以上、作者の態度が眞面目であつたのは云ふ迄もない。平たくいへば、讀本の作家は、文學上、道德教師の地位にゐるのであるから、書齋的空氣さへ濃厚に見ゆるところが存在した。

勿論、京傳の如きは本來、勸懲に意なく、時勢上、止むを得ず、道德的口吻を假裝した氣味があつた。それにしても、これを彼れの黄表紙、洒落本にくらべると、甚だ眞面目に見えるところがある。遊蕩文學撲滅の聲におびえた彼れとして茲に出たのは、それが他動的に引ずられたものにもせよ、眞面目らしさの存する所に在來の彼れと異つたところがあつた。

馬琴になると、京傳の如く道德思想の假面を附けてゐるのではなく、彼れ自身の有する曲亭式哲學によつて、小説を一個の教化手段とし、諄々として説法することを、その任務としたのであるから、徹頭徹尾、眞面目な態度を持續し固執した。丁度、彼れには、今日のマルキシズム一派の文學者が、その小説をマルクスの宣傳機關とするに似たところが存してゐた。即ち馬琴には、一個のユウトピアがあり、テエゼがあり、イデオロギイがあつた。

馬琴のユウトピアとは、『八犬傳』に於て彼れが里見義實らの口を借りて明示したやうに仁政のもとに、社會、人間が善徳に生き、上下の階級が調和して、無用の戦争を起さず、不當の課税をせず、爲政者が物心二面に於て大衆を愛撫し、教化に全力をつくすにあつた。それは彼れの机上の空想であつたにせよ、馬琴はこ

れを『弓張月』の爲朝の仁政に於て、具體的に説示した。

馬琴のテエゼ及びイデオロギイは、この國家、社會、人間を經緯するについて、儒教が主張する實踐道德（仁義禮智信）と武士道がおのづから包有した精神（忠孝及び悌の心）とを以てし、小乗佛教の因果律（過現未三世を一貫す）及び宇宙の神祕的靈力の儼存を規定せんとするところにあつた。その表現が不十分であつたし、また新しい説き方がないのは缺點であるが、彼れの眞面目な態度とその傳道に熱心だつた事は明かに分る。それは在來の小説に見ない傾向であつた。

それから讀本が脚色、結構を複雑にして、一絲紊れぬ様子を具備しようとしたのは、それが概ね長篇たる以上、當然の用意であらねばならなかつた。日本では、古來、紫式部の大作『源氏物語』がある。また歴史文學として傑出した『大鏡』もある。『源氏』は光源氏を中心として書いた長篇であるが、全體の結構も割に整ひ、加ふるに、個々の少からぬ女性の姿を生々と描いてゐる。この種の長篇は往々、脚色、結構のために、人物を犠牲とし、或はこれを機械視する傾向があるのだが、『源氏』には左様した弊は少い。それ故、江戸時代の小説家中、柳亭種彦の如きは、『源氏』に私淑して、『田舎源氏』を書いたが、馬琴、京傳は、左様した方法によらず、すべて小説の構成、作法などを支那に求めた。馬琴の如きは、全く支那文學の行き方を踏襲することが、最善の方法だと考へたのである。

それにしても、馬琴が最高の小説とした『水滸傳』は、長篇であると共に人物の個性を或程度迄生かし、筋（Plot）とか構圖（Composition）とかのために、篇中の人物を犠牲とすることが少かつた。『水滸傳』の手法は、馬琴も多少、注意したにちがひなかつたが、どうも、その皮相のみを模して、核心に觸れなかつた氣味がある。フランスの文豪ゴンクウル兄弟が公にしたところの日記（Le Journal des Goncourt）には長篇小説を書く心持を示して、世人及び批評家は筋や組立や構圖などについて喧しく云々するけれども、私はそんなことを問題としたくない。プロットなどは、どうでも宜しい。それより影、正に物影、その作品が持つ物の影を重要だと思ふ。即ちそれは、色彩を見て起る感じを第一の問題とする。『といふ意味を述べてゐるが、馬琴はそこ迄想到せず、彼れが重要視したのは（勸懲主義を根本として、）筋、組立、構圖などの上にあつた。

## 五 小説作法の原理

蓋し支那好きの馬琴は、小説作法の原理を支那文學に求めたのである。彼れは『八犬傳』第九輯附言に於て、『唐山元明の才子等が作れる稗史には、おのづから法則あり。所謂法則とは、一に主客、二に伏線、三に襯染、四に照應、五に反對、六に省筆、七に隱微即ち是のみ。主客は此間の能樂にいふシテ、ワキの如し。その書に一部の主客あり。又一回毎に主客ありて、主も亦客となることあり、客も亦主にならざることを得ず。……伏線と襯染は、その事相似て同じからず。所云伏線は、後に必出すべき趣向あるを、數回以前に些墨打

をして置く事也。又襪染は下染にて此間にいふしみこみの事也。これ後に大開目の妙趣向を出さんとて、數回前より、その事の、起本來歴をしこみ措く也。(中略)照應は照對ともいふ。譬へば律詩に對句ある如く、彼と是と相照らして、趣向に對を取るをいふ。か、れば、照對は重復に似たれども、必是同じからず。重復は作者謬つて、前の趣向に似たる事を、後に至つて復出すをいふ。又照對は故意前の趣向の對を取つて、彼と是と照す也。」と述べ、左の如く實例について説明した。

譬へば本傳(八犬傳)第九十回に船虫媼内が、牛の角をもて戮せらるゝは、第七十四回、北越二十村なる鬪牛の照對也。又八十四回なる、犬飼現八が千住河にて繫舟の狙撃は、第三十一回に信乃が芳流閣上なる狙撃の反對也。這反對は、照對と相似て同じからず。照對は牛もて牛に對するが如し。その物は同じけれども、その事は同じからず。又反對は、その人は同じけれども、その事は同じからず。信乃が狙撃は閣上にて、閣下に繫舟あり。千住河の狙撃は、船中に樓閣なし。且前には現八が信乃を搦捕んと欲りし、後には信乃と道節が、現八を捉へんとす。情態光景、太く異也。こゝをもて反對とす。(下略)

更に馬琴は省筆のことについて、「事の長きを後にて重ねていはざらん爲に、必ず聞かて稱ぬ人に偷聞させて筆を省き、或は地の詞をもてせずして、その人の口中より説出すをもて脩からず。……看官も亦倦まざる也。」といひ、隱微の意味については、「作者の文外に深意ある。百年の後、知音を俟つて、これを悟らしめんとす。」と述べた。以上はすべて支那文學者の意見に徴して、馬琴の可とするところを讀者に告げたのである。

如上、馬琴の説くところは、第二義的なもので、第一義的なものでなかつた。人生の再現、人事、自然の活寫こそ第一義で、この旨を諒得すれば、馬琴の説くところなどは、寧ろ末梢的だと云はねばならぬ。が、この事は暫く措き、馬琴が筋や組立や構圖について相當苦心し、長篇の重要素が茲にあるとした意味は明かに看取せられる。事實、『八犬傳』のみならず、馬琴の讀本は、始めから右の如き心組で製作せられ、首尾照應して少しく理詰めし墮してゐると思はれるほど、前後の矛盾、衝突を避け、全體の統一といふことに力をつけてゐる。

かうした用意は、後に起つた人情本に於て多少見出されたが、讀本の如く、以上の點に重きを置いたものは、その當時に比を見なかつた。馬琴の小説は、その構圖上、善に對して惡があり、美に對して醜があるといふやうな人物の二大對立がある。君子に對して小人があれば、淫婦に對して貞婦がある。正直な妹に對して不正な兄があれば、虚榮を喜ぶ親に對して、著實を尙ぶ子がある。それから善人は種々の辛酸を嘗めて善果にあり付き、惡人は種々、榮華を重ねて後、惡果のために亡びる。この行程を説くために伏線が布かれ、對照法が用ゐられる。響庭篁村氏は曾て『八犬傳』の批評に於て、馬琴の用意の到れることを指摘し、「初篇十回のをほりに、大輔が鐵砲引提けて、富山に分入り、谷川の此方より遙に狙ひ、『水際についてつくぐと聞けば、女子の經讀む聲、いと幽に聞えけり』と筆をとゞめれば、二編のはじめ十一回には先づ此の鐵

砲の響きやあらんと誰もおもふに引たがへて義實および夫人五十子の上に及び、また貞行が東條より來る一段の奇異をまじへ、伏姫の名のことなど記し、諸次の十二回に文を飾りて富山の段を書たるは、作者道に云ふ見せ場なれば、わざと前回を置きて事を重くしたるならん。」と賞揚したのも、つまり馬琴が筋立、結構に力を傾倒したことを認めたに他ならない。

讀本の興味は半ば以上、左様した點にかかつてゐた。當時は、今日見るやうに一纏めとして出版せられたのではなく、次を追うて現はれたのであるから、讀者は「次回はどうなるだらう。」といふので、期待を持ちながら、續篇の出るのを待つたにちがひなかつた。それらの事情を參酌しないと、讀本の價値は大分減することになる。といふのは、藝術的に見て、讀本には可なり不満な點があるからだ。

## 六 如何に人生・人間を観るか

讀本がいくらか風教に資した點は暫く措き、その短所を數へると、著しく眼につくものが二三ある。勸懲主義を小説の第一義としたことは、一番、大きい缺點であるが、前述した如く、當時の風潮を考へると、一概に非難するわけにもゆかぬから、暫く云はぬこととする。次ぎに見逃し難い缺點は、(一)作者が生きた人生及び人間を見てゐないこと、(二)描寫が、一種のマンネリズムに囚はれ、コンベンショナルになつて、眞實性に乏しいこと、(三)怪奇、異常の事件を濫用したこと、(四)表面、考證、詮索を標榜し乍ら、歴史的事實に

冷淡なことなどである。

(一)人生をどう見るか、人間をどう見るかといふことについて、讀本の作家は深く考へてゐなかつた。勿論、馬琴の如きは、人生は結局、善の勝利に歸すべきものたることを認め、合せて現在、過去、將來の三世を一貫する因果律の儼存を固く信じた。儒教の信奉者で、何事も理窟の上から解釋せねばやまなかつた彼れがかく人生を觀じ、かく運命を肯定したのは當然のことであつた。

が、それは馬琴の創造した哲學でもなく、宗教でもない。素より儒學思想に含まれ、佛教にも示されてゐたことだつた。故にせめて、それが馬琴の思索と體驗とに裏付けられて、自ら文字の上に滲み出るといふ風であるならば、そこに一つの大きい力があるかも知れなかつた。併し、何れかといふと、馬琴は唯抽象的に左様考へ、理窟の上から左様あらねばならぬと結論しただけで、それが生々しい體驗、内部的に醗酵する思索に彩られぬため、生きた人生、生きた人間から唯抽象し來つた一つの冷めたい理念となつた氣味がある。

それに人生に於ては、いつも善が勝利を占めるとは限られてゐない。釋迦が人生救済の大福音を菩提樹下に傳へたインドは、何故、イギリスのために領有せられたかといふ一事を考へても、善が必ずしも、人生の勝利を決するものとは限らない。これを個人の上に見ても、平清盛の態度は頗る横暴であつたが、その一生は寧ろ花やかな色彩に包まれた。人生は活物であつて、流轉少しもやまず、人間は始終變化し推移して、性格の上にも、趣味の上にも新陳代謝が來る。善よりも寧ろ惡が勝つことが、人生の上にも人間の上にも見ら

れる。殊に人間個々に亘つて見ると、因果律さへも、確定的にはめこむことが出来ぬ。それ故に、馬琴の如く、善は必ず勝ち、悪は必ず亡びるといふ見方を人生及び人間の上に於ける鐵則と爲すことは妥當でない。のみならず、人間の心性は刻々に動き、寸秒毎に推移する。善の思想と惡の思想とが双方交錯し合つて、善人も惡を思ふことがあり、惡人も善を思ふことがある。善人は一生善を爲し、惡人は一生、惡を爲すと限らぬ。故に馬琴の如く、これを固定的なものと解する機械觀は正當と云へない。

更に因果律が三世を一貫するといふことも、大體、承認せられるとしても、善人善果あり、惡人惡果あるのみ見ることが出来ない。時に除外例もある。鎌倉三代の政治のあとを繼いだ北條氏の如きは、權略一方で天下の實權を掌握し、義時などの行動は殊に陰險だつたが、そのため、北條氏の權勢は衰へずゐた。この例が少し適切を缺くとすれば、十八世紀から十九世紀にかけてのヨオロッパを見るが宜い。權略、陰謀を主として他の國家を侵略した國が榮えてゐる例が往々ある。かうした生きた事實に向つては、一概に因果律を適用することが出来ぬと思ふ。

ところが、馬琴は、この生きた人生、生きた人間を見ない。机上で人生と人間とを假作して、必ず、善が勝ち、惡が亡び、因果の法則が儼として行はれると抽象的に定めて了つて、讀本のうちに適用した。それ故、彼れの作中に現はれる人物は何處迄も善で、寧ろ馬鹿正直に過ぎるものがある、また惡人は何處迄も惡で、殘忍、冷酷を極めるものがある。善人も時に誤つて、惡魔的な考へを生じ、惡人も境遇によつて、佛菩薩的な考

へを抱くといふやうに見てをらぬ。その上それらの人間は、例外もなく、因果律によつて束縛せられ、その範圍内に動くとせられてゐるから、機械化して了つて、弾力も何もない。例へば、馬琴の『阿旬傳兵衛實々記』(文化五年)の如きを見ても、櫻木といふ女は遊女出であるに關らず、心からの正直者で、その兄の束三は心からの惡人である。また主人公傳兵衛は淫婦、惡漢のために面上を踏みつぶされるやうなことをされても、ちつと我慢して逆境を忍ぶ愚直に近い人物として描かれてゐる。ところが、その許嫁の女お箱はお旬の徹底善であるに對し、徹底淫婦として寫されてゐるが、そのため、どの人物も機械化せられて、生々した點が見えぬ。京傳の讀本とても、大體、左様した傾向に支配されてゐる。そこに一つの缺陷が見える。

## 七 一種の尙古的マンネリズム

(一)讀本に於ける地の文及び會話は、大體に於て、『平家物語』、『太平記』などに範を採つたといはれる。洒落本、滑稽本などは、會話と地の文とを區別し、會話は大抵當時の言葉をその儘用ゐてゐる。ところが、讀本は會話も地の文も一樣に『平家』、『太平記』の調子で一貫した。それは讀本が概ね史上の事件を取扱ひ、歴史小説といつてよいものが多きを占めた爲めであつたらうと思ふ。

それ故、馬琴、京傳が文體を『平家』、『太平記』に擬したことも一理あるけれども、それらのスタイルに囚はれて了つて、その現はす人事、自然に殆ど眞實性を見出すことが出来ぬ憾みを生じたのは是非もない。勿

論彼等は地の文に美辭麗句を列ね、往々、七五調を用ゐて、詩的メロディを加へようとしたが、却てそれが障害となり嫌味となつた。

〔本來、京傳は名文家であつたが、讀本になると、マンネリズムに墮して彼れの長所を殆ど没却し、或少女の戀に熱する有様を描くについて「浦見の山のうらみ侘て、袖の涙は園原や、木辭にみかく白露の、玉章の數も積りければ」など調子ばかりに氣を取られた文章を平氣で書いた。また山家に住む妻が貧苦のうちに良人の病を憂ふるのを「弱氣に見ゆる紙衾、裾におくさへ初霜の、野山の錦ひきかへて、襦袢させてふ蟋蟀、瘦せたる骸を撫さすり、あるかなきかの埋火に、暖め兼し草褥、貧と病の八重葎、しけれ宿のわびしさを……」と述べてゐるが、少しも、しんみりした哀愁感をそそらない。

馬琴には、左様した傾向が、一層強くなつてゐる。彼れは度々、自然の風物を描くが、それは類似的のもので、そこに少しも特殊性がない。唯美しい對句を用ゐて、調子の上からすらすと快く讀めるやうにしてゐるに過ぎぬ。『美少年錄』(文政十一年—天保五年)のうちに深山の光景を描いて、「この地はすべて山又山の羊腸たる細道を、迎るもくるし蘿蔓松柏枝を交へて、樹下彌闇く、崑石道に横りて、樵路言に滑なり。仰ぎて蒼天を瞻れば、閃々たる星の光に、夜風の秋既に深かり、俯して山河を渡るとき、滔々たる水の音に、壺折る裳且に濡れんとす。」と云つてゐるが、漠然たる類型的筆法で、特殊性に乏しい。

それに會話も亦文語體によつた結果、生氣を缺き、緩急の調子が宜しきを得ないで、生ぬるいものになつ

てゐる。殊に馬琴は會話にも七五調を用ゐる、描かれてゐる人物の痛切な感情をこれがために抑へて了つて、間の抜けたものにしてゐる。たとひ、文語を用ゐても、會話の呼吸を緩急宜しきに協ふやう寫せぬわけはなかつた。ところが、この點に工夫を怠つたので、生きた人物の生きた聲を聞くといふやうな趣を全く失つたのは創作上の一失であつた。

## 八 怪奇偏重

(二)傳奇小説である以上、怪異、異常の事件を描くのは當然であるが、又それを濫用すると、却て作品の生命力を弱める。すべての傳奇小説には、獵奇心、探奇心、冒險心といふやうなものが、本質上、存在する。即ち浪漫精神が傳奇小説の重要素となつて、超自然、神祕の影を追ひ、平凡を絶した異常、怪奇を求め。但しそれは奇のための奇を、怪のために怪を追求するのであつてはならぬ。眞摯な宗教的感情に依據するか、乃至熾烈な美的精神に根據付けられねばならない。

ところが、馬琴、京傳らの時代は、支那文學家の解釋に重きを置いたので、怪奇美の創造を爲すところ迄ゆかなかつた。奇のために奇を求め、怪のために怪を求める支那小説と同じ行き方をして、而もそれを日本化しなかつた爲め、幼稚、低調な方に傾いた。彼等は神祕を描き、妖術を描き、怪魔、靈怪などを描いたが、眞實らしさがなく、美の香氣にも乏しかつたのである。殊に異常事として、殺戮、残忍のことを描いてゐる點は



目を蔽はしむるものがあるが、それも支那文學の影響から來てゐる點が多い。

京傳の讀本には、右の如き傾向が多分にある。彼れは淺薄不自然な怪奇趣味を以て、讀者を釣るため讀本を書いてゐるかの如くである。彼れの描くところの怪奇は、美的要素に缺け、彼れの寫すところの異常事は唯殺伐なのみだ。且つそれらは概ね支那小説からの換骨脱胎で、日本の人情、風俗に合致しない點がある。彼れの小説には娘の離魂病、美人の骸骨化を始め、怪蛇、怪鼠、怪鳥、化地藏、亡靈、惡鬼、舊家の怪、天狗などが出沒する。それらは眞の悽味がなく、また怪奇美をも含まぬ。通り一遍的に漫然としてこれを描くに過ぎぬ。馬琴とても、素より京傳と同一であるが、京傳ほどに極端でなかつた。(京傳の『曙草紙』、『稻妻表紙』、『醉菩提』等参照)

が、當時の讀者は、洒落本、滑稽本などで餘りに日常の些事のみを描いた場面を見せられ過ぎてゐるので、渴するやうに怪奇の世界を小説、戯曲などの上に求めたらしく、従つて京傳の皮相怪奇主義も、讀者の喜ぶところとなつた爲め、濫用したのかも知れない。それ故、責任の一半は當時の讀者にあつたとも云へよう。

(四)當時の讀本作家は、篇中の史的事實を考證し、或は詮索することに力を入れたかの如く、生眞面目にこの方面に觸れてゐる。『稻妻表紙』續篇『醉菩提』のはじめには、『不破名古屋傳奇考』などを載せてゐる。けれどもそれは、史的事實を書く上に於て細心精緻の研究をしたのではなく、聊か學究的な風を裝はんための一方便に過ぎなかつた氣味が見える。

若しそれが、フランスのゴンクウルが爲したやうに、歴史上の文書を細大となく涉獵し、ある時代、ある社會の風俗、習慣などを精細に研究してからのことだとすると、もつと生彩を帯びたにちがひない。馬琴の如きは、史上に於ける正確な年月などを入れてゐるが、その實、左様した時代のアトマスフィアを出さうとはせぬ。一寸した物知りぶりを示す丈であつて、ゴンクウル兄弟の如き熱心さが無い。

勿論、史上の人物、事件について、自由な解釋を下したり、或は全く空想から成つた事柄を記述するのは少しも差支へがない。左様いふ風な態度でゆくならば、考證、詮索は寧ろ無用にちがひない。ところが、馬琴は俊寛、爲朝その他の人物について、極めて自由な解釋をするが、その考證癖、詮索癖を少しでも振廻はさねばならぬかのやうな素振を示し、街學的になつてゐるのは少々鼻に付くところである。(馬琴『俊寛僧都鳥物語』、『弓張月』等参照)

以上、讀本に對して、いろいろの非難を加へたが、今日の大衆文學が同じく、怪奇を中心とし、人生の再現、人間の活寫を全く閑却してゐるのを見ると、讀本の作者を一概に非難しにくいところもある。馬琴、京傳の時代は、現代の如く文學論が發達せず、新來の唐本類も中々、手に入れ難い時代で、勢ひ自己の考へで、一流を創始しなければならなかつたから、そこでいろいろの困難もあれば、不便も多かつた。のみならず、當時の讀者は、現代のやうに進歩してゐなかつたから、作家としても、餘程、その邊の手加減をしなくてはならぬ必要が十分にあつた。文學史家の立場にあるものは、この點を正しく考慮に入れるべきであらうと思ふ。

それに馬琴の勸懲主義にしても、それが功利的に文學を律する害が少くなかつたにもせよ、當時の作家が唯「通」を振廻し、「粹」を誇る間に起つて、敢然、善を積極的に勧め、合せて惡を懲すといふ旗幟を鮮明に掲げて、雄往邁進した態度は正々堂々たるところがあつた。馬琴はこれが主張を創作の上に表示したばかりでなく、機會ある毎に評論の筆をも執つて、文學的運動の中心に起ち、根氣よく、その信するところを貫徹するに力めた。『江戸作者部類』などは、その記念である。

要するに、讀本を考察、批判するについては、ひとり、現代的立場ばかりからしないで、合せて歴史的意義の上からも、これを爲す必要がある。少くとも、歴史的意義を考へて、ある程度迄、作家に同感するのが至當であらうと思ふ。即ちそれには、多少の忍耐と克己とがなくてはなるまい。

## 第二章 道義精神を基礎とした傳奇

### 文學(讀本) (上)

#### 一 京傳の傳奇小説

如上、讀本の特徴を概観したが、續いて京傳の傳奇小説に言及し、それから馬琴に及ぼう。本來、寛政の改革によつて、京傳が所罰されなければ、黄表紙、殊に洒落本の作者として終始するのが、彼れの本領であつた。ところが、身邊の事情が右の如く一變した爲め、彼れは文學的轉身術を行ひ、讀本作家として起つたのである。

京傳の讀本は左様多くない。全體で十餘種である。勿論、合卷の方は、大分多く書いた。彼れの晩年即ち文化十一年から十四年迄は、合卷のみを書いてゐる。讀本は文化十年に書いた『双蝶記』が、その最終作だつた。今、讀本の類を挙げると、左の如くである。

- |            |      |            |      |
|------------|------|------------|------|
| ○忠 臣 水 滸 傳 | 寛政十年 | ○優 曇 華 物 語 | 文化元年 |
| ○復讐奇談『安積沼』 | 享和三年 | ○櫻姫全傳曙草紙   | 文化二年 |

○梅 花 氷 烈	文化三年	○本朝 醉 菩提	文化五年
○昔話 稻妻 表紙	文化三年	○浮 牡丹 全傳	文化六年
○善知鳥安方忠義傳	文化四年	○双 蝶 記	文化十年

馬琴が讀本を書いたのは、寛政七年で、『高尾船字文』を上梓した。それから三年後に京傳の『忠臣水滸傳』が出来た。それが讀本に於ける彼れの處女作とも云ふべきものであつた。この一篇を作るために、京傳は相當の苦心をしたらしく、讀本に新天地を開かうとした意氣込を思ひ遣ることが出来る。水滸傳を日本的に翻案したものに、綾足の『本朝水滸傳』があるが、拙劣にちかい出来であつた。京傳は『假名手本忠臣藏』の世界を水滸傳化して、可笑味ある作品とした。そこに久しく黄表紙、洒落本などを書いた習慣が残つてゐたのであつて、彼れの過渡期の産物たることを示した。

その内容は高師直（高休）が名香薫る新田義貞の兜を地中に埋めて、その英靈を慰めようとした時、鹽谷高貞、高師直が事を司り、穴を掘ると、地中から一個の石櫃が出た。慾に目のない師直は、多分、黄金を入れてあるのだらうと推したが、能く見ると蓋に「遇高石開」の文字があつた。依て尙ほ發掘すると、それは石櫃でなく、非常に深い地坑で、一聲の轟音と共に四十餘の妖星が現はれ、四十七士の生れる前兆を示したといふのが發端である。第十回目のところで大石由良が江州石山に部下の勢揃ひをして、鎌倉に向け出發するところは、宋江が梁山泊で同志を集める趣に擬したといふわけで、萬事、理窟ぬきの可笑味を主とした作

だつた。京傳はそれに先立つて、既に水滸の趣向に擬した洒落本『通氣粹語傳』を出してゐるので、大體こぢ付けではあるが、軽いユウモアを含み、讀者間の氣受がよかつたのである。

馬琴が『作者部類』で本篇の高評なることを述べ、「かゝる新奇の物を見ると云ふ世評高かりしかば、多く賣れたり。此頃よりして讀本漸く流行して、遂に甚しくなるまゝに、京傳の稿本を乞ふて板せんと欲する書買少からず。」と云つた。かうして京傳が讀本に於ける初陣も、幸ひに成功したのである。依て彼れは氣乗りがして、更に俳優小幡小平次の怪談を描いた『安積沼』を公にしたが、これ又相當の賣行を見た。この順潮に應じて彼れは『優曇華物語』を刊行した。ところがその讀者受けは餘りよくなかつた。その内容は皎二郎、雪兒といふ美男美女が双思の間柄となり、同じく親を殺されたその敵が同一人だつたのを共に目出たく復讐したといふのである。馬琴は「趣向拙きにあらねども、挿畫の唐様なるをもて俗客婦幼を樂まするに足らず。此故、當時不の字なりき。」と云つた。「拙きにあらねど」と婉曲に評したところは、馬琴としては、聊か手加減を加へたものと思はれる。

一體、京傳の讀本は馬琴ほど、手に入つてゐなかつた。『櫻姫全傳曙草紙』は彼れの傑作とせられてゐるが、徒らに怪奇を街つたところがあつて、京傳の洒落本に於けるが如き自然の妙味を缺いてゐた。その内容は清玄、櫻姫の歌舞伎劇を作り直したもので、時代を後鳥羽院の治世とし、史實らしく粉飾してゐる。それは、丹波地方に鷲尾義治といふ相當の武士があつたが、夫婦の間に子がないので、玉琴といふのを妾とした。

やがて玉琴が妊娠すると、本妻野分の方はそれを妬み、篠村兵藤太をして窃かに玉琴を殺さしめたといふに端を發する。玉琴の屍は河中に投ぜられたが、その身體から男兒が生れた。それは通行の修驗者の手に救はれる。(この男兒が後に清玄となる)

その後、野分の方も妊娠して、一女櫻姫を生んだ。才貌共にすぐれてゐるので、信田平太夫勝岡が、かの女のもとへ結婚を申込んだが、拒絶せられる。彼れは大に怒り、櫻姫が京都へ出て、花見をしてゐた時、かの女を奪はうとさへした。この時、櫻姫の危難を救つたのは、美男伴宗雄である。茲で二人の戀が成立つ。ところが、京都の花見の折、清水寺の僧清玄が櫻姫に懸想し、煩惱の奴となつて墮落し始める。一方、櫻姫は又宗雄と別れてから、愛人のことをおもひつめ、病氣になつたので、宮脇村の館で靜養するに及び、偶々隣家に住んでゐる、宗雄と逢ひ、暫く楽しい日を送つた折柄、復讐心に燃えた信田は俄かに鷲尾家を攻め亡したので、櫻姫は悲觀の餘、病臥し、一旦、呼吸が絶えたところを漂泊中の清玄に救はれる。清玄はその際、櫻姫を挑み、戀を成就せねばやまぬといふ。そこへ折よく、修驗者が通りかかり、清玄を打殺して、櫻姫を救つたが、その修驗者こそ鷲尾家の舊臣で、曾てその人が拾ひあげた玉琴の子こそ清玄だと知れた。その後、伴宗雄は忠勇の士をあつめて、鷲尾家の仇を倒し、萬難に打勝つて、櫻姫と結婚する。ところが、玉琴の怨念が姫に禍し、離魂病——一身に兩體を現する奇病——に罹つて苦められ、到頭、世を去る。宗雄は生をはかんで發心し、姫のあとを弔ひ、また野分の方は不義の天罰によつて雷死するといふのである。

全體の結構が複雑で筋が變化に富み、而も前後よく統一せられてゐるが、天衣無縫の妙なく、斧削のあと歴々たるものがある。且つ既に述べたやうに、支那小説の趣向を借り、故らに怪奇を街つてゐる氣味があるので、どうしても作りものだといふ感じがする。人物の性格は野分の方が少しよく描かれてゐる位のもので、他は類型的に墮し、機械化せられた傾きが見える。が、善因善果を呼び、惡因、惡果を生むといふ具合に層々、波瀾を起して、結局、幕を閉ぢるといふところが、當時氣受けの宜かつた一因であらう。

それ以後、京傳が公にした讀本は、大體に於て、評判よく、演劇にも往々、上演せられて、彼れの名を一層高めたが、事實、作としての價値は、『曙草紙』以上に出ない。京傳は洒落本禁止に懲りて、勸懲主義に移つたが、その實、彼れは馬琴ほど眞面目でなく、唯當りを取りさへすればよいといふ態度で、多く演劇の材となつたものを小説化し、奇怪、苛酷、殘忍の事件を濫用して徒らに讀者の好奇心を挑撥し、大向から喝采を浴びるのを會心事としたかの如く見える。茲に至ると、彼れは勸懲の假面にかくれて讀者に不良の感化を及ぼし、且つ自己の藝術的生命をおのづから稀薄にしたものと云はねばならぬ。

## 二 京傳の新趣向

今、主要な讀本を一瞥すると、文化三年に出た『稻妻表紙』が先づ眼に付く。それは近松の『傾城返魂香』及び芝居する不破、名古屋の狂言などを材料として、纏めあげたものだ。全部を二十回に分ち、回毎に場

面を變化し、事件の目先をも一變するといふのが、京傳の工夫であつたらう。その内容は大和の佐々木家に起つた御家騒動を背景とし、名古屋山三郎、六字南無右衛門（前名、三八郎）らの忠臣と佐々木の執權道犬及びその一子不破伴左衛門ら一派の奸臣との葛藤を叙し、それへ三八郎に會て殺された白拍子藤波の怨念の祟りを搦ませ、結局、忠臣勝つて奸臣亡び、佐々木家再興に至るといふ筋である。尙ほ最後に、不破のために父を殺された名古屋山三郎が、廓で不破に復讐し、佐々木の執權となるといふ事を添へ、遊女葛城の不幸な死、軍師梅津嘉門の活躍などでこれを彩つてゐる。

本篇は可もなく不可もない程度の作であつたが、讀者受けがよいので、文化五年、大阪の中座、角座で上演せられ、文政六年、江戸の市村座でも演ぜられたのみならず、京傳が本書の口繪に入れた名古屋の衣裳——雨中飛燕の様子が面白いので、その儘、歌舞伎の舞臺姿とされたのであつた。

その次ぎに出た『善知鳥安方忠義傳』は謠曲『善知鳥』に暗示を得ると共に、平將門の一族のことに結び付けたもので、將門の子、良門、瀧夜叉の二人が亡父の志を繼いで兵を擧げると、忠義の士、善知鳥安方がこれを諫止し、到頭良門の手で殺されたが、忠魂尙ほ良門の身邊から離れぬといふのである。それから最後に良門が刀を抜いて追ふと、忠魂化して鳥となり、何處へか飛び去つたといふので結局してゐる。茲に至つて京傳の作は一層、邪路に陥つたが、奇を求める讀者はこれを喜び、『曙草紙』同様の賣行を見たと言はれる。それに次いで文化五年、『稻妻表紙』の後篇『本朝醉菩提』が出た。本篇は支那小説『醉菩提』や一休の

傳記などを材料として、一休を主役とし、前後十景の場面を展開してゐる。首尾必ずしも一貫せず、四五の短篇を並列した形を執つてゐるが、最も興があるのは第五回（俠客提婆達多品第六）で、俠客野晒悟助が上十五日は出家生活、下十五日には俠客の生活をして、前者で忍辱の戒を守るが、後者では思ふ儘に活躍するといふのである。かうした趣向は世の歡迎するところとなり、戯曲『醉菩提悟道野晒』を生むに至つた。この篇を馬琴が書いたら、必ず全體を統一したであらうけれども、それをしないところに京傳らしい趣が見える。

最後に目についたのは、『双蝶記』である。本篇は竹田出雲の戯曲『双蝶曲輪日記』に趣向を借り、山崎與五郎、遊女あづまを中心として、京傳一流の老巧な筋立を示したものである。いつも漢文の序を用ふるのを今度は通俗文と爲し、卑近平易なスタイルを以てこれを綴り、そこに讀本に於ける一新體を示さうと企てた。その世話狂言風の點を自ら得意とした様子を見ると、彼れが漸く一轉化しようとした傾きがほの見える。これが最後の讀本となつたのであつた。

京傳が不得意とする讀本に於て、馬琴と拮抗し、兎も角、その面目を維持し得たのは、彼れの才分が優れてゐた爲めで、そこに旺盛な彼れの創作力を見ることが出来る。けれどもその黄表紙、洒落本に於けるが如く、それは、ユニークなものでなかつた。相當俗受けしたといふものの、藝術的香氣に乏しく、不自然に過ぎたもののみと云つてよかつた。それ故、彼れは漸く茲に自省して、何等か新展開を爲さうとしたが、それを

たさぬうちに、文化十三年九月、五十六歳で卒去したのである。

### 三 苦學した曲亭馬琴

京傳の歿後、文壇の覇權は漸く馬琴の掌中に歸さうとしてゐた。文化十三年には、馬琴の大作、『八犬傳』第二輯が世に出て、正に文壇の第一人者たる概を示しつつあつた。その讀本は寛政七年から天保十三年迄に四十八種を出し、多くは長篇ものである。それらを全部通觀することは容易でない。その絶大の精力と雄偉の氣魄とは古來、稀れに見るところである。

曲亭馬琴は旗本松平信成の用人、瀧澤興藏の季子として、明和四年、江戸深川に生れた。その名を解（字は鎖吉）と云ひ、通稱を倉藏と稱したが、別號が多く、著作堂主人、玄同陳人、太榮山人、莖笠その他數種を用ゐた。彼れの少年時代及び青年期は、艱苦そのものの如く、始終、不自由のうちに日を送つたが、彼れの意力はこれがため鍛鍊せられ、後年の大成に資するところがあつた。

彼れの『獨語小録』によると、『獨學固陋なれども、性として年甫の六七歳より、畫冊子を好み、筆把技（よるわざ）を嗜めり。こゝをもて、いまだ學ばざれども、いろは四十七字を覺得て畫冊子などは拾ひ讀にしたり。當時、母大人、冊子物語と淨瑠璃本を見ることを嗜み玉ひしかば、解も亦是を受讀ものゝ、いくらなるを知らず。年十一二歳に至るまで、當時印行の淨瑠璃本は熟讀せずといふものなし。』とある。それによれば、彼れの文學

趣味は、この母から傳へられ、早くからこの方面の知識を吸収したことがわかる。

その頃、馬琴の家は彼れが九歳の時、父を喪つてから、漸く生活上の窮乏を來たした。その爲め苦學した事情に及び、『軍記を見まく欲するに、見料に取らすべき錢なければ貸本屋のために寫本の筆耕して、その筆耕と見料と交易しつゝ、和漢の軍記を多く見たり。』と述べた。

これより先、馬琴は十歳の時、松平信成の家に仕へたが、主人の長男で瘋癲を病むものの附人とされたので、流石に我慢しかね、十四歳でそこを去り、翌年、長兄の推舉で戸田大學忠誠に仕へた。爾後、二十四歳の時分になつて、文學に志す迄、二度ばかり、主を代へ、また山本宗英に醫術を學び、漢籍を龜田鵬齋について修めたがこの方面で一家を爲すところ迄ゆかなかつた。結局、幼少から好きな文學を以て身を立てようと決心するに至つた。かくて彼れは寛政二年、戯作『盡用而二分狂言』を書き、それを出版するため、書肆甘泉堂の紹介により、山東京傳を銀座に訪うた。

その初對面の印象を後年、記述して、『一見舊知の如し、その好む處同じければなり。』と云つた。馬琴は士族、京傳は町人であつたが、共に深川生れであつたから、『互に拍掌して奇遇とせり。』とも云つてゐる。その時、京傳（三十歳）の推薦で、馬琴（二十四歳）の處女作は京傳門人、太榮山人のペンネームで甘泉堂から出版されたが、この無名作家に注意するもの少く、殆ど何の反響も聞かない。馬琴はその頃、生活上の都合で一時、神奈川に流寓し、寺僧に代つて手習師匠をしてゐた。

その後、寛政三年秋、大風雨のため、洲崎、深川邊が海嘯に見舞はれたと聞いて、急に歸京し、京傳が筆禍に罹つて、閉居してゐる旨を聞くと、すぐ京橋に彼れを訪うた。その折、馬琴は京傳の勧める儘、そこに留り、黄表紙『實語教幼稚講釋』二卷、『龍宮羶鉢木』三卷などを代作し、寛政四年及び五年に、京傳の名で出版した。他に『花春風道行』(寛政四年)を公にしたが、その自序には、「京傳門人」と記した。この時代から疎放な行ひを漸く改め、堅實に世渡りをしようと思つたらしく、「年二十五の時より志を改めて行狀を慎みつ」と云つた。

#### 四 馬琴の人物とその生活

爾來、馬琴は年々、その作を公にしたが、一時、書肆萬重のもとに寄寓し、『鼠兒婚禮塵劫記』、『御茶漬十二因縁』、『白花園子食子物語』、『荒山水天狗鼻祖』などを馬琴の名で寛政五年に上梓したが、尙ほ馬琴門人魁雷子の匿名で、同じ年に『銘正夢楊柳一腰』、『登坂寶山道』(『増補伊賀物語』)なども出版した。かうして馬琴は新進作家の列に入つたが、やがて世話するものがあつて、二十七歳の時、飯田町二丁目の伊勢屋(會田氏、履物商)の寡婦お百のもとに入聲となつた。お百は馬琴よりも四歳の年長で、その上、我儘な、ヒステリックな女だつたが、地所、家作を持ち、裕福に暮してゐるといふので、入夫となることを承諾したのである。蓋し文學では、相常の名聲を得る迄、生活が困難なため、熟考の上、かく決したのであらう。

當時、馬琴は身邊の俗事多忙を極めたので執筆の暇もなく、寛政六年には、『福壽海無量品玉』を上梓した丈であつた。その翌年も『心學晦莊子』、『四遍摺心學双紙』及び最初の讀本『高尾千字文』の三種を出したに過ぎぬ。が、馬琴二十歳の時、姑が世を去つたので、茲に始めて好まぬ履物商をやめ、讀書習字の師となる傍ら、著作を勵んだ。その並すぐれた健康と旺んな精力とは、馬琴をして著作に倦むことなからしめたが、文化二年頃迄は、いづれかといふと、無自覺時代を續けたと云つてよかつた。即ち京傳らの歩いた道を後から追うたといふ形で、花街及び歌舞伎讚美の心持が、より多く馬琴を支配してゐた。彼れが享和三年に書いた『曲亭傳奇、花釵兒』の如きも、芝居脚本に擬したもので、彼れとても、まだ獨自の見識がなかつた。

馬琴が勸懲主義の傾向を示したのは、文化二年に出した『稚枝鳩』などからであつたらう。それには孝子烈女の事蹟を傳へるため、右の作品を書いた旨を記してゐる。更に文化四年出版の『弓張月』後篇には、主人公爲朝のことについて、「武勇弓勢の世に勝れたるのみにあらず、孝悌忠信の志厚うして、深く義を重んじ博く仁を施し……」云々と勸善の旨を序文中に洩してゐる。その頃から、馬琴の自覺時代が始まり、進んで勸懲の大旗を翻すに至つたものと思はれる。

馬琴がその大名を馳せるやうになつたについては、その八十二の長壽を保つた健かさにもよるが、意志が強くて、勤勉で、規律正しく、日用を節して名著を購ひ、且つ品行を慎んだ爲めであつたらうと思ふ。彼れの妻お百は我儘な上に學問がなく、馬琴の文學的事業に對しては無理解であつた。そのヒステリイが嵩ずる

と、大聲あけて、わめくといふやうな女だった。馬琴は先づこの點について忍耐したのである。また馬琴の一族は皆薄倖だったので、馬琴は早く長兄、次兄に別れ、後には、その頼みとした長男をも喪ふといふ具合に、兎角、家庭的に恵まれなかつたけれども、彼れはこれをも忍耐した。それは意志の力が強くないと出来ぬことである。

それから馬琴の精力は無限そのものの如くであつた。朝、六時頃に起き、夜、九時頃に就寝する迄、原稿執筆と讀書に大部分の力を注ぎ、その餘力を以て、緊要な家事を處理したり、續々訪問し來る書肆を相手に話したりしたが、日毎の出來事を書留めて置く日記の如きも綿密を極めて、些細のことでも記入した。年中多くは家にゐて、机によりかかり、病氣以外は、一度も懈怠したことがない。それに文學者に似ず、數理に明るく、理財の道にも長じ、その藏書は一萬卷に達したといはれる。

以上は馬琴の長所であるが、その性格は人に好かれる方ではなかつた。彼れの剛愎高慢は少年時代からの特性で、賢明な彼れの母はこの事を憂ひ、卒去の際、特に遺言して彼れを戒めたほどである。けれども彼れは、中々、この習癖を改めず、名が高く揚るにつれて、それが一層、甚だしくなつた。その上非常な氣むづかし屋で、嚴格、規帳面に事を處理しないと、満足せぬ風があつたので、何人にも窮屈な感じを與へたらしい。それに世辭が丸でなく、ブツキラ棒式で、氣に入らぬことは、ずんずん云つてのける方だったから、遠隔の地にある人々を除くと、馬琴と長く交りを續けたものが殆どなかつたのである。

蓋し馬琴の身邊近くゐるものは、勢ひ彼れの癖が、いつか眼につくので、自然、彼れから離れざるを得なかつた。數十年、彼れと交つた山崎美成、屋代弘賢さへ、到頭、馬琴と手を分つて了つた。それらは江戸にゐたからのことであらう。ところが、讃岐の木村默老、越後の鈴木牧之、伊勢の殿村篠齋、同樂亭(琴魚)、小津桂窓らは、江戸から離れて、度々、馬琴と接せぬところから、存外、その癖も目につかず、自然、交際が永續したのであらうと思ふ。

馬琴の不人望は、そこから來てゐるが、一面から考へると、その剛愎があつたればこそ、彼れの文學的事業を完成したのだとも解釋される。その高慢とても、極度に自負心、獨立自助心が強いからのことで、それだけに彼れの精勵、勤勉も亦異常卓越であつた。何れにしても、彼れがすば抜けた人物だつたことは否定出来ない。

## 五 馬琴の精神生活

馬琴の作品は非常に多く、讀本以外にも、黄表紙、合巻物などが少くない。けれども馬琴の本領は、云ふ迄もなく、讀本の上にあつた。勿論、何事も自慢しなければ措かぬ彼れのことであるから、既に述べたやうに、黄表紙の上に於てさへも、獨自の妙があつたと思つたらしい。合巻物とても、彼れが他に優つてゐると、内心、自慢したかも知れぬ。勿論、この點は、京傳、三馬、種彦らに及ばぬと覺悟したらしく、その友人殿村に與



へた手紙に、「合巻は戯作の才あつて學問なき人の作よく候。京傳存生の内はいつも合巻にては、おちをとられ候。種彦并に前の三馬など、實に合巻の大作者に御座候。かくいへば、いかゞはしく候へ共、拙作などは、合巻にてはつじつま合過ぎて却てよろしからずと覚え候。御一笑御一笑。」と記したのを見ても、この點は流石に自分からあきらめを付けたものと察せられる。

結局、自他共に、馬琴の本領としたのは讀本であつた。そして馬琴の文學的生涯を、(一)無自覺時代、(二)自覺時代、(三)大成時代に分つとすると、讀本は即ち自覺時代からの産物で、それが圓熟に達したのは第三期——大成時代のことである。この點、田山花袋氏が浪漫主義から自然主義に改宗したのと略ほ趣を同じうしてゐた。晩年の花袋氏が行詰つて、象徴的、神祕的方面に何ものをか求めようとして果さなかつたやうに、馬琴も『八犬傳』完成後、何等か一轉歩しようとしたが、まさか人情本のため追へず、いくらか苦悶しつつ世を去つたのであつた。その苦悶は『美少年録』の出版によつても、略ほ察せられよう。

花袋氏のことは暫く措いて、馬琴の本領、特色を知るには、讀本によるのほかはない。が、唯漫然として現代的立場から、彼れの讀本を讀むとすれば、徒らに疲勞と倦怠と退屈とを感じるに過ぎないかも知れぬ。どうしても、馬琴の思想を頭に入れて置かねばならぬ。ところが、この點を逸すると、津田左右吉氏の如く、極力現代的立場から馬琴の小説を非難(『文學に現はれたる我が國民思想之研究』平民時代中卷)することになる。

また内田魯庵氏の如きは、「馬琴は大近松と並行すべき文豪だ。」と推奨したが、その何故に然るかを思想方面から説かぬので、獨斷偏見であるやうに感ぜざるを得ぬ説(興文社本『八犬傳』下卷)もある。皮肉屋の魯庵氏が、右の如く信じたについては、無論、相當の理由があつたにちがひないが、氏はベエジの制限のためか、また思想上のことを鹿爪らしく説くのを避けたかして、何も云はぬ。けれども私の推測するところによると、思想上から馬琴の價値を歴史的意義から認めてゐたのでなからうかと思ふ。

茲に至ると、藤村作氏の『馬琴研究』(新潮社版『日本文學講座』第九卷)は、思想側から馬琴に同情した點が見える。唯説いて詳しからぬのを物足らなく思ふだけである。幸ひ塚越停春樓氏の『瀧澤馬琴』に於て、少し詳しく觸れてゐるのを見る。停春樓氏の考へは、大體に於て、藤村氏に似てゐるが、少しく馬琴を讚美し過ぎてゐた。

正直にいふと、私は馬琴の人物を心から尊敬するが、その作品は餘り好かぬ。その大作といはれる『八犬傳』ですら、讀むうちに退屈を感じる。一つは非常に長いためでもあるが、描寫にうま味がなく、その人生、人間を機械的に見る點に頗る嫌らぬからだ。それは現代の讀者も同感する點であらうと私は信じてゐる。けれども左様した立場からのみ馬琴を見るのは穩當を缺く。彼が一個の哲學を持ち、その哲學からユウトピアを築き、そこから出發して、彼れのイデオロギイ及びテエゼを説いた點について、相當、理解することを要する。でなければ、馬琴の小説は讀みにくいものとなる。勿論、『美少年録』、『俠客傳』、『三七全傳南柯夢』

『旬殿實々記』などは、或程度迄、無條件で相當興深く見られると思ふが、その他は——八犬傳でさへも——馬琴の思想生活を理解し、多少の同情を彼れによせぬ限り、甚だ讀みづらい。京傳の讀本とても、いくらか左様しなくてはならぬが、内實、思想的に無主張だつた彼れは除外して置かう。

一體、文化文政期前後に現はれた江戸の作家は、馬琴が出現するに至るまで、無思想、無主張に近かつた。花街哲學ともいふべき「通」の思想はあるにしても、それは、遊戯氣分が多く、眞面目な考へと見られないところもある。また彼等のうちには、漠然とした中にも、教訓の意を示さうとしたものもあつたが、それは附けたりで、馬琴の如く、一定の主義、主張に立脚したものではない、淺くとも、支那的であらうとも、眞に思想らしき思想、主張らしき主張を有した先驅者は曲亭馬琴であつた。

馬琴が茲に先驅者となつたのは、時勢によるところがある旨を既に繰返して述べたが、さて馬琴その人の心境に即して見たら、どうであらうか、この點を考察したいと思ふ。一體、馬琴は明和四年に生れて、その青年期には洒落とか滑稽とか通とかいふことを主とした時代の空氣を呼吸し、黄表紙、洒落本などの全盛裡に彼れ自らも陶醉したのであつた。それ故、彼れは仲兄興春と共に、狂歌に耽り、狂名を山梁貫淵と云つた時代もある。また北廓の花に戯れたらしいこともあつたらしく、「流れてはこゝも妹背の中の町、よし野の花のよしやし原」と詠み、花街讚美の聲をあけた頃もあつた。

それ故、彼れは最初から儒學や武士道で固められた説教家ではなかつた。京傳の如く、吉原に入り浸るや

うなことはしなかつたとしても、稀れには北廓に遊んだこともあり、通とか粹とかいふことも、他人の趣味とのみ解した木強漢でもなかつた。その青年期に京阪へ志した途中、神奈川に流寓した時の如きは、一步を轉すると、放蕩無頼の人となりやすい危険時代に逢着したのであつた。彼れが「解、不肖といへども、年二十五の時より、志を改めて行狀を慎みつ」と云つたのは、相當深い意味がある。即ち馬琴は危険期を突破して、翻然、眞面目な新生涯に入つたことを、自ら語つたのである。

馬琴が二十五歳で新しい生涯へ入つた頃は一方に本居宣長の日本思想が勢を占め、また他方では、その前年、官學（朱子學）以外の支那哲學諸流派を禁じたといふ劃期的な思想政策が斷行された。更に林子平の『海國兵談』が寛政二年に刊行せられ、高山彦九郎が勤王主義の實現に努力したことなどもあつて、時代は漸く變化、進歩の道程を歩んでゐた。それから文壇では、洒落本禁止の事があつて、京傳が一轉歩を試みようとし、三馬、一丸などが相次いで、その處女作を公にしようとしてゐた時代だつた。

## 六 馬琴の政治的ユウトピア

馬琴の改心は、唯文學者たる決心をした爲めといふよりも、朱子學が流行して、儒教思想が勃興し、且つ眼前に彼れの先生と仰いだ京傳が洒落本で嚴しく所罰された事を見て、深く考へるところがあつたからだらうと思ふ。それ以來、彼れは禁煙禁酒——但し老境に入つて夜の退屈をまぎらすため喫煙した——し、花柳

の巷へも足を踏み入れなかつた。この點、當時の小説家とは全く流風を異にしたのである。

そんなら、彼れの文學は最初から、儒教思想を反映しなければならぬのであるが、事實、花街趣味、劇場趣味を帯びたのは、まだ文學上、時流の傾向を追はねば、容れられないと思惟したからだつた。現に彼れは最初、續々、黄表紙を書き、それを正しい道だとしたのであつて、始めから一躍して、勸懲主義の大旗を翻し、文壇に呼號するに至らなかつたのが寧ろ自然の過程である。勿論、彼れの黄表紙は、京傳などちがひ、堅苦しいところがあつて、何となく、小學校の先生が生徒相手に可笑味をいふ趣があつた。それ故に、割合に輕佻、浮薄の氣がなく、家庭童幼の讀物にふさはしかつた。

かくして馬琴が勸懲主義を提唱するに至つたのは、一面、京傳の『忠臣水滸傳』、『安積沼』などから刺戟を受けたにより、一面、彼れの讀書、講學の結果によると思ふ。そのユウトピアを形造り、イデオロギイ、テエゼを確定したのも、おのづから、思想の展開に待つところがあつたと解釋して差支へあるまい。

馬琴の思想は孔孟二子及び朱子などから來てゐた。その仁政についての考へは孔孟により、その人性説は朱子などによつた。孔孟が唱へた仁義の精神を社會、國家の上に實現するといふのが支那の經世家、哲學者らの考へだつた。馬琴はこの點に心から共鳴し、合せて朱子の人性説が孔孟よりも一段精密で、心理學的解釋の宜しきを得てゐるのに一致したのである。それ故、馬琴のユウトピアは、儒教から生じたもので、彼れの創造、發明したところではなかつた。従つて、その説くところ、語るところは、先覺者の言葉以上に出

ない。否、寧ろその受賣りに過ぎぬ氣味さへもある。

けれども當時の小説家で、治國平天下の理想を抱いて、これを小説に寓したものが一人だつてあつたらうか。よし、それを小説に寓せずとも、想を茲によせたものがあつたらうか。實は一人もなかつたのである。

京傳は勿論、一九、三馬、種彦らにも、かうした點を見出すことが出来なかつた。それ故に、たとひ、彼れのユウトピアが、その深い思索、力強い體驗の所産から、おのづと展開されたものでないにもせよ、當時の小説家中、かかる思想を有したものがなかつたといふ意味で、いくらか新しいもの、光彩あるものとして差支へなからうと思ふ。

若し馬琴が江戸幕府の政治に對して不満を抱いてゐたならば、彼れの政治的理想は、もつと光彩あり力あるものとなつたであらうが、武士階級に屬して、當時の社會制度を是認してゐた彼れとしては、そこ迄ゆかなかつた。それ故、生ぬるいところ、徹底せぬところがあるけれども、政治方面に直接の交渉を持たぬのだから、この程度以上に出ることは、到底困難であつたかも知れぬ。

馬琴の政治的ユウトピアは『八犬傳』に於て、略ぼ遺憾なく示されてゐる。『八犬傳』といへば、すぐ八犬士を連想し、彼等を中心とした傳奇小説であると思ふが、それは一面の見方で、全面の見方でない。本篇には八犬士を統率する里見義實父子が存在して、その政治的理想を安房國に實現し、新建國の典型を示したといふ重要點が、本篇を價值付けてゐると私は考へる。若し『八犬傳』が唯八犬士のロマンスを綴り、八徳(仁

義禮智信忠孝悌を象徴するにありとするならば、左程の意義がないのである。ところが、右の八徳を象徴する八犬士を統率して、仁義の軍を起し、徳治主義の政治を行つて、所謂王道を安房に具現したといふことがあつてこそ、始めて意義を重くする所以となる。

里見義實は馬琴が胸中に描いた理想的人物で、彼れの父、季基は足利持氏の遺孤を守つた結城氏朝の義舉を助けた爲めに、これに殉じた。依て義實は老臣二人を従へて安房に渡り、獨力でその新しい運命を開拓しようといふ結果、神餘長狹介光弘を殺して城を奪つた逆臣、山下柵左衛門定包を誅し、茲に平郡、長狹二郡の主となることが出来た。これが即ち義實の新建國に第一歩を踏み入れた時で、その義軍を起したについての述懐中に、「それ兵は凶器也。徳衰へて武を講じ、澤足らざれば、威をもて制す。これ已むを得ざる也。城を收め、地を争ふも、民を救はん爲なれば、我れ樂みて人を殺さず。」と云つた。

戦争は仁義實現のためでなければ、決して起さぬといふのが、義實の志で、「古への聖王良將、仁義の軍を起すものから、詭りをもて捷つことを圖らず。」ともいひ、孫吳の兵法は戰國の習俗で、一種の詭道だとした。また義實は味方の糧食を得るがために農民を苦めることを嚴禁し、「我が龍田（山下定包の城）を攻むることとは、民の塗炭を救はんが爲也。然るを今その農を奪ひ、その麥を掠め取りて兵糧となす時は、人を食ふて身を肥す虎狼に等しからずや。加以長狹の農民催促に従はで、彼處に兵糧と、のはすば、是吾が徳の至らぬ所、速に退陣して、徳を修め、民を撫で、時を待つて龍田を攻めん。」と云つた。

それから義實が龍田城を占領すると、米倉を開いて民衆に頒ち、「民はこれ國の基也。長狹、平郡の百姓等従來、惡政に苦みて、今逆を去り、順に歸せば、飢寒を脱せんが爲ならずや、然るを我亦貪りて彼の窮民を賑さずば、そは定包に異らず。倉廩に餘粟ありとも、民皆叛き離れなば、孰と共に城を守り、孰と共に敵を禦がん。民はこれ國の基也。」と云つた。

即ち義實が安房で行つたのは王道政治である。王道政治の尙ぶところは、大義名分といふことであらねばならなかつた。それ故、義實は略はその志をとけると、大江親兵衛を京都に派して、朝廷に誠を捧げ、禁裡へ金壹千兩を奉獻した。

かく見來ると、『八犬傳』は、馬琴の政治上に於けるユウトピアを描き、合せて、これを支持するイデオロギイ（八徳）とテエゼ（仁政を基本とする救民策）とを表現した一種の理想小説だといふことが出来る。かういふ風に『八犬傳』を解釋して、馬琴の思想的立場を呑込んで置かぬと、『八犬傳』の興味は半ば失はれる。

## 七 馬琴の人生觀及び人間觀

次ぎに彼れの勸懲主義の性質を理解するには、勢ひ彼れの人生觀、人間觀に味到しなくてはならぬ。それらは主として儒教及び佛教から來てゐる。彼れは、その七十七歳のときに書いた自叙傳に於て、「儒學、國學、諸子百家の書、醫書、佛敎、稗史小説に至る迄窺はざる所なく、萬卷の書を看破つたるのみ。」と云つたが、

その最も傾倒したのは儒教であつた。

一體、馬琴の學問は深くはなかつたが、該博な點では、小説家中、彼れに及ぶものがない。その隨筆『玄同放言』(文化十四年——文政二年)を見てもわかる通り、あらゆる方面に亘つて、知識を持つてゐた。若し馬琴が現代に生活するとしたら、精神科學、自然科學の一切を研究したであらうと思ふ。かうした具合であつたから、彼れは儒教のみならず、佛教、神道國學などに亘つて、大體の知識を把握してゐた。が、それは雜駁にして統一を缺いたものでなく、それらは皆儒教(主として朱子學)によつて、統一されてゐたのである。

彼れの晩年の傑作『俠客傳』の如きは、多少、國學精神の影響を受けたらしく思はれるが、その他の讀本を見ると、到るところ儒教精神の閃きを見る。それは彼れの口癖であるかのやうに、儒教の持つた精神を不知不識の間に説教するのであつた。それによつて、馬琴が一番、儒教に共鳴してゐたことがわかる。その政治的ユウトピアも、儒教に彩られたのであるから、馬琴の立脚點が主として儒教にあつたことがわかる。

それ故に馬琴の人生觀、人間觀は儒教にもとづくものと見る。彼れは人生に對して儒教的解釋を下し、善は、一時惡のために苦められても、終局に於て、必ず勝利を占めるべきものだと思つた。即ち人生には、善惡の對立があつて、その間に葛藤が演ぜられるが、善によつて人生は維持せられ、善によつて人々は進歩する。善の力は、必ず惡を征服せねばやまぬものだと思つた。勿論、時として惡の力が勢烈しく、善を壓迫するところがあるけれども、惡は人生的に、最後の方となるものではない。善惡相抗するとき、幾多の屈折、波瀾を経

て、到頭、善の勝利が來るといふのが馬琴の人生觀で、つまり、人生は善を實現するために存在するものだとした。

それは馬琴の體驗から來たのでなく、儒教精神から來たのであつた。孔子は、「善を見ては及ばざるが如くし、不善を見ては、湯を探るが如くす。」といひ、孟子は、「惡人の朝に立たず、惡人と言はず。惡人の朝に立ちて惡人と言ふは、朝衣朝冠を以て、塗炭に座するが如し。」と云ひ、また、「善を陳べ、邪を閉する、これを敬と謂ふ。」とも云つた。即ち儒教に於ては、極力、善に與みすると共に、極力、惡を斥けたのである。更に孟子は善榮え、惡亡ぶべきことを確信して、「天に順ふものは存し、天に逆ふものは亡ぶ。」と云つたが、天は至公至正を象徴するから善である。その善に逆らふものは亡びるといふのは、惡の敗北を斷じたのである。

それらの說に考へ及ぶと、馬琴が人生を以て善のために依存するものとし、善のために正しい進みを爲すとしたのは、平生、儒教に共鳴してゐたからで、合せて、惡の敗北を信じたことも亦儒教の旨から來てゐる。結局、人生は善の實現のために存するといふのが、馬琴の解釋であつた。

それから馬琴の人間觀も亦儒教から來てゐる。彼れの考へによると、人性は皆善である。けれども氣質の偏(情慾の發動烈しき意味)のために善が打消され、茲に惡を生ずる。それ故、善人は本來の性を保つ故に善であるが、惡人は氣質の偏に囚はれるがために、善に背く。若し人間が意志の鍛鍊によつて、情慾を制御することが出来るならば、すべて善に終始することが不可能でないが、意志の力弱く、情慾に従ふとなる

と、どうしても、惡に傾き易い。人間のうちに惡が存在するのは、以上の如き理由による。

それ故、人間は八徳（仁義禮智信忠孝悌）を實現するために、各自、力めねばならぬのであるが、その一端に實現しようとせず、惡に終始して、結局、その應報のもとに終りをよくせぬものが随分ある。それは氣質の偏に制せらるるからだ。馬琴は、かういふ風に人間を解釋した。

その上、馬琴は善因善果、惡因惡果を以て、眞理としたが、それは一方、小乗佛教に於ける因果律と關係してゐる。善に對してよき果報があり、惡に對して恐しい報いがあることは、大體に於て事實である。けれども既に述べた如く、絶えず、流轉し、變化する人生に於ては、一概にこれを絶對的のものとして規定出来ない。これをどうするか。馬琴は過現未三世を貫く因果律の背景として、これが根基となるべき宇宙の神秘力を認めようとする。人間と人間との關係に於ては、善人必ずしも善報を得ず、惡人必ずしも惡報を得ぬ状態にあるが、この缺陷を補つて、善惡の因果應報を規制するものに宇宙の神秘力があるといふのが馬琴の所信だつた。

この種の神秘力を描くについて、馬琴の書き方は、不自然な感じを與へるが、その描寫の巧拙は暫く措く。彼れが左様した神秘力の存在を認識し、それがいつも善を擁護するとしたのは事實である。『八犬傳』に於ては、善の具體化たる八犬士に對し、伏姫の靈がいつも彼等を加護した。『弓張月』の源爲朝に對しては、天照皇太神、八幡大神の冥助が常にあつた。更に勤王運動に熱中した楠姑摩姫に向つては、仙女九六媛の冥護があつた。それらは、つまり、宇宙の神秘力を假りに人間の上に具體化したものである。

尙ほ馬琴は、冥々の間に、善惡應報の事實が過現未に及んでゐるものと解釋した。即ち善人は、それが過去の父祖の言動に依つて生じ、惡人が出来るのも、やはり過去に於て、父祖が惡業を積んだ結果だとした。それ故に善の行爲も、また惡の行爲も過現未三世に亘つて、これを結果付けるものだと言ふ馬琴は信じたのである。即ち過去の惡は現在に影響し、現在の惡は將來に影響すると同時に、過去の善は現在に波及し、現在の善は將來にも波及する。因は果をよび、果は更に因を起し、循環してやまぬと見た。

これを『八犬傳』に徴すると、里見家は義に殉じた季基の後を受けて、義實が起り、父の道義的感化を救民、經世の上に實現した。それは過去の善が現在の善を喚起したのである。ところが、義實は既述の如く、逆臣山下定包を誅した折、妖婦玉梓を捕へ、直ぐ釋放しようとしたが、金碗八郎孝吉の言を容れて、かの女を殺して了つた爲めに、玉梓の怨みにより、金碗は不幸の死を遂げた。のみならず、その當座、何心なく發した義實の言が因を爲し、玉梓の化生である犬八房に彼れの最愛の孝女、伏姫を與へねばならなくなつたのである。即ち一の惡因は次ぎの惡果を齎し、次ぎの惡果は更に他に波及する。それと同時に伏姫の犠牲、獻身とかの女の至孝とは八犬士を生む因となり、八犬士はひとしく、里見家の興建を助成して、その福は、義實の子孫にも及んだ。即ち一の善因は次ぎの善果を喚び、次ぎの善果は將來の世界に波及した。過、現、未三世を一貫する因果律は、明かに里見家の上に現前したのである。以上は佛教思想を活用したのであつて、『大智

度論』に、「過去の善種は現在、未來の善法の因たり。過去、現在の善種は、未來の善法の因たり。不善、無記亦是の如し。」とある。またその果についても、種々説くところがあつて、現在に於ける善惡の業は、世を異にして成熟し、必然、その果報を受ける旨を説いてゐる。

馬琴が以上の如き人生觀、人間觀に立脚するとすれば、勸懲主義の成立するのは當然である。大乘佛教によれば善惡不二で、善を越え、惡を越えた絶対眞理の世界に住すべきことを旨とするが、馬琴の見解は小乘教的で、善惡對立の世界を胸に描き、その因果律は、宇宙の神祕力の助けを俟つて、必然、行はれるとしたに止まり、その神祕力から、絶対眞理——超善惡の妙境に迄想到しなかつたのは惜むべきであつた。それに馬琴の考へは、結局、善の勝利を信するところに、明るい感じを浮べてゐるが、善惡の差別見に拘泥するがために、何となく、窮屈を免れぬ。かくして人生、人間を固定的に機械的に規制しようとするに至つては、いつ迄も小乘見を離れぬのである。

## 八 勤王愛國の精神

かく馬琴は主として儒教思想に立脚して、勸懲主義を唱へたが、唯一つ、腑に落ちぬのは、儒教に於て、「怪力亂神を語らぬ」といふ旨が嚴かにあるに關らず、平氣で怪力、亂神を語り、妖異について述べる事が多い點である。彼れが宇宙の神祕力として、その化現たる神佛及び人間の靈異を認めてゐる點も、儒教の立場からすると、少しく妥當でないが、それはまだ宜いとして、怪力亂神を語ることは、現世的、實際的な儒教の旨に反する。

彼れが『三七全傳南柯夢』の冒頭に點綴した、大きい楠樹の精が人間の禍福を支配するといふことは、尙ほ傳說的になづけるにしても、『八犬傳』で赤岩一角に化けた山猫の怪に至つては、滑稽で無意義だ。茲に山猫を點綴する必要はないのだ。更に尼妙春に化けた牝狸の怪を活躍させてゐるのも、子供染みてゐる。『月張月』に於ける鶴の如きも、爲朝に向つて靈夢を示し、彼れに白縫といふ美女を娶らしむることを豫言し、更に琉球に渡ることを示したなどは、到底、信ぜられぬ事柄である。更に『石言遺響』に怪鳥を描き、『行平鍋須磨酒宴』に鼠と龍との怪異を描き、『墨田川梅柳新書』に天狗を描き、『怪鼠傳』に鼠の妖異を描けるなど、これ又餘りに奇に過ぎる。それらは、儒教の旨に立脚してゐる馬琴の主張に相反するものと云はねばならない。

かうした事は、何でも理詰めゆかねば承知せぬ彼れとして、寧ろ不思議に感ずる。或は小説の結構を面白くするための一方便であらうと察せられるが、その實、決して左様でなく、馬琴自身に迷信的なことが多かつた。即ち或意味に於て、彼れは怪力亂神さへ信じた。そこに理窟屋の馬琴にも矛盾した一面があつたことを示してゐる。

彼れの日記を見ると、星祭をしたとか、息子の宗伯が、天狗神に參詣したとかいふやうな記事を散見する

が、その深光寺内の先祖の墳墓を修理する際、鏡空夢幻大師の枯骨を焼くと、灰が散つて、宗伯の身邊にふりかかつたことに就て非常に神経を悩ましたことがある。間もなく宗伯が病んで、久しく床を離れぬのを見ると、大將軍星を犯したためかと思つて星を祭り、或は夢幻大師の祟りであるまいかと迷つて、幽魂を弔つたりした。また馬琴は家宅についての方位、吉凶を一方ならず氣にかけ、四谷信濃坂へ移るとき、卜者から方位がよくないと云はれて、ひどく氣にしたこともある。

日常家庭の些事について往々理づめでゆかぬと承知しない馬琴も、かうした迷信的な點を持つてゐたところに人間味があつたといへるが、思想上、儒教の旨に背いてゐることは、聊か彼れの權威を損するもの云はねばならぬ。

左様した缺點はあるが、他方に於て、馬琴の思想中に、勤王愛國の精神が閃めいてゐると云はれ、或は尊王斥覇の考へが含まれてゐるとされるところは、儒教の大義名分主義と一致する。依田學海氏の如きは、勤王のみならず、馬琴が斥覇思想をも抱いたと強調してゐるが、それは牽強附會に過ぎる。文化文政時代は表面江戸幕府の全盛期で、江戸市民は太平を謳歌したのであつて、馬琴の如きも、自叙傳中に、「二十五六歳の昔より七十七歳の今に至るまで、仕へざれども、凍餓の憂なし。これ併しながら泰平の餘澤なる哉。」と幕府の政治に感謝してゐる。それに彼れは武士階級から出た一人でもあつて、江戸幕府を覇道によるものとして、これを倒さうなどと考へなかつたのは當然である。

が、勤王思想を漠然と抱いてゐたのは事實であるらしい。彼れが活動した時代に勤王思想の運動が徐ろに、地下の眞清水のやうに潜行的に始められてゐたし、頼山陽の『日本外史』などが抒情詩的に勤王の熱情を刺戟する力を以てゐたのだから、馬琴としても、この時代の新傾向に對して、眼をふさいでゐたと思はれぬ。然し乍ら彼れは書齋裡の人で、小説に全力を傾けてゐたのであるから、深くこの方面に思ひを傾けたとは考へられぬ。ましてこれを實行上に移さうなどは夢想だもしなかつたことであらう。

一體、馬琴はいつ頃から左様した思想を漠然ながらも、抱くやうになつたらうか。彼れの創作に於ける初期には、黄表紙のうちで楠正成を揶揄し、中期には『昔語質屋庫』で南朝の公卿が窮地に陥つたことなどを述べて、好感を持たぬ書き方をしてゐた。その邊に矛盾があるが、『八犬傳』を書く頃には略ぼ勤王思想をおほろけながらも抱くに至つたのではなからうかと思ふ。依田學海氏は、馬琴が蒲生君平と親交があつたことから類推して、「君平屢、その家に訪來つて、古を論じ、今を談するに、王室の衰替を歎き、その中興を願はざることなし。馬琴大にこれを稱賛して、當世の豪傑、此人を置きて、他にあらずとす。これによりて見れば、尊王の大義を抱けること、一朝一夕に非ざることを知るべし。」と解釋した。

成程、馬琴が蒲生君平を追想した『蒲の花がたみ』を見ると、君平の心事——本居宣長らと同じく國學を起さうとした事——に同情した様子は見えるが、別段、馬琴自身の思想について語つてをらぬ。即ち馬琴の態度は傍觀的だつた。それ故に、「尊王の大義を抱けること、一朝一夕に非ず。」とするのは、少しく當を得ぬ



と思ふ。

馬琴の勤王思想のあとを徴すべきは、『八犬傳』後段、『俠客傳』その他二三首の短歌などで、何れも彼の晩年に近い頃の所懐である。『八犬傳』には、僅かにその片影を見出すに過ぎぬが、『俠客傳』は明白に楠、新田の勤王主義に深い同情を寄せ、春秋の筆法によつて、その美風を傳へようとする旨を公言してゐる。

『俠客傳』の男主人公は、新田氏の系統を引く館小六助則（脇屋義隆の子）で、女主人公は楠河内二郎正元の女、姑摩姫である。彼等は南朝の悲痛な末路を嘆いて、足利氏の天下を覆さうと計り、種々劃策に力めた。馬琴はこの二人を通じて、勤王のために氣を吐いたのであらうと思はれる。更に馬琴が楠正成について、「玉くしけふた心なき武夫の、鏡なりけりかけながら見よ」と詠み、新田義貞について、「きえてより高きみさはあらはれき、足羽の里の松の白雪」と詠んだのを見ても、勤王運動に對して、馬琴が如何に同感してゐたかがわかる。その他、『八犬傳』後段にある里見義實の勤王については既に手短かに述べたので再説せぬ。

要するに、馬琴の思想には、獨創的なところが殆どない。唯儒教、佛教を繼承して、そこから勸善懲惡の説法をしてゐるに過ぎない。けれども化政期の小説家中に於て、思想家らしい偉あるものを求めるとすると、馬琴一人を擧げるよりほかはない。且つ當時、儒教によつて訓練せられた武士階級のうちには、馬琴と同じやうな考へを抱いてゐたものが決して少くなかつたらう。松平定信の如きも、その一人であつたかも知れぬ。

ぬ。即ち馬琴は、武士階級のうちに於ける相當志あるものが實現したいと憧憬してゐた一個の理想をそのユウトピアの上に反映し、それら武士階級の云はうとするところを代辯した形がある。

當時、江戸市民の抱いてゐた思想、感情は洒落本、黄表紙、滑稽本などに表示せられ、後には、人情本に於て具現せられたが、武士階級全般に亘つての思想、感情を表示したのは讀本であつた。京傳もこれに筆を染めたが、馬琴ほどの自信も、熱もないので、結局、武士階級を小説のうちで始終取扱つて、彼等の考へるところ、感ずるところ、理想とするところを略ぼ遺憾なく描いたのは、馬琴である。それに次いで種彦もあるが、これは、馬琴ほどに力強い表現をしなかつた。

蓋し馬琴は漸く頽廢しようとする武士道に向つて、復活的注射を試み、武士道の上に儒教精神を加味してそこに一個理想の武士道を振興しようとする意氣込を、幾らか抱持してゐたのでなかつたか。彼れが『八犬傳』に於て、八犬士を通じて、八徳の調和統一を説き、典型的武士の面目を浮べ出したのを見ると、どうしても、馬琴が理想の武士道を振興さうとしたものと思はれる。『弓張月』、『朝夷巡島記』なども、理想の武士としての爲朝と朝夷義秀とを描くことに全力を用ゐたのである。即ち武士が儒教精神の醇要を攝取して、新時代の傾向に合致し、文質共にすぐれた人物として起たんことを望んだらしく思はれる。右の意味に於て、馬琴は武士道鼓吹者の一人であり、また山鹿素行らの説く武士道に一脈の聯絡を有した思想を持つものと見てよい。

### 第三章 道義精神を基礎とした傳奇

#### 文學(讀本) (中)

##### 一 讀本に於ける缺陷

馬琴の思想について、大體の考察を前に終つたので、更にその作物を概観する。彼れの作物は彼れの思想に同感を持つものでなければ、その味を解することが出来ぬ。若し單に、藝術鑑賞の態度によつてのみ彼れの作品を考察しようとするならば、唯失望のほかはあるまい。彼れの政治的ユウトピア、彼れの儒教による人生觀、人間觀、佛教による因果律の考へなどを呑込み、その勸懲主義の價値を認めなければ、馬琴の作品は現代の我等に取つて、交渉の少いものとならざるを得ぬ。

それに馬琴によつて描かれた武士が只管、知的、意的に描かれて、情的に描かれてをらぬことなども、現代人の共鳴し難いところであらうと思ふ。事實、日本武士には、情的方面の活動現象が少くなかつた。源義家、源義經などは情的方面にその美點を示したではないか。ところが、馬琴はこの方面について、特に注意を拂はず、知的、意的に武士を描いた爲めに、そこに暖か味が乏しいといふ感じを與へる。勿論、武士道の一特

色は、意志の鍛鍊に重きを置くにあるが、馬琴が激賞した新田義貞の如きは、情的に美しいところを持つた武人だつた。左様した重要素を閉却してゐる氣味があるので、馬琴の描く武士は冷めたい義理一方の人物となつてゐるのが多い。蓋し馬琴その人が理窟的な傾向が強いのと、武士道を儒教化して、何處迄も典型的武人を表現しようとしたため、左様なつたのであらう。勿論、馬琴の作品にも、二三の例外はあるが、大體以上の如き趣に満ちてゐる。それ故、馬琴の讀本に對する時は、この點をいくらか寛容してかからねばならぬ。

今一つ、馬琴の作品を見て、避易させらるるのは、九歳や十歳の男兒女兒が大人ぶつた口の利きやうをすることである。それから遊女屋の主人が仁義禮智信など、道學先生めいたことを云つたり、學問に乏しい市井の遊俠者が儒道を口にしたたり、司直の吏が易の哲學を説き、或は四書、五經を引用したりすることだ。『青砥藤綱摸稜案』(文化九年)、『三七全傳南柯夢』、『美少年錄』、『弓張月』などを見ても、以上の如き實例を直ぐに見出すことが出来る。

それに偶然の出來事を續出して、筋をのばしたり、怨靈が親にも子にも祟るといふやうな事件によつて、曲折を作つたりすることが極めて多い。それは善人は何處迄も善、惡人は何處迄も惡だとしてゐる機械的な人間の見方と共に、往々讀者に不快を感じせしめ、倦怠を覚えしめる。『絲櫻春蝶奇縁』(文化九年)の如きも女子の雙生兒止以子、小草が東西に分れて、境遇、運命のまにまに育つてゆく有様を描いた點は興味のかかるところであるが、この二人の女兒の母曙明が以前、遊女時代にひとり心中をさせた馴染客一八の靈が、曙

明や親子に崇り、種々の妨げをすとしたのは、極めて不自然である。殊に曙明の先夫、五十四塚東六郎が長女小草を携へて船旅の途中、一八の怨念のためその十七回忌の稱月亡日に遠州灘に沈んだとしてゐるなども、例の馬琴の慣用手段で、空々し過ぎると思はしめる。

馬琴の慣用手段は、どの讀本にも出てくるので、一度いやになると、もう讀む氣がしない。『弓張月』は依田學海が第一の傑作だといふ折紙を付けたが、始めから狼、大蛇、鶴、猿などといふ類を點綴して、偶然から偶然へ筋を搬んでゆくところは、子供だましの小刀細工に類して、『弓張月』の價値を高める所以でない。それらを現代人が讀むと、先づ故意に近い不自然極まる道具立にうんざりさせられる。朦雲國師といふ妙な妖術者を描き出して、爲朝に對抗させ、波瀾、曲折を作る手段としたなども、今日から見ると、少しく兒戯に近い感がある。

右の如く、馬琴の讀本に於けるアラを拾ひ出した日には、際限がない。つまり、馬琴にあつては、彼れの抱く思想を一般人に傳へて説教しようとするのであるから、その不自然、その牽強附會は、作者自らの是認したところであつた。藝術的であるよりも、寧ろ道義的であることを、最上の使命とし、必然の任務とした彼れとして、以上に列擧した缺點を有するのは、止むを得ぬことと思ふ。この點についても、馬琴の立場を理解して、或程度迄、彼れに同情することが必要であらう。

そんなら現代人は、馬琴の代表作として、どんなものを讀んだら、宜いかといふ問題が起つてくる。『青砥藤綱摸稜案』後集などは馬琴の作として、平凡の嫌ひがあるけれども、不自然なところが少く、探偵小説めいた作品で、今日の讀者が繕いても、終り迄、快く讀める中篇小説だと思ふ。他に『八犬傳』、『美少年録』、『三七全傳南柯夢』、『旬殿實々記』、『俠客傳』、『弓張月』、『朝夷巡島記』などを讀めば、馬琴の面目を略ほ知ることが出来る。

## 二 馬琴の出世作

馬琴の讀本は凡そこれを三期に分つて見るのが便宜である。第一期は寛政七年頃から文化二年頃迄、第二期は文化三年頃から同十年頃迄、第三期は文化十一年頃から天保十三年頃までである。第一期は彼れの特色がまだはつきり現はれぬ時代で、特に擧げるべき作品はない。強ひて指摘すれば、『稚枝鳩』(文化二年)がある。第二期は彼れの特色を發揚した時代で、代表作には、『弓張月』、『三七全傳南柯夢』(文化四年)、『旬殿實々記』(文化五年)、『俊寛僧都鳥物語』(文化五年)、『青砥藤綱摸稜案』(文化九年)などがある。第三期は彼れの大成時代で、代表作に『巡島記』(文化十一年)、『美少年録』(文政十一年—天保五年)、『八犬傳』(文化十一年—天保十三年)、『俠客傳』(天保元年—同四年)などがある。

以上の作品全體の材料を見ると、(一)歴史及び傳説によるもの、(二)既に戯曲に用ゐられて人口に膾炙せる作品によるものに大別することが出来る。勿論、それらは、爲永春水式に他の作品を半ば借用するが如

きことをせず、全く馬琴の道義精神により、勸懲主義によつて、別箇のものとして了つてゐる。それは丁度、現代の小説家が史上の人物を取扱ふに當つて、現代の精神により、解釋してゐるのと少しも變らない。爲朝の如き、俊寛の如き、朝夷義秀の如き、皆善人は決して悲痛な最期を遂げるべきものでないとする信念の上から、その何れもが志を伸べたことにしてゐる。

馬琴は彼れ独自の解釋を下すことについて、頗る大膽だつた。春水の筆によると、武士迄が町人式になるが、馬琴の解釋によると、町人迄が武士式になる。戯曲で心中を謳はれた男女も、馬琴の小説に上ると、道義的着色を鮮明に加へられる。お染久松、三勝半七、お俊傳兵衛など、皆馬琴の手に取扱はれて、男性は紳士道に合致した人々、女性には淑女の典型にされてゐる。當時の讀者は、そこに新味を感じたのかも知れぬ。今右の二大別した作品の材料について、これを明かにすると、左の如く成る。(中には稀れに彼れの空想から成つた『稚枝鳩』などもある)

(一) 歴史、傳説によるもの

- 椿 説 弓 張 月……………源爲朝の事蹟
- 朝 夷 巡 島 記……………朝夷三郎義秀の一代記
- 俊寛僧都鳥物語……………『平家物語』、『盛衰記』
- 近世説美少年録……………お夏清十郎の傳説及び毛利元就、陶晴賢の事蹟

○南總里見八犬傳……………里見義實が安房に起つた史實を潤飾して經とし、馬琴の空想より成つた八犬士を緯としたもの

○皿 々 郷 談……………『落窪物語』及び『唐船』(謠曲)

○新累解脫物語……………元祿三年出版の『死靈解脫物語聞書』による

○墨田川梅柳新書……………近松の『双生隅田川』、謠曲『墨田川』、及び『都鳥妻戀笛』(八文字屋本)による

○勸善常世物語……………謠曲『鉢の木』に於ける佐野源左衛門及び最明寺の事蹟

○標 註 園 の 雪……………假名草紙『薄雪物語』の薄雪姫傳説

(二) 戯曲によれるもの

○旬 殿 實 々 記……………淨瑠璃『近頃河原の達引』及びお俊傳兵衛の巷説

○絲 櫻 春 蝶 奇 縁……………淨瑠璃『絲櫻本町育』及びお絲左一の巷説

○三七全傳南柯夢……………淨瑠璃『笹屋三勝二十五年忌』、『艶姿女舞衣』等

○占夢南柯後記……………淨瑠璃『長町女腹切』、『京羽二重娘氣質』等及びお花半七の巷説

○松染情史秋の七草……………淨瑠璃『新版歌祭文』、『妹脊の門松』等、お染久松の巷説

○八 丈 綺 談……………お駒才三の巷説、淨瑠璃『戀娘昔八丈』等による

○括頭巾縮緬紙衣……………淨瑠璃『椀久末松山』の椀久、松山の事蹟  
○常夏草紙……………淨瑠璃『お夏清十郎、五十年忌歌念佛』等による

### 三 出世作『弓張月』

馬琴の作品が、その特色を發揮したのは第二期からで、その先頭に起つのが『弓張月』である。本篇は馬琴が四十歳（文化三年）の時、前篇六冊を出し、翌年、後篇續篇各六冊を公にし、四十三歳の折、拾遺六冊を、四十四歳の頃、殘篇六冊を公刊して完結した。彼れの氣力が旺んで、文壇的野心に燃えた時代の出世作で、管々しく因果應報を説明することも割合に少く、描寫の上にも後年に現はれたやうな冗慢、煩雜に傾く點もなく、七五調や掛詞を用ゐて讀者を喜ばせようとした弊も、まだ目立たぬ程度にあつた。

のみならず、馬琴が主人公として選んだ源爲朝は、伊豆大島を去つて、琉球に入り、夫婦の間に舜天王を設けたといふ傳説もあつて、史上に於ける謎の人物となつてゐることが、讀者の興味を惹くに足り、且つ馬琴の空想を恣にするにも都合が宜かつた。馬琴は、大體、正史にある順序を追うて、爲朝の輪廓を描いたが、大島及び琉球の生活については、素より史乘に徵すべきものなく、且つ當時はこの方面に關する知識が極めて乏しい折であつたから、資料蒐集について、可なり苦心したらしい。彼れは朝夷義秀が朝鮮に渡つた話、源義經が滿洲に赴き、支那を征略した話などにも、興味を持つたやうであるが、先づ爲朝に筆を着けた。義

秀渡鮮の事は『朝夷巡島記』で書かうとしながら、はたさなかつたのである。

爲朝の事蹟について、馬琴は『元史類篇』、『中山傳信錄』、『中山世鑑』、『琉球神道記』、『神社考』、『和漢三才圖繪』、『南島記』などを材料とし、最善を盡して調査した。かうした方面に於ては、當時の小説家中、馬琴ほどの精力と熱心とを以てするものがなく、その上、雜學知識が割に豊かな彼れでないと、手が着けられなかつたらう。即ち彼れ独自の題材を選んで彼れの技倆を現はすに適した點があつた。また琉球に於ける爲朝を描くについて、馬琴は當時、容易に手に入らぬ『水滸後傳』を読み、その構想、結構を多少、借りて潤色を加へたのである。

彼れの『弓張月』前篇が現はれた時、讀者はこれを手にして、その題材の新奇な點、文章の暢達、雄健な點、筋立、結構の凡ならぬ點などに向つて、驚異の眼を睜つたであらうと思はれる。今日では、座して世界の形勢を知ることが出来るが、馬琴の時代は、東海道を往復するさへ面倒とせられ、その上、鎖國政策が嚴に行はれてゐたから、伊豆大島のことさへも、當時にあつては、新奇な世界にちがひなかつた。曾て現代作家の二三が俊寛に新解釋を加へて、短篇を書いたのを読んですら、幾分の興味を感ずることが出来たのであるから、馬琴の長篇『弓張月』が、出世作として重きを置かれたのは當然である。

勿論、馬琴が爲朝の上に下した解釋については、現代人の眼から見ると、もう左程の興味がないかも知れぬ。史實に出てゐる爲朝は豪放不羈、武略に長じた人物に過ぎぬが、馬琴に描かれた爲朝は、仁義を説き、道

徳を口にする人となつてゐる。實際の爲朝は、仁義などいふ事を全く眼中に置かなかつたであらう。が、朱子學が官學として、思想界の大半を支配してゐた當時のことを思ふと、つまり、馬琴はその頃の新思潮によつて、自由に爲朝の上に独自の解釋を下したものとしなければならぬ。

本篇の内容を見ると、前篇六冊、後篇六冊合して十二冊で、一應完結してゐる。それで十分だつた。ところが、讀者受けが宜かつたので、續篇、拾遺、殘篇に迄及んだものと察せられる。馬琴は前篇で爲朝が宮中に於て時の寵臣、信西と武藝のことを論じ、その非凡の手並を示して信西をやり込めたことから、九州に赴くべく、父爲義の嚴令を受けたことを叙し、九州に武勇を輝かした事、勇婦白縫を娶つた事、琉球に渡つてから後、一度上京、保元の亂に武功を現はした事、やがて敵手に捕へられて、大島に流され、代官の娘鰐江を妾として生活した事、白縫が讃岐に渡り、新院に謁して、爲朝の忠誠について奏上した事などに及んだ。

次に馬琴は後篇で爲朝が伊豆諸島を巡視することに起筆し、女護島に渡つて、鬼夜叉（七郎三郎）の長女を妾とし、島の女に男女相和する道を説いた事、次いで鬼ヶ島に渡つて、徳政を行ひたる後、大島へ歸つた事、朝命を奉じた爲朝討伐の軍が押寄せると、死を決したが、鬼夜叉に留められて來島に赴いた事、後に残つた鬼夜叉、鰐江らは深く討死した事などに及び、更に爲朝が讃岐に赴き、新院の御陵に參詣してから、白縫と心を合せて、擧兵の準備を整へ、東上する途中、大風波に逢ひ、一子舜天丸は或孤島に流れ寄り、白縫は海神の怒りを鎮めるため海中に沈み、爲朝の行方はわからずなつた事に及んで、一應、局を結んでゐる。これ丈

で終結したら、餘情、餘韻が残つて宜かつたらうと思ふが、評判が宜いので、續篇に手を伸ばした。

續篇、拾遺、殘篇の三つは、爲朝及びその子、舜天丸の琉球征略史であると云つてよく、更に又、琉球に新築國を實現したロマンスだと云つてもよい。彼等は琉球に於ける内亂を鎮め、逆賊を討つために、爲朝の妻となつた寧王女——馬琴は死んだ白縫の靈が、かの女に宿つたとしてゐる——と力を合せる。それに對して奸臣利勇、琉球王の寵姫で野心家の中婦君、妖術者濛雲、妖尼阿公などがあつて烈しく抵抗する。爲朝らは死ぬやうなひどい目に逢つたが、到頭、濛雲、阿公、利勇らを誅し、善政を布く。人望が爲朝夫妻に集り、切に王位に就くやう請はれたが辭して受けぬ。結局、舜天丸が兩親の昇天後、即位して能く國を治めた。以上がその主要な筋である。

本篇は最初、鶴、狼、猿、大蛇、雷獸といふ風に小道具立が、うるさいので、一寸興を殺ぐが、前篇第五の巻あたりから漸次、馬琴の力量を現はし、後篇に入つて、一段の精彩を加へてゐる。續篇は前、後篇ほどの出來榮を示してをらぬが、これとて凡作といふわけではない。相應、苦心の佳篇である。全篇を通じて異彩を放つてゐるのは、南國諸島のロオカル・カラアを精細に描き出してゐること、文章が暢達、爽朗で、氣力に富んでゐること、人物の配合がよく出來てゐること、長篇説話の構成に獨得の技倆を示してゐることなどである。

一體、馬琴の風景描寫は、類型的になり勝ちであるが、本篇では、彼れの熱心な調査研究とその空想力の働きたとが程よく結合して、印象鮮明でない迄も、或程度迄、伊豆大島その他南國の諸島に於けるロオカル・カラ

アを略ほ浮べ出すことが出来た。それから文章は『平家』の風調と迄ゆかぬにしても『太平記』そつくりの調子で、ぐんぐん力にまかせて書いてゆく氣味が見えて心持が宜い。唯爲朝が白峰廟に詣る一段は、依田學海、菊池三溪その他諸家が名文として嘆賞するところであるが、私はこれに同じ難い。唯美しい對句を多く用ゐた丈で、少しも印象がはつきりせぬ。秋成の『雨月物語』の『白峰』は同じ事を記述したものであるが、情景が生々して、言葉の用ゐる方も自然味を失はぬ。馬琴の文章は、往々、かうしたところにその短所を曝露してゐる。『馬琴の眞の文章の妙は日記にある』と云つた學海氏が、右の一節を賞揚したのは聊か矛盾の嫌ひがある。馬琴の文章の妙は、左様した美辭佳句を對偶式に用ゐたところにあるのでなく、却て美辭佳句から離れたところにある。例へば第十八回「海東の磯に一箭洲民を伏す」とある一段の如きは、叙事精妙、餘り飾らないで、彼れ一流のうま味を出してゐる。また趣向は少しく奇に失するが、第二十一回「爲朝前裁に紙鳶を弄ぶ」云々の一段は、今日の飛行機の代りに大紙鳶を用ゐて、飛揚する紙鳶に「一子朝稚ちもわかを結び付けて、伊豆下田へ赴かせた前半の叙事も、生彩があり、抑揚、變化があつてよい。以上は、ほんの當座の例として擧げたのである。

人物の配合においても、善は飽迄善、悪は何處迄も悪といふ風に對照上、固定せしめる傾向が稍少く、大島の悪代官思重なども、一概に惡にのみ固つた人物として描かれてをらぬ。又爲朝の部下として、八町礫紀平治、鬼夜叉などを點綴した趣向も、一寸變つてゐる興がある。濛雲と阿公とは、例の支那趣味で、日本化が足らぬけれども、爲朝の敵として、これを對照せしめる手段に出したのは、少しく陳腐だとしても止むを得なかつたのであらう。それから爲朝の夫人として、勇婦白縫を活躍せしめたことは、場面を引立てる上に相當の力となつたと思ふ。

要するに、全篇の構成上、續篇以下は、舜天丸の活動に力を注ぎ過ぎた氣味が見えるけれども、馬琴が平生心がけてゐた小説の諸法則——主客、伏線、襯染、照應、反對などが、『弓張月』によく當てはめられて全體が略ほよく統一せられ、首尾亦整つてゐるといふ點で、長篇構成力に於ける技倆の卓越を示した。が、度々、篇中に鶴を點綴したことは、學海氏が賞賛した點ではあるが、同じ難い。この小細工が、時々、眞の興趣を減する一因となる。それは馬琴が趣向に行詰ると、亡靈、妖怪などを用ゐて、やつと難局を切抜ける常套手段で、『弓張月』にもこれがある。それは、もうこの頃から馬琴の病弊となつてゐた。勿論、讀者を喜ばせる一手段としては、それも止むを得ないことであつたらう。

以上は馬琴に同情した批評で、専ら現代的に見れば、まだまだ缺陷を數へることが出来よう。が、その是非は暫く措き、『弓張月』は讀者に光明を與へ、希望を與へ、勇氣を與へる作品である。九州に追ひやられ、伊豆大島に流された爲朝が、屈せず撓まず、彼れの新天地を開拓し、最後迄、希望と光明のうちに生きたことは、生々現實主義の日本人的性格を如實に現はしたものと見て、そこに『弓張月』出現の意義を認めることが出来ようと思ふ。

#### 四 世話物式佳作

彼れの『弓張月』に次ぐ作品として、『三七全傳南柯夢』がある。これと略ほ同格の作品は『旬殿實々記』だ。人によると、更に『松染情史秋之七草』を擧げる。が、『南柯夢』一篇を見れば、大體の趣がわかる。他に『弓張月』の系統に屬するものに、『俊寛僧都鳥物語』があり、少し毛色の異つた作に、『青砥藤綱摸稜案』後集がある。

普通の作家ならば、人情を主として『南柯夢』、『旬殿實々記』、『松染情史』などを書いたであらうけれども、馬琴は全くそれらの作家と見解を異にした。彼れは戀愛に對して、寧ろ冷淡であつたのみならず、道義的にこれを規制しようとした。また夫婦間は一夫一婦を原則として、妾を置くことに反對する口吻を洩らした。かうした倫理的な考へを持つ彼れが、歌舞伎などで演ぜられる心中物を無條件で受入れる筈はない。恐らく、儒教的見地に起つ彼れは、心中物に對して、苦々しく感じてゐたであらう。

それ故、馬琴は『南柯夢』に於て、三勝半七を、『旬殿實々記』に於て、お旬殿兵衛を、『松染情史』に於てお染久松を描いたが、それは名ばかり借りたといふ丈で、内容はどの點から見ても、在來の戯曲とは殆ど異つてゐた。僅かに一小部分において、辻褄を合せたに過ぎない。

以上三組の男女は戯曲に於て、いづれも愛慾のために、心中することになつてゐるが、馬琴は、その何れを

も心中せしめない。共に終りを全うしたことにしてゐる。また戯曲では以上の人物が皆町人階級に屬するものとなつてゐるが、馬琴の作では、概ね武士階級に屬するものとされてゐる。のみならず、馬琴の作にあつては彼等の愛慾が理義に調攝せられ、盲目的に脱線した場合が一つもない。この點、現代の讀者に取つて嫌らぬとされるであらうが、馬琴自身は、左様した解釋によつて、心中傳説を一變したところに、多少のブライドを感じたかも知れない。丁度、マルキシズムの作家が、その作中の人物、事件を一切マルクス化せねばやまぬのと同じ行き方である。

馬琴の『南柯夢』に於ける半七は忠孝兩全の青年武士であり、三勝は操持固く、理義に明かな女性である。この二人の困厄は彼等自身の云爲によつて招いたのではない。實は半七の父半六が餘りに出世を急ぎ、私利に熱中して、幼時半七と許婚の間柄だつた養女おさん（後に三勝）を追うたりした事にもとづき、又一つは半七が父の強制で、妻を迎へた園花（蟻塚典膳の女）の母敷浪が舊夫に對する不誠實の酬いからも來たのであつた。結局、半六及び敷浪の懺悔、自殺によつて、悲況にゐた半七、三勝は千日寺で自殺せずすみ、半七は三勝を正妻に、園花を側室と定め、立派な武士として榮えたといふのである。

これを戯曲に現はれた半七が不孝者であり、三勝が愛慾に烈しく燃えた女であるのと對照すると、馬琴が如何に心中物を變改して彼れ一流の勸懲主義から解釋したかが明白にわかる。その他、『旬殿實々記』に於ても、殿兵衛は忠義の士であり、お旬（お俊）は節義固い女性である。また『松染情史』の久松はその實、



操丸といふ意志堅固の青年武士であり、お染はその實、秋野姫といつて操丸と許婚の間にある理想的女性だつた。かく三組の男女に對する馬琴の見方は、在來の戯曲家と丸でちがふ。

以上の三作が、馬琴の讀本に於ける佳作とせられる所以は、概ね世話物式となつて、他の時代物式の讀本に見るやうな不自然、怪奇、誇張のあとが割に少く、馬琴一流の堅苦しさはあつても、自然の人情に近い一面を存するからである。『春蝶奇縁』の如きも、亡靈の祟りを管々しく繰返さなければ、佳作として見られたのであるが、餘りに因果律を嚴重に適用した爲め、興味の一半を打壞はして了つた。

茲に一つ、馬琴の探偵小説とも云ふべき『青砥藤綱摸稜案』後集がある。それは餘り注目せられてはをらぬが、不自然の箇所殆どなく、素直な作だ。本篇の前集は五つばかりの短篇から成り、藤綱が裁判官として適確な判決を下した話を述べたものであるが、多くは、その筋が單純で、特に興味深いものはない。ところが、後集は前集にくらべて、筋も複雑であり、相當の波瀾、屈折も見え、例の誇張も殆どない。

### 五 馬琴の探偵小説的な作品

内容は近江二夫川の鷺屋善吉が志を立てて、鎌倉に赴き、第一流の青樓主人白眉長に仕へ、粒々辛苦の末百五十金を得て、故郷に歸る途中、俗に胡麻の蠅といふ小賊に附狙はれ、進退に窮したところを、曾て往路に立寄つた宿屋の娘お六が、偶然、美濃野上の宿の下女となれるに逢ひ、この女の助けで、例の金を預け、後日取りにくる事とし、證として女より櫛（彼女の亡母の形見）を渡される。かくて善吉は深夜、虎口を逃れて出立、事なく歸郷し、妻お丑に旨を語つて、佛壇へ櫛を置いた儘眠つた。翌朝起きると櫛がない。善吉は、はつと顔色を失つた。

仕方なく、彼れ自身、野上に赴いて、お六に逢ひ、事情を話すと、もう何者か櫛を持參して金を奪ひ去つたあとだつた。善吉はひどく落膽して歸つたが、お六の才覺により、その犯人が彼れの妻お丑で、彼女に情を通じた上臺昌九郎（村長上臺馮司の息）としめし合せてした事と分明し、金は善吉の手に戻つた。同時にお丑の母運也も馮司と通ぜる事がわかり、そこへ來合せた善吉の従兄弟、鷺太郎が前日の胡麻の蠅だと分つた。善吉はそれらを知つても怒まず、男氣を出して、彼等に百五十金を頒つてやつた。彼等は厚顔にもそれを受取つて、皆善吉のもとを立去つた。

その後、村長の馮司は悪事が知れて罷免せられ、お六と結婚した善吉が村長となつて信望が高かつた。ところが、馮司親子は善吉の立身を妬み、種々奸策を周らして、善吉に殺人罪の嫌疑を受けさせた爲め、善吉は不意に投獄される。この時、青砥藤綱が探偵を放つて、馮司親子の奸計を看破り、殺人の眞犯人は盜賊を働いて馮司父子の手に倒れた鷺太郎だと判明した。依て善吉は赦免され、再び村長としてお六と共に榮える。これが全體の主要な筋である。尙ほこれに遊女空蟬、その客、井輕元二の情事を搦ませ、彩りを加へてゐる。一面から見ると探偵小説であり、他面から見ると、善吉の立志談である。その謹直な性質も略ほよく描か

れ、才女お六の面目も或程度迄表現せられてゐる。例の因果律の適用も、わざとならぬところがあつて、すらすらと快讀することが出来る。唯例によつて藤綱の口を通じて、易の說、夢の說など、故らに馬琴の物識り振を示してゐるのは、なくもがなと思はせる。

が、馬琴の民政に對する考へが、藤綱の言葉のうちに寓せられ、その多賀郡司、近江判官滿信に諭す言葉のうち、「四海久しく泰平にして、萬民王化、武徳に浴せり。しかはあれど、生を貪り、死を忘れ、驕れるまゝに足ることを知らず。或は民を虐けて、私庫を富まし、利に走りて奸智に耽り、竊に相害するもの、この時にしも多かるべし。よつて藤綱、北條殿の命を稟け、此度巡歴の第一義は、守護の政道邪正を鑑み、愁訴を開きて善を勧め、惡を懲して、よるべなき冤民を救はん爲なり。」とあり、また「一族郎黨といふといへども、賢と不肖を自ら顧み、忠と佞とをよく辨じて、民の父母とはなすべきに、人命をもて瑣細の事とし、警を引きて自ら許し、逸樂をのみ旨とし、國の安危を見かへらずば、何をもて守護といはん。」ともある。抽象的で特に馬琴の具體案なるものは見えぬが、それは大體、當時、民政の職にある人々には適切な教訓であつた。尙ほ結末、別に馬琴が、篇中の人物を道義的に批判した意見を手短かに述べてゐるが、云ふところ、一概に道學先生の言として輕視すべからざるものがある。

玄同陳人批していへらく、人の性は善なり。しかれども染ること久しければ、これを洗うてうつらざるものあり。こゝをもて聖人も、養ひ難しといへり。凡人の親として、誰かその子の賢ならんことを庶幾ざ

るべき。しかれども不肖者は、必ず賢者をいぶせしとす。その故、何ぞや、物おのゝ異類を愛せず、その志、雲壤のたがひあるを以てなり。不仁を恥とせず、不義を畏れず。利を見ざれば勸まず、威おそざれば懲りず。これが則ち小人の所爲なり。人々見るべし。お丑が喜ぶ所は色のみ。遅也が愛するものは利のみ。同氣相求め、同病相憐み、類をもて友とす。このゆるに馮司、昌九郎等にあふときは、膠と漆の如し。強ひて離さんとするといへども、著かざることなし、君見すや、お六が愛する所は色にあらず。恩に感じ、義に仗りて、捨てがたき思ひあれど、媒にあらざれば歸かへがず、親しうしていよく敬し、樂みて淫せず。(下略)

## 六 馬琴の文章

以上、第二期に於ける馬琴の代表作について一言した。その中で特に傑出してゐるのは『弓張月』で、文章も、一番生彩に富んでゐる。が『藤綱摸稜案』後集の文章も、平淡のうちに、巧妙な叙事を示し、善吉が小賊に附狙はれて日を送るあたりの描寫は、馬琴の優れた技倆を現はした。藤綱が善吉、馮司、昌九郎らに向つて言葉厳しく審問を加へるところも、語氣生動の趣がある。但し前集は、後集よりも一段下位にあつて、存外、平凡だつた。

思ふに『弓張月』の文章は、意氣旺んな時代の馬琴が、一氣に書き下したところが見えて、感興横溢の概がある。勿論、相當、鍛鍊を加へたであらうが、『八大傳』時代の如く力めて、叙事に周密を加へようとせず、

奔放な傾きを示したあたりに、却て興深いものがある。所謂粗枝大葉の氣味がいくらかほの見えるが、要點は少しも逸してをらぬ。全體を通じて、讀んで小氣味よく、思はれるほど、調子が明かだ。今、左にその一節を抜かう。

## ○海東の磯に一箭洲民を伏す（一節）

かくて爲朝主従は、女護の島を船出しつ。南をさして漕ぐほどに、海上二十里ばかりなるを、只半月に乗りとほして、男の島へぞ着きたりける。此島は、周五里あまりもあらんとおほしきに、水際の險阻なる事は、女護の島にも勝れるを、爲朝はものともせず。船子等を奮勵し、とかくして船をさし入れ、主従、陸に上りければ、前面なる山の半腹を切り抜きて、前一方を開け、竹の網代、又蘆朶などにて圍ひたるが、家棟は荻萱にて、高さ三尺ばかりに葺きたる家の内より、形は潮風に吹くろまれて崑崙奴の如く、眼は光りわたりて、太白星の如く、鬼とも人とも見えわかざる男ども、むらくと走り出て、爲朝主従を眞中にとり繞し、鳥言葉にていへりけるは、昔より幾度か、流され漂へる船ありて、この島に歇らんとしつれども、巖高ければ船を入れ得ず。遙に吾儕が磯邊に立在るを見ては、怕ひまどひて逃去りぬるに、汝等いかに膽の太ければ、輒くこゝへは來りしぞと、問ひつゝ、顔をさし覗き、半ば呆れてすゝみ得ず。爲朝は且く女護の島にありて、鳥言葉に馴給ひしが、此島人のものいひざまも、彼處に異らざりければ、よく其ことを聞きわきて莞爾とうち笑み、あながまや、いたくな騒ぎそ。われは清和天皇の後胤、六條判官爲義の八男、源爲朝

と呼ぶ、ものなるが、故あつて伊豆の大島に謫へり。去ば、東海の島々は公家より賜りたる采地なれば、残りなく管領せんために、はるくと來れるなり。汝等われを君と仰ぎ、年の貢怠ることなからんには、過分の幸福あるべきぞと宣ふを、島人等聞きもあへず、はつちやうとやらん、爲朝とやらん、神胤にもあれ、皇子にもあれ、配軍なるからは、われにだに劣れるものを、いつの時に恩を稟けて君とし仰ぎ、何の好あつて年々に貢すべき。そもわが遠祖、此島を開きしより、歳は千歳にあまり、世は三十に及ぶといへども、いまだ君臣の義を締べき國なし。這奴が面魂のいかめしけなる、こゝにあらば、いかなる計較をなすべうも量り難し。とく打ち伏して、崖落にせよとて、異口同音に罵るにぞ、従者等は顔うち見あはし、なか／＼わろびれては、いよよ蔑れんとや思ひけん。肘を張り、肩をいからし、主の後方に控へたるが、何となく胸震へして、顔の色は海とひとしく、青みわたりて見えたりける。しかれども爲朝はさわぎたる景色なく、従者を尻目に見やりて、持したる弓と矢とつてわき挟み、いかに島人、水際に立つたる巖石と、こゝに立ちこみたる汝等が肢體とを比べば、いづれが堅きと問ひ給へば、島人等大いに笑つて、そは問るゝ迄もなし。吾儕の身體は血に裏たる皮囊、食を盛る器にひとし。たとひ三十枚の齒、十二枚の肋といふとも、いかに巖に及ぶべきといふ。その言いまだ果てざるに、爲朝は鏑矢とつて、きり／＼と彎固め、高さ一丈に餘りて、霸王樹めきたる巖の眞中を彈弗と射給へば、李廣が虎と見たるは物かは、巖は中よりさつくと折れ蒼々碧々とわかれ飛んで、忽地水中へ墮と落つれば、鯨の潮を吹く如く、浪打ちかへして陸を浸し、大地も

共に震動せり。島人等はこの形勢を見て色を失ひ、只願呆れてせんすべを知らず。(下略)

## 七 支那小説戯曲の知識

いろいろの點から考へて、『弓張月』は馬琴の文學的發展の第一道標ともいふべきものであつた。それについて思出す一事がある。彼れが支那小説に私淑したことは一朝一夕のことでないが、二十五歳頃から書いた黄表紙にも、『龍宮羶鉢の木』、『福壽海無量品玉』、『心學晦莊子』、『四邊摺心學双紙』など題から見ても、支那趣味のものがあつた。その最初の讀本として知られた『高尾船字文』(寛政七年)は『水滸傳』の筋に奥州仙臺侯の巷説を混和した作品で、三十四歳頃には、支那軍記物、『武王軍談』、『漢楚軍談』を書き、卅七歳の時、『臍沸西遊記』や、支那めかした『曲亭奇傳花釵兒』などを出した。

が、『弓張月』あたりから、支那小説との交渉が一段、緊密になつた様子が見える。その琉球の巻は、『後水滸傳』(陳忱著)の結構によつたもので、同書には、水滸の諸豪が、宋のために力をつくし、金軍の侵入を防いだが、十分の功を奏せず、その爲め、李俊は衆をひきつれて、海上、暹羅に渡りその王となつたといふのである。即ち爲朝が本朝に志を得ないで、琉球に渡り、事實上、その王となつたといふことは、『後水滸傳』によつて脚色せられたのであつた。『弓張月』に於ける妖術者濛雲は『後水滸傳』の薩頭陀を模したのだ。唯『弓張月』は『後水滸傳』の如く、虚構の事を書かず、琉球の風俗、人情、歴史を調べて、それにふさはしい人物を

はめこみ、多少、正史の上に注意した點がちがふ。その邊、馬琴は彼れ独自の工夫を用ひ、必ずしも、『後水滸傳』に囚はれなかつた。

この『弓張月』前後から、彼れの小説に支那趣味が漸次増加し、第二期に入つてから、一段、濃厚の度を加へた觀がある。勿論、馬琴の支那小説戯曲に於ける知識が、どの程度にあつたかは、幾分疑問とせられる。例へば『八犬傳』第九輯卷四十一の序に於て、「水滸、西遊、三國演義、平山冷燕、兩婚夫傳の五奇書あり。」と云つてゐるなどは、少しく當を失してゐる。『水滸』、『西遊』は確かに奇書だが、『三國演義』に至つては少しく落ちる。『平山冷燕』(荻岸山人編)の如きも、二組の夫婦に關する人情小説で別段、奇書として、推奨するに當らぬ。それ故、馬琴の讀書範圍も略ほ知らるるやうな氣がする。

彼れは『水滸』の作者のほかに、戯曲家として李笠翁を賞揚したが、『笠翁十種曲』については言及してゐない。高明(則誠)の『琵琶記』は讀んだらしいが、これとどの程度迄味解したであらうか。『水滸』、『西遊』、『三國演義』あたりを特に熟讀して、その小説構成の骨法を會得したのではなからうかと思ふ。勿論、馬琴の心友ともいつてよい殿村篠齋(本居宣長門人)は小説好きで支那小説を多く購入したといふから、篠齋から相當に借用する便宜があつたのは事實である。また篠齋に與へた手紙(天保十一年)のうちに、支那元代の怪奇小説として有名な『平妖傳』(羅本作)を苦心して大阪の書肆から買入れたことに及び、右四十回平妖傳、先年端本にて浪華某の書肆に有之よし聞知り候。(中略)價は五十匁の由、端本にしては甚

高料也と思ひながら、とりよせて見候。」と述べてゐるのを見ると、馬琴が支那小説に對する熱心の程は窺ひ知られる。

それ故、『八犬傳』については、第九輯卷四十六の自序で「本傳は源語（源氏物語）に倣はず。をさく唐山の稗史に馮る。」と言明した。語學（支那俗語）の力は、『水滸傳』翻譯を中止したのでもわかる通り、（この事既述）十分でなかつたらしいが、拾ひ讀み、飛び讀みの筆法で、出来る丈、博く涉らうとしたことは事實らしい。第二期に於ける作品、『松浦佐用姫石魂録』は『平山冷燕』の翻案といつてよい部分がある。また『青砥藤綱摸稜案』は『棠陰比事』及び『龍圖公案』（宋の明法官包極の公案、わが大岡裁判の如きもの）によつたらしく、『松染情史』は『今古奇觀』から案を借りたらしい。それから第三期に於ける作品になると左様した傾向が、一段加はつた。

例へば、『俠客傳』は大體の筋を『女仙外史』（清の逸田叟作）に借り、一部を『好述傳』に借りてゐる。その女主人公姑摩姫は『女仙外史』の主人公月君である。これには馬琴の心友木村黙老の翻譯もあつた。『美少年録』は殿村篠齋から借用した『櫛机間評』（一名『明珠録』）及び『綠牡丹』などから趣向を借り來つたもので、その主人公陶晴賢（前名、珠之助）は『明珠録』の世審に當るわけである。『金毘羅船』は『西遊記』の翻案で、馬琴はこの事を篠齋に語り、「最初より何分、天竺にては婦幼のうれしがらぬもの、日本國中、巡歴にいたし可申と存候へども、左様いたし候ては、事むづかしく、大骨折れ候事故、やめ申候。」（文政十一

年）と云つてゐる。それから『傾城水滸傳』は『水滸傳』を烈女勇婦の世界に移したものの、『風俗金魚傳』は『通俗金翹傳』、『金瓶梅』は明の人情小説『金瓶梅』の翻案であることは題名からもわかる。更に『朝夷巡島記』も支那稗史から趣向を採つた部分があつたと云はれる。

かうなると、彼れの第三期——大成時代の作品は半ば以上、創作といふよりも支那小説の翻案に近いところがあると云はねばならぬ。が、それは咎めるには當らない。丁度、明治大正の小説家が、無闇に西洋かぶれしたのと同じで、當時は這奇的（こはめづらしき）とか、閑話休題（それはさておき）とか、或は復説（またとく）却説（さてとく）那里（かしこ）などの字を新しがつて用ゐるといふ時代であるから、無理はないのみならず、馬琴は窃かにその先達を以て任じ、口を開くと、唐山（支那）の稗史を云々し、『水滸』、『西遊』を談ずるといふ風であつた。

それ故、馬琴は自ら『水滸』通を以てをり、『傾城水滸傳』第八篇の序に、或人に答へる體に擬し、「子は只水滸の皮肉を見て、未だ骨體を知らざるのみ。宋史に載せたる宋江は逆賊にして降りしものなり。かくて水滸傳を作りし者、這賊の字を反覆して、宋江をもて忠義とす。よりにて彼稗史なる宋江は初は循吏、中は反賊、後に至て忠臣なり。反詩の趣向は天罡地煞の惡星出世の應驗にて、則宋江が眞面目總て奸邪の條にあり。かくて石碣天降りて再び妖魔を鎮めしより、獨り宋江のみならず、凡一百零八賊皆忠良の士となれり。か、れば勸懲正しからず、善惡無差別の趣向多かるは、妖魔出現の間にして、最後の宋江、最後の百七人と同

じからず。浮屠家の所謂卽心卽佛、反覆すれば、悲心悲佛、成佛は得易くして、無成佛は最得難し。是に由て觀るときは、水滸の忠義は虚名にして、妖星も又空兆なるを。金聖嘆すら尙曉らで多く評言を費したり。」と述べて、『水滸』の深意を知るものは、茲に看到せねばならぬとして氣焔を揚げた。

馬琴は、また『西遊記』について、篠齋にその趣旨のあるところを告げ、「抑も三藏、孫行者等が九九八十一難の魔障は別物にあらず。三藏は卽ち功を貪ると守短の祟によりて魔障あり。孫行者は亦才を負みて、その神通を賣弄せし祟によつて魔にあへり。畢竟、形と影の如し。去るときは、その影いづくにあらんや。この故に孫行者正果を得るに及びて、紅骸兒も亦正果を得ざることを得ず。骸兒、牛魔王など差別あるに似たるも、魔も亦佛也。佛も亦魔也。この理を推すときは、紅骸兒と孫行者は一心一體也。別物とすべからず。されば世にある人、機變によつて事をあやまるとも、その機變の非を悟るときは、成佛の域に入らざることなし。」と論じてゐる。云ふところ、大乘佛教の一端に觸れてゐるけれども、馬琴はこの點を小説の上に表現しないで了つた。

## 八 馬琴の自家辯護

右の事實を前提として考へると、馬琴の小説がより多く支那稗史である所以がわかる。彼れは、それを以て、最も正しい道だと自信したのであつた。支那小説のうちにも、人情の機微を穿つたものがないではな

いが、怪奇を主としたものが最も多い。この點は日本人の性情と一致せぬところがある。現實を尙び、生々光明を喜んだ日本人は、怪奇本位の小説を餘り書かうとせぬ。この點、怪異小説翻譯の件に於て、既に述べた。ところが、馬琴は支那流儀の怪奇を飽迄用ゐなければやまぬ。否、度々、用ふることを以て、小説術の最好方便とした。

この點について、既に馬琴の生時に於てすら、大分、非難があつたと見え、『八犬傳』第九輯卷二十九の序文で、彼れの立場を辯解し、「鬼話怪談を用ゐることは、『水滸』、『西遊』などにも見るところで、不當でないのみか、勸懲の上から左様してゐるのだから差支へない。」として、左の如く云つた。

嚮きに友人告げていへらく、或云ふ、本傳第九十九回、素藤鬼語を聞くより、第四百十九回一休畫虎を度するまで、事々物々、怪談鬼語ならぬは稀也。且上に十二地藏の利益あり、下に藥師十二神の靈異あり、又前に狸兒の怪談あり、後に畫虎の怪談あり。其事都て重複を免れて互に相狹さすと雖、大凡看官に怪談を好むと好まざるとあり。其怪談を好まざる者は、必ず飽く心地すべしと云へり。此の言當れりやと問れしに、予答へていへらく否否然らず。唐山大筆なる稗史に縁てもて是を思ふべし。彼の鬼語怪談の多かる獨り西遊記のみならず、譬ば水滸傳の如きも、又是怪談をもて趣向を建てたり。見るべし、始に石碣一百十箇の魔君を走らすことあり。終に石碣一百八箇の魔君を治めて、遂に宋朝の忠義士に倣せしは、彼が一部の大趣向にて、作者の隱微こゝにあり。且つ羅真人公孫勝の仙術、戴宗が神行、樊瑞、高廉が幻術、及九

天玄女の靈驗冥助、是皆多く怪談に涉れり。然るに金聖嘆が評に、三國志演義を非して、水滸傳には毫も怪談なしと云へり。笑ふべし。そは生まれ生まれ、本傳も亦始より鬼語怪談をもて趣向を立てたり。豈嘗九十九回以上のみならんや。所云、始に役行者の利益あり。又伏姫腹を劈て竟に八犬士出世の張本になれる奇談あり。是よりして後、怪談に涉る者、事皆勸懲の意をもてせざるはなし。就中、地藏薬師の靈應利益は、世の怪談に惑へる婦幼及び事を好む雅俗をいかで窃に覺さんとして、叮嚀反復して綴りたり。然るを怪談多しといへるは、右ても未だ覺めざる歟。辯ずるとも言甲斐なかるべし。抑怪談に雅俗の差別あり。不及ながら、予が綴る怪談は、事、勸懲に非ざるものなし。是をもて世に在る所の怪談と相似て同じからざるを。この故に吾常に漫に物の本を綴り初めしより、よく見る者は予が言を俟たざるもあらむかし。此に五十餘年なり。實に無益の技なれども、已に老練に至りては、いよ、ますます精くして、十二分にせざるはなし。(下略)

馬琴は得意氣に、自家擁護に出たが、そこには、二三の錯誤がある。範を唐山の『水滸』などに取つたことが、既に作の標準を誤つてゐる。日本は日本、支那は又支那だ。『水滸』さへ、怪談を用ゐたとしても、必ずしもそれを模する必要がない。それに怪談に雅俗の別があるといふのも可笑しい。その雅とは勸懲の意を寓した怪談鬼語をいふのであらう。が、勸懲のために、怪談を濫用する必要はない。また世人の迷信を打破るために、頻りに怪談を述べるのも、矛盾ではないか。茲に至ると、馬琴の小説に於ける病弊は、不治の域に入

つたと云はねばならぬ。勿論、それは天保十年、彼れが七十二歳の時に書いたのであるから、自信餘りあつて、反省が足らなかつたのかも知れぬ。

それにしても、「本傳は始めより鬼語怪談をもて趣向を立てたり。」といふのを見ると、その『八犬傳』第一輯を出した文化十一年、即ち彼れの四十八歳時分から、以上の如き方針を小説術の上に用ふることを重要な手段と信じたものと思はれる。そして當時の讀者間にも、これを喜ぶものが相当多かつたことも事實だつたらう。或はそれを新奇とし、それによつて、頹廢的になつた官能に快い刺戟を受けると爲したのも少くはなかつたらう。が、現代の如く、自然を尙ぶ際にあつては、以上の點が最も煩はしく、また迷惑に感ずるところである。

## 九 外人の見た馬琴

英人アストン氏も『日本文學史』(A History of Japanese Literature)に於て、右の點を非難して、「その缺點は、甚だしく不自然なる事件を濫用して、讀者の嫌厭を意としなかつたところにある。不自然な幽霊神仙、惡魔及び法外に穎悟な靈獸を濫用した。」といひ、且つ「馬琴は不義、淫奔から生ずる害毒を説き、また常に妻女の貞操を主題とするが、人間に漸次發生する情操を説かぬ。將た純潔な戀愛の高尙な勢力を描かぬ。彼れは人情の機微を描くことを等閑に附してゐる。」と述べた。更に最後に、アストン氏は少し大膽な

豫言的態度を執り、「唯一言、茲に豫言したいのは、今後、日本人が支那思想を脱却した時には——日本人は現に年々、これを脱却しつつ、ある——我等の如く馬琴が描いた男女の性格の不自然に氣付くであらう。左様した場合に立ち至ると、彼れの小説は、かのセルバアンテス以前、大に西洋に流行した騎士物語の如く、筐底に收められ、唯國民思想發達の徑路を知る参考資料となるに留るであらう。」と云つた。少しく酷評であるが、彼れの代表作以外のものに對しては、この感なきを得ない。

勿論、アストン氏は、馬琴の短所のみ舉げてゐるのではなく、(一)結構雄大、諸種萬様の人生的波瀾を網羅し、これを表現するに變幻出沒自在の文章を以てせる事、(二)構想豊富、種々の奇想を出す點に於て古今に獨歩する事などを馬琴の長所として舉げた。歐人が馬琴の小説を如何に見るかは、大體、これでわかる。唯肝腎、馬琴の思想方面について何等の理解がないのは、歐人として、十分、馬琴の小説を味解しなかつた結果であらうと思ふ。

## 第四章 道義精神を基礎とした傳奇

### 文學(讀本) (下)

#### 一 馬琴の小説論

さて馬琴の第三期——大成時代の文學的收獲について述べる。この時期に於ける代表作で完成してゐるのは『八犬傳』のみである。他に『美少年錄』、『朝夷巡島記』、『俠客傳』などがあるが、皆未完だ。翻案物では、『金毘羅船』、『傾城水滸傳』、『金瓶梅』などが代表的なものといはれる。『傾城水滸傳』は大當りを取つたと傳へられるが、曾てこれを讀んだとき、左程の感興を覺えなかつた。強ひて、人物をわが烈女、勇婦に當てはめた爲めであらうと思ふ。『金瓶梅』の啓十郎(西門啓)、お蓮(潘金蓮)など、相當翻案の妙はあるが、これとても、一部の文士に喝采された『金毘羅船』と共に創作でない爲めに、暫く是非の評を略する。

さうとすると、彼れの完作『八犬傳』についての印象を語るのが順序だと考へる。私は少年時代に一度それを通讀し、青年時代にまた一通り讀んで見た。その當時は少からぬ感興を覺えたが、現在は、どうしても、通讀する氣になれない。馬琴が自慢する怪談鬼語の濫用に、うんざりさせられる。その上、人間の情感



を閑却して、機械的に篇中の人物を操つてゐることが、實感を生ずる妨げとなる。が、馬琴の生前、最大の努力、最大の苦心を費した空前の長篇であるから、多少、同情の眼を以て、『八犬傳』に對する必要がある。

馬琴が『八犬傳』を書くについての用意は、時々、その巻頭の自序などに於て發表せられた。それを綜合すると、一部の小説論になる。勿論、それは、トルストイの藝術論のやうに、深く思想方面に觸れたものでなく、主として、結構、文體について、馬琴の所見を述べたものである。稀れには、「何故、小説を書くか」の問題にも、少しは觸れてゐる。

馬琴は「余は何故に小説を書くか」といふ問題について、『八犬傳』第九輯卷三十三のはじめに相當明快な説を述べてゐる。勿論、勸懲主義の理由に就てであるが、云ふところ、たとひ、一方に偏するとも、彼れの眞面目な態度については敬意を表せざるを得ない。彼れは先づ文學史の上から、日本、支那の小説を論じてかう云つた。

(前略) 漢土に齊諧、異苑の二書あり。國朝に浦島子傳、續浦島子傳あり。便これすなはち和漢小説の鼻祖、戲墨の嚆矢といひつべし。是より以降、彼も我も其才によほしからず。宇都保、源氏物語の艶にして且花多かる、水滸、西遊記の奇くくて且巧なる、其文絶妙、句句錦繡、寔にこれ稗史の大筆、和文の師表なるものから、只其足らざるをいはゞ、源語は事皆淫娃わに過ぎて、反て勸懲に詳ならず。水滸は勸懲隱微にして、よく是を悟る者なし。うち見は強人の義俠に過ぎず。これも亦惜むべし。其大抵を知るも知らざるも、又善く讀

み得ぬるも、讀み得ざるもなべて戲墨を事とせる、己が如き曲學者流は皆其輩に倣はまく欲りして、糟を舐り、垢脂を拈る。和漢今昔幾人ぞ。其才あるは骨を換へ、胎を奪うて傑出なる、大筆殆世たいていに罕まれにて、多かるは其骨を換えず。胎を奪はでまる呑のなれば、似て非なるもの、あとを接ぐ。

馬琴は以上の如き不満を洩すと共に、その缺陷を補ふのが、小説家の任務だとし、勸懲の必要なる所以を左の如く述べた。

大凡稗史物の本に、古人の姓名を借用するは上にいひし事ながら、昔の孝子順孫、忠臣貞女を誣いつはりひて、惡人に作り易かふべからず。其善惡を轉倒せば、たとひ新奇といふと雖、勸懲に甚だ害あり。譬へば本傳なる、金碗かねわん八郎孝吉は、故君の爲めに怨を復かへして且二君に仕へず、自殺しける、義烈の士也。又山林房八は、身を殺して仁を爲し、義俠の良民なり。俱に未生の人なれども、是等を弑虐、竊盜の大惡人に作り易かられんは、予が甘ぜざる所也。稗史傳奇の果敢はかなきも、見るべき所は、勸懲に在り。勸懲正しからざれば、誨淫導慾の外あらず。或は善人不幸にして、惡人の慘毒に死辱を曝す事なども作者宜しく憚るべし。こも勸懲に係れば也。因りて意ふに、和漢今昔學び得たる奇才子あり。未だ君子の大道を得聞きざる才子あり。其才はこれ一なれども、いまだ學ばず、又思はず。遂に君子の大道を知らずして、勸懲正しからん事は最難しとも、かたかるべし。この故に予常にいふ、唐山にて大筆なる稗史の作者は皆能く學び得て、君子の大道を知らざるはなし。

茲に馬琴がいふ大道は仁義の道である。彼は小説を以て、仁義を説く機關とし、善を揚げ、惡を討つを以て、小説の任務とした。それと共に、男女の邪淫を寫すについても、おのづから、特別の用意あるところを述べて、かう云つた。

(前略)稗史中に淫奔猥褻の段間まこれあり。見て悟らざる者は、作者時好に媚びて這醜情を寫したりとのみ思へり。豈然らんや……美少年録なる陶朱あづ之助が荒淫の甚しきを予が筆には似けなしと、看官思はば、予が本意にあらず。陶朱之助は後に陶晴賢と成登るべき弑虐の大悪人也。彼が少年なりし時、淫奔なるを羨みて、誰か晴賢たるを願ふべき。これも亦勸懲に係るよしあるを思ふべし。只善にもあらず、惡にもあらぬ貴介の公子、閨門の麗人及び市井の男女の關係の闕隙を鑽り相援きて野合の淫樂の、痴情を宗と寫す者は誨淫導慾ならざるを得ざるべし。そは予がせざる所也。昔、孔子の詩を削るや、猶淫娃の詞を遺し、芟かも盡さざりけるは、後に戒を垂る也。又心誅の文法をもて春秋を作るに及びて、亂臣賊子は怕れしと云ふ。果敢なき稗史物の本なりとも、學問の餘力もてせる眞まことの作者は、この心操を見すもありけり。(下略)

## 二 馬琴の周到な用意

以上によると、馬琴が作中、男女の戀愛或は淫蕩を寫すのは、その事に興味を以て讀者に媚びるのでなく、勸懲の意を以て、男女情事を方便に描くといふのである。即ち馬琴にあつては、何故に小説を書くかといふと、仁義の道を勸めて、惡を斥けるためである。それ故、馬琴は巧みに人情を寫すことよりも、寧ろ勸懲を以て、藝術上の第一義とすべきことを固く信じたのであつた。

次に馬琴が『八犬傳』に關聯して、小説の結構を如何にすべきかを説いた旨は、既に小説の法則につれて述べて置いたが、尙ほ『八犬傳』九輯卷七のはじめに、八犬傳についての用意に言及して、「水滸は一百八箇の豪傑、その人極めて多ければ、史進、魯智深、楊志、武松等全傳開手の豪傑なるに、梁山伯に入りしよりその勢ひ始めに似ず、俱に軍陣に莅のぞむの外はありといへども、なきが如し。况百八人ならぬ者は始めありて終なく、俗に云ふ立滅たてめせざるは稀也。又西遊記は三藏師徒孫猪沙とは四名のみ。この人極めて寡ければ其事相似て且重複多かり。水滸にも亦重複あり。長物語は覺えずして彼重複の瑕疵あること、年來、みづから筆を把りて此等の苦海に墮落せざれば、所以ありけりと悟るに由なし。」と云つて、結構宜しきを得ぬ點を指摘した後、「いと烏許せがましき説話なれども、本傳は始より用意をさくく加減あり。すなはち水滸百八人の百を除きて八犬士あり。又加ふるに八犬女あり。里見侯父子と、大ちと俱に一十九人、これを一部の主人公とす。かゝれば、その人多からず、又その人寡らず。(中略)中途にして立滅たてめせし者、一人としてあるなし。」と云つた。勿論、馬琴も結構に周密を期しながら、時に意外の變更を來たしたことを辯じ、「本傳は文化十一甲戌年第一輯五卷を綴り創めしより、今茲天保八丁酉年に迄りて無慮二十四の春秋を歴たり。其間、作者の腹稿、或

は流行に據り、或は昨の我に鑿きて趣を易え、文を異にして體裁同じからざるもあるべし。」と述べてゐる。

それから文體については、小説は「畢竟、文字なき婦幼の弄びにする技にしなければ、故りて風流たる草子物語は取つて吾師に倣すべくもあらず。又彼唐山の稗官小説は大筆にして奇絶なるも、その文は模擬に要なし。(中略)故に吾文は枉けて雅ならず俗ならず、又和にもあらず漢にもあらず、駁雜杜撰の筆とりて、漫に綴り創め……」と述べ、相當、新機抽を出すことに注意した事を明かにした。

馬琴の言によると、『八犬傳』についての苦心が能くわかると同時に、彼れの小説術の一半も亦わかる。その資料研究にも、可なり力めたらしいが、彼れの勸懲主義を實現したほかには、藝術上、寧ろ失敗にちかひもある。思想上、政治的理想を里見義實の上に寓した點は、既述の如く、意義あるとしても、怪奇を濫用して結構を補ひ、マンネリズムに墮した文體を以て、全體を叙し、人間に生氣なく、戀愛に熱なきに至つては、どう辯護の仕様もない。晩年、種々、生活上の苦勞を重ね、視力半減した間にあつても、自己の使命を信じ、稿を繼いだ不撓の意氣に對しては涙ぐましい感じがするが、と云つて、作品の價値を今更、昂騰せしめるわけにゆかぬ。成るべく公正に批判しなくてはならない。

勿論、『八犬傳』には、部分的に宜いところが確かにある。さうした部分が、寶石の如く光つて、『八犬傳』の魅力を構成してゐる。『八犬傳』を讀んで、失望した人でも部分的によいところを二三、指摘すべきことを求めると、立所に答へることに苦まぬであらう。その點について、以下少しばかり説かうと思ふが、順序上、

この空前の大作について、ざつと梗概を書く。

### 三 『八犬傳』梗概

時は足利の末、永享嘉吉の頃である。結城氏朝の義軍が敗れて、城が陥り、父季基らが討死すると、當時、十九歳の里見義實は新運命を開拓するため、譜代の老黨を伴ひ、安房地方に赴いた。そこで奇計を以て、逆臣山下定包を亡ぼし、安房半國を領した。その際、定包の愛妾玉梓を助命せず、かの女を殺したのが、里見家に祟るといふのが『八犬傳』の發端である。

その後、義實が安西景連と戦つて苦境に陥つた時、玉梓の生變りである愛犬八房に向つて、敵將の首級を取つて來たら、望み通りの褒美を與へるといふと、八房はその旨を悟つたかのやうに、敵將景連を咬んで、その首を齧した。その際、八房は義實の愛嬢伏姫を申受けたいといふ意をその素振の上に示した。義實は「畜生の癖に……」と怒つて、八房を斬らうとしたが、伏姫に留められ、約束通り、愛嬢を八房に任せることとした。それで伏姫は八房を伴つて、富山に入り、一年あまり暮らしてゐるうちに、いつとなく、姫と八房との間に愛の靈感が通じたと見え、姫は妊娠したのである。折柄、姫の身を案じて、富山に分け入つた金碗大輔は八房を亡きものになしようと銃彈を放つと、八房に命中したが、誤つて姫を傷けた。姫はもう助からぬものと覺悟して、懷劍で自殺すると、不思議にも傷口から一朵の白氣が立ちのほり、姫

の頸にかけた數珠を包んで虚空へ昇ると見えたが、數珠は飛散し、八つの靈玉が四方にちり失せて了つた。この様に驚いた大輔は自殺しようとして、そこに來合せた里見義實に留められ、八つの靈玉の行方を尋ねるため、出家して、大和尚となり、遍歴の旅に上つた。

話變つて、茲に江戸大塚の里に犬塚番作といふ浪士がゐた。關東管領足利持氏の家臣の後で、家には村雨の名刀が傳はつてゐた。丁度、伏姫が自殺してから二年の後、妻との間に一子信乃が生れた。度々、この家では男の子を亡くしたので、俗説により、信乃を女の子として育てたが、大力無雙で、いつも荒々しいことをして遊び、武術は殊にすぐれてゐた。

その後、信乃の兩親が亡くなると、その遺言によつて、伯母の夫、莊官養六のもとに引きとられた。そこにはかねて許嫁の濱路（養六の養女）といふ美女がゐて、心も優しくつたが、養六は中々、横着な男で、番作の田畑を横領し、且つ信乃が持つてゐる村雨の名劍をも手に入れようと隙を覗つてゐた。

正直な信乃は、そんなことは夢にも知らず、伯母のもとで逢つた額藏（犬川莊助）といふ若者が同じ靈玉の分身だと知り、これと兄弟分になつたが、この額藏から始めて伯母夫婦の奸惡なるを聞知し、澁我（古河）に出かけて家運を起せしと云はれたのを機會に犬川莊助と一緒に家を出ることにした。その出立の前夜、娘濱路は只管、信乃を慕つて、頻りに別れを惜んだが、信乃は氣を引立てて、濱路を慰め、翌日出立した。

その不在中、濱路は代官のもとへ嫁せよと強ひられたが、信乃への約を守つて、中々、聽入れず、ひとり苦

惱してゐた。ところが、信乃は、そんなことを夢にも知らず、旅の路を急ぐ途中、惡漢左母二郎のために、村雨の名刀をすりかへられたのである。この左母二郎は、以前から濱路に懸想し、かの女が代官のもとへ嫁しようとするのを連れ出して、圓山塚迄くると、頻りに彼れの意に従ふやう追つた。が、濱路がどうしても聽かぬので、これを殺して了つたのであつた。

左様した悲劇が行はれたところへ、ぬつと現はれたのが、火定の術を心得てゐる勇士、犬山道節で、忽ち左母二郎を一刀のもとに葬り去り、村雨の名刀を手に入れた。そこへ來合せたのが信乃の兄弟分、莊助で、道節の様子を見て、確かに曲者と推し、烈しく争闘したところが、互に所持する靈玉によつて、同志と知り、快く和睦した。

さて一方、莊助に別れて澁我に向つた信乃は、あとで村雨の名刀を左母二郎にすりかへられたことを知りひどく残念がつた。のみならず、この名劍を澁我殿へ奉つて、出世の道にありつかうとしたことも、今は晝餅に歸した上、一旦、この事を申入れたあとなので間者扱ひにされた。茲で信乃は犬飼現八ら多數のものに取圍まれる。信乃は勇ましく戦ひつつ、三層樓なる芳流閣へ飛び上つた。それを見て、現八も茲に來り、一騎討となつて、引組んだ儘、利根の急流に浮ぶ小舟の中へ落ち、その儘、行方も知らず、すんすん流された。

幸ひにも、信乃、現八の二人は、宿屋の主人、古那屋文吾兵衛に救はれた。この際その所持する玉から、兄弟分だと知り、二人は義を結ぶ。ところが、茲に古那屋の長男小文吾といふものがあつて、土地相撲の大關

と立てられてゐるが、これ又、その所持する玉から、信乃の同胞とわかり、互に親交を重ね未來を盟つたのである。それに文吾兵衛の娘沼蘭の夫、山林房八の間に設けた大八も亦同胞のひとりと知れ、後、成長して、犬江親兵衛と名乗つた。かうして四犬士が揃つたわけであるが、折柄、そこへ暫く姿を見せなかつた、大和尚が現はれて、いろいろ昔語りをした。

かくて信乃、現八、小文吾の三犬士は打揃つて、武藏豊島なる神宮河原へゆき、犬川莊助に逢はんとする途中、猪平といふ老人に逢ひ、その人から、濱路の死、藁六夫婦の死を聞き、且つ殺人の嫌疑で、莊助が入獄してゐることを聞いて、ひどく驚き、且つ悲んだ。三犬士は差當り、何とかして莊助を救ひ出さうと考へ、莊助が愈、死罪に處せられる日、信乃、現八、小文吾の三人は突如、姿を現はしてこれを救ひ、猪平の子、尺八、力二郎に後事を托し、一同、上野なる荒芽山を志して逃げて行つた。

#### 四 八犬士の離合集散

話變つてその後、犬山道節は、君父の讐で、時の管領をしてゐる扇谷定正の身命を奪はうと頻りに附狙つたが、却て敵の計略にかかつて重圍に陥り、危く見えたところを、右の四犬士に救はれた。それからその人たちは、荒芽山に向つたが、途中、莊助は道にはぐれ、荒芽山麓に着いた。そこには、道節の乳母、音音の家があつたのである。

道節は、やがて此處へ来て、莊助に逢ひ、二人が持つ玉によつて、同胞であることを知つたが、その際、圓山塚で道節と暗中に斬り結んだのは、莊助だつたと知れた。やがて莊助にはぐれた信乃、現八、小文吾の三人も茲へ來り、猪平も恙ない顔を見せた。その時、道節を搦め取らうとする追手が押寄せてくるといふことを聞き、五犬士は難を避けて、旅に出ようとしてゐるところへ、忽ち寄せ手が來たので、これと應戦し、機を見て、思ひ思ひに荒芽山を立去つた。

この時、小文吾は隅田川の岸迄くると、そこに猪の牙にかかつて倒れてゐる莊官鷗尻並四郎を見出し、助けてやつた。ところが、並四郎は恩を讐で返へさうとしたので、小文吾は怒つて彼れを殺した。それが小文吾に取つて仕合のよくない始めで、當時、並四郎の妻船虫といふ妖婦に欺かれて、名笛だといふものを古金欄の袋に入れて所持してゐると、それは領主千葉家の重寶、嵐山の名笛を盗み出したものだらうと疑はれ、捕吏に圍まれた。が、それは、やがて事實によつて、疑ひが晴れ、嵐山の名笛は他から千葉家に戻つたけれども、小文吾は罪なくて體よく石濱の城に抑留された。

時に千葉家の老職、馬加大記は逆謀を企て、小文吾を味方に付けようとしたが、加擔せぬのを怒り、これを殺さうと決心した。ある日、大記は城内で宴を開き、女田樂旦開野に舞はせたが、その美しい姿は、席上にと小文吾の頭にも、はつきり印象した。それから十日ばかり経つと、ある夜、小文吾の身邊に迫つた曲者がある。はつと身構へた途端、曲者は何處からか飛んで來た簪で咽喉を刺されて倒れた。一體、これはどうし

たのであらうと、小文吾が不思議さうにしてゐる前へ、美しい且開野が立つてゐた。「どうぞ私の思ひをか  
なへて、此處から逃げ出して下さい。」と迫り、外出許可の割符迄盗み出すべきことを約した。小文吾は鬼も  
角も逃げ出すことに異存はないと答へた。

約束の日、小文吾が用意してゐるところへ且開野が来た。見れば生々しい血の滴る馬加大記の首を提げ  
てゐる。事情を聞くと、且開野は眞の女ではなく、父の讐、大記を討取るため、一時、女装してゐた犬坂毛野  
だと知れた。二人は喜び合つて城を出たが、追手が頻りに迫つて、中々危いので、二人は忽ち川の中へ飛び  
込み、對岸から市川の方へ赴いた。そこで小文吾は始めて父文吾兵衛の死を聞いて悲んだが、間もなく、旅  
に出て行く。

その後、道節は西の方へ志して、京迄至つたが、引返して足尾の里へ来た。此處で庚申山の妖猫を退治し、  
亡くなつた赤岩一角の子、角太郎と親しくしたが、犬村大角といふのは、角太郎の後身で、茲に同胞の一人と  
して、他の犬士に逢ふため現八と共に旅へ出る。

その年の末、犬塚信乃は諸所を流浪の末、甲州へ赴き、富野穴山の麓で、四六城六工作といふ老人の家に寓  
した。老人の娘濱路は、「妾はお身と二世を契つた濱路の後身でございます。」と信乃に話しかけ、心の誠を  
示した。信乃は迷惑に感じたが、やがて六工作は信乃の家來筋と知り、茲に濱路と婚約する。折柄、六工作  
の妻が姦夫を作つて、六工作を殺し、その罪を信乃に着せる。爲めに信乃は一時困難したが、道節の手で助

けられる。且つ久振りに、大和尚に逢つて、濱路は行方の知れなかつた姫君（里見義成の子）と分明り、信  
乃は姫を見送り、莊助の行方を探しに出た。

かうして八犬士は、まだ一堂に會するところ迄ゆかず、犬田小文吾と犬川莊助は越後にをり、犬坂毛野は  
信州諏訪湖邊にゐた。この三人は偶然、信州で逢ひ、打つれて甲州へ赴く。途中、毛野はまだ討つべき讐敵  
があるといふので、二人と手を分つ。その頃、現八と大角とは一日も早く他の犬士に逢ひたいとあせつて旅  
を續けたが、行徳へ来て穂北の郷士氷垣夏行の家に招かれて盜賊と思ひ誤られ、無實の罪に落ちて一命を失  
はうとしたところを、氷垣の娘重戸に助けられる。二人は千住で船に乗ると、偶然、濱路姫を房州へ送りゆ  
く信乃、道節らに逢つた。依て四人は力を合せて賊徒を平け、かの氷垣も二人の冤罪を始めて知つて詫びを  
入れたので、これを許し、四犬士は暫くそこに留つて、管領扇谷定正を討取らうと頻りに劃策したのである

## 五 八犬士出世、一堂に會す

その頃、犬坂毛野は、放下僧物四郎と名乗つて、湯島の社頭で、居合術などをしてゐるが、その武術に通じ  
た様子を見て、扇谷定正の臣、河鯉守如から佞臣龍山縁連を撃ち取るべきことを依頼された。それから間も  
なく、毛野は妖婦船虫を誅した小文吾を始め、信乃、道節、莊助、現八、大角の六犬士に會し、その助けによつ  
て鈴ヶ森で龍山縁連を要撃し、その一味のものを殲殺した。變を聞いて、扇谷定正は驚いて駆け付け六犬

士と戦つたが破れ、その居城五十子城は虚を衝かれて落ちたので、定正の室、蟹目前、河鯉守如は定正を諫める。が、言を用ゐられぬので自刃する。その時、七犬士は穂北へ歸り、暫くそこに留つてゐた。

話變つて、茲に上總館山の城主、臺田權頭素藤は日夜、酒色に耽つて、下民から搾取し、横暴を極めてゐた。彼れは比丘尼妙春——牝狸の化身——の妖言を信じて、里見義成の女、濱路姫に見ぬ戀をして、結婚を申込んだが、受入れないのを怒り、里見家を怨んだ。先づ彼れは、義成の一子、義通を奪ひ、それを人質にして叛旗を翻した。その頃、義成の父、義實は家督を義成に譲つて、瀧田といふところに隠居してをつた。

ある日、義實は僅かばかりの従者をつれて伏娘の靈を祭つてある富山に登ると、かねて義實に怨を抱く麻呂、安西、神余などの殘黨が不意に現はれて、義實を害しようとした危機一髪のところへ、突如、犬江親兵衛が現はれ、忽ち彼等を生擒した。尙ほ親兵衛は敵手にある義通を奪ひ返すため、名馬青海波に跨つて、單身、城に乗込み、素藤父子を捕へて義通を救ひ出した。この勇しい有様を見て義成は感嘆し、親兵衛と君臣の義を結んだ後、館山城主となつたのである。

やがて義成は素藤を追放した。素藤は武州隅田川邊に赴き、そこで妙春と逢ふと、再び奸計を案じ、妙春の妖術で頻りに稻村城（里見の本城）にゐる濱路姫を苦めた。親兵衛はその看護を命ぜられ、靈玉の力で妖氣を拂ひのけ、姫を助けたが、その際、姫と何か關係あるかのやうに疑はれたので、ひどく迷惑し、瀧田に至つて母妙真尼と逢つてから、諸犬士に逢ふため、市川に赴いた。

時に素藤は親兵衛が館山城にをらぬと知ると、奇計を以て、城を奪還した。里見方は素藤を倒さうと、城中に入り込んで、一太刀浴びせたが、妙春の幻術に妨げられて、目的を達しなかつた。その時、義成の前に神女が現はれて、親兵衛を呼戻して素藤を討たせよと告げたので、義成は親兵衛を疑つて斥けたことを悔い、蛭崎照文らをして、その居所を探らしめた。

その頃、親兵衛は諸方を歩き廻つて、不圖、扇谷家の忠臣、河鯉守如の子、孝嗣に逢ひ、肝膽相照して語り合つたが、その際、妙春が毒婦玉梓の怨念を受けた牝狸だといふことを知つた。かくて親兵衛らは兩國から船で上總へ赴く途中、蛭崎照文に逢ひ、義成の直書を得たので、大に喜び、孝嗣も亦名を政木大空と改めて武勳を樹てた後、里見氏に見参しようと思氣込んだ。

そこで親兵衛は、人々を従へて館山に赴き、靈玉の力を借りて城中に討入ると、忽ち勝利を占め、素藤主従を捕へた。その際、妙春は追ひつめられて、牝狸の正體を現はし、城の高樓から落ちて死んだ。里見の威風は、それと共に益々揚つたのである。

その時分、大法師は結城の古戦場に留つて、そこに草庵を作り、七犬士の來會するのを待つた。その事を耳にすると、結城氏朝、里見季基らの討死した祥月命日を期して、犬塚信乃、犬山道節、犬坂毛野、犬川莊助、犬村大角、犬飼現八、犬田小文吾らの七犬士が來會した。次いで追善供養が行はれた後へ、犬江親兵衛も來たので八犬士は全く揃つた。それから間もなく、彼等は瀧田城に赴き、そこで義實と對面、引出物として甲

胃一組つづを賜り、城内に邸宅を與へられ、賄料として、各月俸五百貫を受けることになつた。

その後、里見家は使者を京都へ派して、勤王の誠意を朝廷に捧げ、大に武威を張つて、山内、扇谷兩管領の暴威を抑へるため、これに大打撃を加へた。かくて房總二州は里見家の仁政のもとに榮え、八犬士は各、妻を迎へて、子孫繁昌したといふのである。

## 六 『八犬傳』の興味ある場面

馬琴の『八犬傳』に於て、最も人氣ある人物は、犬塚信乃、犬坂毛野、犬山道節の三人であつた。同時にそれらの人物が活躍する場面に出色の趣があるかの如く思はれる。(少々の除外例はあるが) 信乃は孝の象徴として描かれ、人物に暖か味、優し味がある。毛野は智の象徴として描かれ、聰明俊敏である。道節は忠の象徴として描かれ、どつしりした重みがあつて、その不屈の意氣と勇武とは、特に水際立つてゐる。

彼等が主として活躍する場面が、比較的に觀衆の興味を惹くのは、浪漫趣味が多いためと思ふ。信乃が芳流閣上の奮闘、娘濱路との戀にからむ情緒纏綿たる場面、舊主持氏に逢つて、靜かに往事を語るところなど、何れも浪漫的だ。それから白拍子に假裝した毛野が對牛樓で讐敵を鏖殺する場面、彼れが湯島天神社頭で居合拔を見せるところなども、浪漫的である。更に道節が荒芽山麓で莊助と再會するところ、管領扇谷定正に復讐せんとして只一騎、彼れに肉迫して、矢を射るところなども亦浪漫的で興が深い。

かうした場面の配置が『八犬傳』の色彩として、點景として一つの繪模様をひろげゆく感があるが、更に馬琴が全體を統一すべく、人物の出入その他について苦心したことは、中々深いものがあつたらうと察せられる。登場人物の数が三百餘人に上り、讀者側でも、その十分一すら記憶するのが容易でない。それをどうしたかといふと、最近、馬琴に親近した人の話だといつて、或好學の老人から一挿話を聞いた。

當時、馬琴は一室の中に壘二疊に餘る大きい板を置き、それへ『八犬傳』の地圖を詳しく書いて、人物の動靜により、人名を書き付けた大きい札を動かす。現在、書いてゐる人物の上へは赤紙を貼付して心覚えとし、もう書終つて用のない人物の札は、これを撤去した。また『八犬傳』に於て、生命を失つた人物のためには、毎年必ず祭りをして、敬意を寄せたといふ。して見ると、いつも多くの人物の名札が大きい板面に釘でうち留められてあつて、一目のもとに、動靜がわかるわけである。この一事を以てしても、馬琴の用意周到さがわかる。

それ故、二十八年間に亘つて書いた複雑な長篇であつたが、前後、辻褄の合はぬやうなところは殆どなく、それぞれ纏りが付いてゐた。勿論、地理、歴史の上から、一々詳しく調べると、往々、落度を見出さずとも限らぬが、それは資料調査の上にかかるのであつて、結構、筋立に於ては、鎗を突込む虚隙が極めて少い。それらを綜合して考へると、矢張、いろいろの不滿はあらうとも、『八犬傳』を彼の第三期に於ける第一の代表作とせねばならぬ。



それに第八十勝回上篇、第八十勝回中篇に於て、全體の勸懲主義を總轄し、馬琴一流の哲學をそこに寓してゐるところなども、極めて親切で、流石に彼れ丈のことがあると思はせる。それに於て、「道德熟して通力自在なりとも、幻術外道に等しかるべき出沒不測の行ひあらば、君子は反て信すべからず。」といひ、「君仁にして臣も仁ならば、別に仁義八行と名づくる者なし。」といつて、道德上、一段高い境地を讀者に向つて説いてゐる。今左に『八犬傳』中に於ける芳流閣上の戦ひの一節を抄録する事とした。

君命重く、彌高き、彼樓閣は三層也。其二層なる檐の上まで身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく堪へ難き、皆は六月廿一日、昨日も今日も乾蒸の焔熱をわたる敷瓦は、凸凹隙なく、波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る、潮河は名に負ふ坂東太郎、水際の舟舟掛を絶て、進退既に谷りし敵にしあれば、いかで我れ繋き留めんと、颯の樹傳ふが如く、さら／＼と登果たる三層の屋背には、目柴翳よしもなく、迭に透を窺ひつゝ、疾視あふて立たる形勢、浮圖の上なる鶴の巢を巨蛇の窺ふに似たりけり。廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし床几に尻を打掛て、勝負怎生と向上たる。亦只閣の東西には、身甲したる許多の士卒、鎗長刀を晃かし、或は箭を負ひ、弓杖突立、組で落なば撃留んとて、項を反してこれを觀る。加旃外面は緋連とし杳かなる河水遶りて砌を浸せば、借使信乃武事長臂力衰へず、克く見八に捷得るとも、墨氏が飛鷹を借ざれば虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲梯なければ地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずも羅に入りぬ。獸ならずも狩場に在り。三寸息絶れば絳皆休ん。

脱れ果じと見えたりける。當下信乃は思ふ様、初層二層の屋の上まで追登らんとせし兵等を砍落しつる後は、絶て近づくものなきに、今只ひとり登來ぬるは、世に覺えある力士ならん、這奴は是膳臣巴提便か虎を暴にする勇ある歟、又富田三郎が鹿角を裂く力ある歟、遮莫一個の敵也、引組で刺迭へ死するに難きことやある。好き敵にこそ、ござんなれ、目に物見せんと、血刀を袴の稜もて推拭ひ、高瀬の如き方桴に立たる儘に寄するを俟ば、見八も亦思ふ様、彼犬塚が武藝勇悍素より萬夫無當の敵也、然とても搦かねて人の援を借ることあらば、獄舎の中より此の役義に擇出されし甲斐もなし、搦捕るとも、撃るとも、勝負を一時に決せんものをと、思ひにければ、些も擬議せず、御詫さふと呼かけて、拿たる十手を閃かし、飛が似くに方桴の左の方より進登りて、組んとすれども、寄せつけず。心得たりと鋭大刀風に撃を、發石と受留て、拂へば、透さず數刀尖を、拄て流す一上一下。這る蕘を踏駐て、頻に進む捕手の秘術。彼方も劣らぬ手煉の働き。炭よりおとす大刀筋を、あちこち外す虚々實々。未だ勝負も判ざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠て見る目もいと迫なる。去る程に犬塚信乃は、侮難き見八が武藝に敵を得たりけり、と思へば勇氣彌倍て、刀尖より火出るまで、寄ては返す、大刀音被聲、兩虎深山に挑むとき鏗然として風發り、二龍青潭に戦ふ時沛然として雲起るも、斯くぞあるべき。春ならば峰の霞歟、夏なれば夕の虹歟と見る可なりと高閣の棟にして、死を争ひし爲體、世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎌脇當の端を裏缺までに切裂れしかど、大刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かて初に淺痕を負ひしより、

漸々に疼を覺れども、足場を搦て撓まず、去らず、疊かけて撃大刀を、見八右手に受流して、かへす拳につけ入りつゝ、ヤツと被たる聲と共に眉間を望て礮と打。十手を丁と受留る信乃が刃は、鏢際より折れて遙に飛失せつ。見八得たりと無手と組むを、そが隨左手に引著て、迭に利腕楚と拿り、捩倒さんと、曳聲合して接つ撥るゝ力足、此彼齊一踏にらして、河邊の方へ滾々と身を輾せし覆車の米苞坂より落すに異らず。高低險はしき棧閣に削成たる蕞の勢ひ止まるべくもあらざれど、迭に拿たる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より末遙なる河水の底には入らで、程もよし、水際に繋る小舟の中へ打累りつゝ、挫と落れば、傾く舷と立浪に突と音す水煙、纜丁と張斷て、射る矢の如き早河の真中へ吐出されつ。爾も追風と虚潮に誘ふ水なる洞舟、往方も知らずなりにけり。(下略)

## 七 傑作『美少年録』について

彼れの『八犬傳』について述べたいことは大體、以上で盡きる。次ぎに彼れの作品中、異色ある『美少年録』を考察する。それは文政十一年、彼れが六十二歳の時に公刊し、天保三年、第三輯を出して一時中絶、弘化二年に至つて『新局玉石童子訓』として稿を次ぎ第一集から第六集迄を出した。無論、それでも未完であつたが、高評を得たのは、第一輯から第三輯迄出した『近世説美少年録』の方である。それ故、前半を見れば、大體の趣も、よいところも分る。後半は丸で氣が抜けたビールの如く、味に乏しい。

天保年間に入ると、讀本も、もう行詰りの形で、種彦の合巻物『田舎源氏』、春水の人情本『梅曆』などが、それを取つて代らうとしたエロ・グロ本位の時代であつた。馬琴も流石にそこに考へ及び、種彦や人情本一派を向ふへ廻はしてエロチックなものを書かうといふ腹があつたらしい。茲に至つて彼れは『美少年録』第三輯を天保二年の暮に出し、相當の人氣を呼ぶことが出来たのである。

勿論、馬琴の本意は、不良の遺傳と不良の境遇とが少年の美質を漸次破壊し、かくして墮落の淵へ導きゆくことを示した點にあると思はれるが、材料を艶麗、好色の方面に借りたのであつた。その前半の發端は、足利末期の頃、大内家の重臣、陶瀬十郎が青春時代に京都に勤務してゐる折、或日、御廟野の辻堂で俄雨を避けてゐた折柄、不圖、美妓お夏に逢ふところから開かれる。お夏も美男瀬十郎の風姿に心を惹かれ、瀬十郎もお夏の妖艶な風貌に氣を取られる。かうして一寸した雨宿りが縁となり、瀬十郎はお夏をその家に送り届けて、歸らうとすると、お夏に引留められた。丁度、夫木偶介は一日不在であつたので、瀬十郎は情にからまれて、心ならずも、お夏と契つた。が、あとで泌々、後悔したので、成るべく彼の女から遠のいてゐると、又或知人の山莊で、偶然そこへ呼ばれて來たお夏に逢ひ縁を切ることが出来なくなつた。

お夏には、夫がある上に、娘小夏もあるので、瀬十郎と逢ふことも稀れであつたが、いつかその胤を宿した。その中、或機會に瀬十郎とお夏との關係が舊主の耳に入つたので、瀬十郎は謹慎、歸國を命ぜられることとなつた。お夏は別れを惜んだが、さてどうにも仕様がなない。在來、瀬十郎から生活費の補助を得てゐた

ことも、茲に途絶えるやうになつた。

やがてお夏は一子珠之助を生んだが、生活が思はしくないので、木偶介と相談し、東國へ移ることにした。それで親子四人、相携へて、旅に上り、途中、垂針峠へ差しかかると、忽ち二人の山賊に襲はれ、木偶介は殺される、小夏は谷底へ投入られるといふ悲みに逢ひ、お夏は幼い珠之助を抱き乍ら、失神せんとした。

その際、二人の賊はお夏の美貌を見て、頻りに口説く。聽かねば、お夏親子を殺して了はうといふので、子の可愛さに鬼のやうな山賊に身を任せた。賊の住家は佛生山中にあつて、一日交代に里へ稼ぎにゆき、物資に窮することは少しもなかつた。が、お夏はそこにあるのがす時もいやで堪らぬので一策を設け、二賊を欺いて、色情関係のため鬭争せしめると、二人共に斃れる。茲に至つて、かの女は七年目に珠之助とその山塞を逃れて、世の中へ出ることが出来た。

それからお夏は、この珠之助を連れて、陶瀬十郎に逢ふため、はるばると周防へ赴いたところが、瀬十郎の所在がわからぬ。君命によつて上方へ出陣してから、まだ歸國せぬといふ。途方に暮れてゐるところを瀬十郎の舊知辛踏无四郎に救はれ、その妾となつて京都へ上ることが出来た。

爾後、お夏の生活は左迄の波瀾がなかつたが、珠之助の一身には、いろいろの變化が起つた。彼れは美貌で才氣もあつたが、性質がどうもよくなかつた。最初、香西元盛の近侍となつて、その恂發を賞せられたが、主の滅亡と共に位置を失ひ、次いで不圖したことから實父瀬十郎にめぐり合つて、その推舉により、武州河

原の城主扇谷朝興に仕へるに至つた。この時、姓名を改めて、珠の扁を取り、末朱之助晴賢と名告つたのである。

それ以後に於ける朱之助の生活は、自墮落に流れた。彼れは主命により、大和の如々來禪師に造佛のことを依頼するため、沙金五百兩、白布二百反を携へて出發したが、到着後、禪師不在のため、それを待つ間に悪い浪人の術策に罹り、沙金五百兩を無くした。それは博奕と不品行との祟りでもあつた。が、彼れは人の情で窮境を救はれたが、一向反省せずに次第に悪い方へ傾いた。

第三輯迄の内容は大體、以上の如くであるが、いつもの馬琴流の怪奇、誇張のあとが少い。自然に性情の發露する様子を略ほ描いてゐる。お夏が偶然の出來事により、止むなく二人の盜賊に身を任せるところなども、一概にお夏を惡の權化として片付けるやうなことをせず、環境が、かの女を左様させた所以を客觀的に描き、お夏にいくらかの同情を寄せしめる。山塞に於けるお夏の落着かぬ生活も、巧みに寫され、心の動きも、ほのかに浮び出てる。それから珠之助が朱之助になつて、放縱、浮薄に流れゆく逕路も概ね素直に寫し出されてゐるが、彼れと一時夫婦となつた斧柄及びその母の如きは、徹底的に善人として描かれ、餘りに理想化に過ぎる嫌ひがある。けれどいくらかの微瑕を除くと、『美少年録』は、たとひ未完にもせよ、その前半だけを以て傑作としてよいと思ふ。

## 八 晩年の雄篇『俠客傳』

それから『俠客傳』も亦馬琴の晩年に於ける傑作にちがひなかつた。それは勤王小説だともいはれてゐるが、はじめから、勤王主義のために書いたのか、それとも、唐山の小説『女仙外史』などを見て、楠の遺族をそれへあてはめて書かうとしたのか、分明せぬところもある。が、どちらにしても勤王精神を幾分持つてゐたにはちがひない。たとひ、漠然としてゐたにしても――。

その粉本となつた支那小説『女仙外史』の主人公月君（唐賽兒）のことが、事實だけでも、既に小説になつてゐた。賽兒は蒲臺府に住む民林三の妻で、小いときから佛教を信じた。ところが、林三が歿すると、これを郊外に葬り、その歸途、或山麓で異書、寶劍を偶然手に入れ、爾來、妖術を能くするやうになつた。かの女はプロレタリアの味方として種々救済事業に力を入れたので、その勢力は頓に増大した。官府ではこれを嫌惡し、いろいろ壓迫を加へたので、到頭、賽兒の徒はこれに反抗して、一時、非常な勢となつた。が、最後に官軍が勝つて、賽兒を捕へ、死罪に行はうとすると、いつの間にか賽兒は妖術を以て姿をかくしたといふ。一説にかの女は明の建文帝のために兵を擧げたと解釋せられてゐる。兎に角、女性中、すば抜けた傑物だつた。『女仙外史』の著者が逸早くこれを用ゐたのは聰明な行き方であつた。

馬琴はこれを読んで、女仙月君が建文帝のため兵を擧げた一事から、楠姑摩姫が南朝のため力を盡すとい

ふ趣向を思ひ浮べたのである。それへ『好述傳』の趣向をも借りて部分的着色を加へ、『俠客傳』を形造つた。それは天保元年、六十四歳の時、第一集を公にし、天保五年、第五集を出したきりで、未完だつた。内容は足利義滿執政の時代に當り、相模に野上著演あきのふといふ郷士がゐるといふ事、及び陸奥に館大六郎英直といふ南朝の遺臣がゐる事などから話が始まる。

著演の先祖は美濃の野上の住人で曾て新田氏に仕へて、兵糧運送の役目に當り、性質、義俠に富むを以て知られてゐた。著演又その遺傳により、新田氏の遺族に深く同情した。その遺族とは小六丸のことである。小六丸は館英直に養はれてゐた。それは彼れが五歳の時、南朝の勢不振に陥り、新田貞方及び義隆らが或は越路に、或は相模へ秋の落葉の如く落ちていつた場合に際してのこと、小六丸は義隆の子であつた。

さて英直は小六丸及び彼れと同年の吾娘信夫の成長を樂んでゐると、ある日、信夫は外出した折、何者にか誘拐された儘、歸らぬ。その悲みの折柄、義隆が旅中に病んで、藤白安同なるもの手に捕へられ、生命を奪はれた報に接する。英直夫婦はちつとしてをられぬ。乃ちそのあとを慕つて、旅に出たが、途中病に斃れるに當り、相模の郷士、野上著演に遺孤小六丸のことを頼むと、著演は義に感じ、禮を厚うして、小六丸及び英直の妻らを自家に迎へ取つた。

著演は當時、義隆らの首級が鎌倉の濱へ梟けられてゐるのを奪つて厚くこれを葬り、且つ妻との間に子がないのを幸ひ、小六丸を養嗣子とし、小六助則と名乗らせたところが、間もなく、妻が一子を設けた。次いで

英直の妻が病死するに臨み、貞方から預つてゐた系圖と菊一文字の名刀を助則に渡し、亡夫英直の遺言を傳へた。

助則は茲に始めてわが素性を知り、何時迄も野上氏のもとに厄介になつてゐるべきでないと思へ、或日、突如、家を抜け出して、表面、相模川へ投身したかの如く装ひ、小田原に身を潜める。それは助則が十七歳の時だつた。

さて話變る。一方、越路へ落ちのびた新田貞方は、千葉介兼胤が鎌倉の執權に對して不平を抱く由を知り、これに手頼らうと思ひ、千葉城へ畑六郎二時種と一緒にゆくと、藤白安同の手に捕へられて誅せられた。藤白はそれらの功によつて、執權に引立てられ、相模一國を領するに至る。ところが、かの野上著演の人望隆として、兎角、目の上の瘤となるのを厭ひ、幾度かこれを陥れようとしたが成功せぬ。のみならず、藤白安同の手先、目四郎さへ著演の徳に感じ、舊惡を懺悔したので、著演は頼母しくおもひ、目四郎をして館小六助則のあとを追はせ、力を添へしめることにした。

その後、助則は義父のため、また亡き父の仇に報ゆるため、安同を討取らうと考へ、應永十八年四月、藐古峰へさしかかつた。時に目四郎は漸く茲で助則に逢ひ、胸中を告げる。助則はこれに力を得て、丁度、温泉宿にゐた安同を襲ひ、亡父の記念、菊一文字の名刀を揮つて、難なく安同の首級を得た。その際、目四郎は奮戦して、事成るに及び、過去に於ける安同との關係などに思ひ及んで、情誼上、自刃する。折よくそこへ目四

郎の一子、庶吉が來たので、目四郎は後事を托し安心して瞑目する。

かくて助則は庶吉を伴うて京へ上る途中、吉野山に參詣して、懐古の情に打たれたが、その際、仙女に逢ひ南朝の末路について、しめやかに語り合つた末、仙藥を授かる。その頃、助則は不圖、野上の娘信夫の消息を耳にした。信夫は家を出てから多氣城に近い五柳といふ村里に住む稻城守延の手に養はれ、美しく育つた。ところが、權臣木造木土介泰勝なるものが、信夫に懸想し、守延を殺して、かの女を自分のものにしたといふのである。助則は深く信夫に同情し、泰勝を襲うてこれを捕へ、信夫を奪ひ返して、城守の妻と共に伊勢に赴かせた。

話變つて、楠の遺族の事になる。此處河内金剛山の塵八九といふ山里に無雙の才女がある。かの女は楠正成の曾孫、正元の娘で、姑摩姫と云つた。毎夜、南朝復興のことを神に祈り、平生、劍俠のことを口にし、神仙の術を習つた。かくしてかの女は、仙女九六姫から仙書を受け、無上玄通仙觀を化現する術を知つた。

かくて姑摩姫は應永十五年五月、至妙の術により、北山の金閣寺に忍び込んで君父の讐、足利義滿を襲うて、これを殺し、次いで足利義持をも狙つたが、侍僧一休の法力のため術を破られ、敵手に捕へられる。その際、義持は姑摩姫を囚として南朝方のものを一網打盡的に捕へようとした。偶、曾て楠に仕へた浪人、隅屋小一郎維盈は危く捕へられようとして自刃するに臨み、一子復市正次に遺言して、姫の一身を托する。この時、維盈の妻も亦自刃して世を去つた。

足利義持はその重臣の策謀により、姑摩姫の叔父、楠正直を姫に附けて河内に赴かしめる。また足利家から姫へ千兩の金を贈り、この事を河内千劍破村の強賊らに知らしめて姫を亡きものにせしめようとしたが、これ又成功しなかつた。かうした辛辣な計略で再三、姑摩姫を動かさうとしたが、どれにも欺かれぬ。南朝復興のため姫は益々心を碎くといふのが大體の筋である。この後、馬琴の趣向中には、館小六と姑摩姫とを邂逅せしめる場面があつたが、筆に上すに至らなかつた。

本篇は南朝に同情した馬琴の精神を能く現はし、強者を挫いて、弱者を助けるといふ義侠の美を到るところに説いてゐる。『俠客傳』の題名も、そこから來たのであらう。凝り性の馬琴は史實を能く調べて、或程度迄、時代の空氣を出さうと力め、老練周到の筆と、その巧みな結構と相俟つて、略ほその目的とするところを達してゐる。まだまだ彼れの氣力の衰へを少しも見せてをらぬ。流石に馬琴である。

### 九 英雄小説 『朝夷巡鳥記』

その他、今一つ、目ほしい長篇として『朝夷巡鳥記』がある。目ほしいと云つても、『弓張月』の如く、清新な、颯爽たる風姿がなく、『八犬傳』の如く、馬琴の哲學を綜合化した上に鮮かな畫的場面を配置したところも見えぬ。何れかと云ふと、強ひて感興を作り、その老實の筆で、兎も角も破綻を見せずに纏め得たといふ趣がある。唯彼れが殺伐、陰慘な鎌倉時代を背景とし、朝夷義秀及びその友人吉見義邦、多田光仲らを主

として描き、源家の不振、北條氏の勃興に及び、九州に於ける修羅五郎經任の大亂を記述してゐる點などが、在來能く書いた戰國時代、足利時代の舞臺とちがふところである。

馬琴が本篇を書いたのは、文化十一年、四十八歳の時で、文政九年、六十歳の時、第六篇を出し、未完の儘、筆を擱いたが、そのあとを繼いで、松亭金水が嘉永五年、第七篇を書加へて完結したのである。彼れが『八犬傳』を書いたのも、四十八歳の時であるが、同時期の筆でありながら、何故出來榮えに於て、『巡鳥記』の方が悪かつたかといふと一つは材料にも關係があると思ふ。鎌倉時代の陰慘、殺伐の情景は、誰も書きにくい。勢ひ心理的描寫を加へないと、味解し難い點が少くない。それに馬琴は、爲朝の上に新解釋を下したやうに、もつと義秀に理想化を加へたら宜かつたらう。それらの點に於て、『巡鳥記』は損をしてゐる。

それに馬琴は『八犬傳』の方へ主力を注いだらしく、『巡鳥記』は存外、氣乗りがしなかつたやうに見える。その第一輯の冒頭だけ照らし合せて見ても、すでにわかることは、『八犬傳』では直下に里見家のことを説いてゐるが、『巡鳥記』では、頭から例の理窟を持出して、「蓋世の勇もたのむべからず。經邦の智も誇るに足らず。頂羽は力、山を抜き、威權西楚に霸たりしも、命運竟に究りては、烏江の水、逝つてかへらず。」といふ風に、管々しいことを述べてゐる。その第三回に武藝の師健田秀作が、門弟阿三郎に對し人の道を説くところは、滔々、二千言に及び、「又例の癖が……」と思はしめる。また第六篇卷一で、義秀が狼及び狒々を征伐するところは、『水滸傳』の武松が虎を倒すところと殆ど酷似し、『水滸』を踏襲したことがわかる。技

巧としても巧みだといへない。

それから全説話の統一が付いてゐないのも缺點だ。『巡島記』の登場人物は、『八犬傳』の三分の一に過ぎぬが、三百餘人の人物の出し入れを巧みに取扱つた『八犬傳』の作者としては、『巡島記』の不統一に流れたのは何故かと怪まれる位だが、既に述べたやうに、氣乗りがしなかつたのである。且つ『巡島記』は『八犬傳』が八犬士によつて統一せられ、『弓張月』が爲朝夫妻によつて統一せられてゐるやうな具合になつてゐない。彼等（八犬士、爲朝夫妻）は興味の焦點となつた人物であるが、『巡島記』で義秀に次ぐ主要人物、吉見、多田などは、讀者の興味をつなぐ所以でなく、この二人物を重要視した爲めに、義秀の印象が散漫になつた氣味さへもある。その上、勸懲主義の説教が頗る露骨で、『八犬傳』程度にすら調攝せられてをらぬ。

以上の如き物足らなさはあるが、鎌倉時代を背景として、これ丈の傳奇小説を書いた作家は當時未だなかつたし、また馬琴ほどにこれを大規模に纏め得る精力主義の文士がなかつたらうと思ふと、馬琴の苦心、努力を認めねばならぬ。「大分、感興の乘らぬ書き方をしてゐる點がある」と思ひながらも、尙ほ捨てかねる味を覚えるのは、馬琴が説話者として、老練な手腕を揮ひ、次ぎから次ぎへ筋を面白くして讀者を釣つてゆく力があるからのことにはちがひない。

その内容は義秀、光仲、義邦の三人について説かれてゐるのであつて、義秀が中心であるけれども、筋はこの三人を追うて搬ばれてゐる。本篇に現はれた義秀は義仲の子として生れ、和田義盛に養はれたが、母の巴

が自刃した折、乳母につれられ、房州朝夷に赴いて成長した。やがて彼れは養父の讐を討つ目的で、故郷を出で、旅中、吉見義邦及び舟平（後に多田光仲）と親交を結んだ。その後、北國に赴き、一時、郷士稻向判五のもとにゐて、その養女を妾としたが、更に諸國巡歴の途に就く。時に奥州に於ける藤原泰衡の殘黨、修羅五郎經任の謀叛征伐に赴いた友人多田光仲苦戦の模様を聞き、駭け付けて、光仲を助け、經任を亡ぼした。

けれども義秀は少しも功を誇らうとせず、萬事、光仲の奮闘によつて得た勝利であるとし、北國に歸つた。折柄、彼れの愛妾は死んで、經任の殘黨が、附近を荒してゐるのを見て、これを追ひ拂ふ。間もなく、鎌倉の召に應じて出仕、和田義盛に逢ひ、源頼家にも謁した。快活正直な義秀は、決して北條氏に遠慮せず、その陰謀を北條父子の面前で非難すると共に、北條時政の嫌疑を受けて、經任征伐の功すら報いらぬ多田光仲を擁護し、これを救ふといふところで、義秀のことは終つてゐる。『巡島記』といふ以上、『弓張月』の爲朝の如く、義秀が海外に於ける島めぐりをして、その武功を現はす趣向が、馬琴の胸中にあつたらしく思はれるが、未だそこへ筆を着けてゐない。

光仲、義邦の二人のうち、光仲は、中々見識ある人物として描かれてゐる。彼れは源義仲の忠臣、樋口兼光の遺子で、はじめ北條時政に仕へたが、その奸惡を憎んで、辭し去り、刀野時夏に仕へた。が、これ又性質が正しくないで、此處からも離れ、義秀と義を結んだ關係から、義邦に仕へる。その後、駿河前司廣綱に囑望せられて、その養女を娶り、多田家を繼ぐに及び、廣綱の推薦で、修羅五郎經任を征討する大任を托せられ、

奥州に下つて大功を建てた。が、時政に忌まれて投獄されたのを義秀に救ひ出され、武藏太田の舊領を復すと云ふところで、そのロマンスは終つてゐる。

それから義邦は源範頼の遺子で、足利にあつて失意の境地にゐた。のみならず、刀野時夏が叛したとき、その與黨と見られ、生命を奪はれようとしたところを佐藤元晴に助けられ、その女婿となつた。ところが元晴は奥州で叛亂を起した経任のため亡ほされ、義邦も賊の手中に陥つて、いろいろ辛苦を重ねたところを朝夷義秀に救はれ、鎌倉に歸るといふ一段で、義邦のことは終つてゐる。

全體を通觀して、多く史上の人物を扱つてゐる丈に、怪奇、荒唐、誇張分子が割に少いのが取柄である。その代りに、いくらか材料を持ち扱ひかねた氣味も見え、著しい興味の焦點を缺いてゐるのは、本篇の短所である。第三篇で且見姫に假装させた俳優海老尾加世丸を點出したあたりも、局面を面白くしようとした爲めと思ふが、窮策の一つである。

## 一〇 讀本作家としての六樹園

馬琴について云ふべきことは尙ほ多い。世を去る前年迄、筆を執り、八十二歳の高齡を保つたといふこと文でも、日本の文學者として餘り例のない話だ。その日記、手紙、隨筆、小品及び讀本以外の諸作品についても、彼れの日常生活に關しても、餘りに多く述べべき材料がある。が、それは別に記す事として、茲に讀本方面に異彩を放つた六樹園（石川雅望）の作品に言及する。

小説家としての六樹園は餘り世に知られてゐない。元來、彼れは國文學者として起ち、小説、狂歌などは彼れの餘技とした觀があるので、勢ひ文壇方面では、盛名を馳せるところ迄ゆかなかつた關係もあらうと思ふ。彼れは京山、馬琴に次ぐ長命者（京山は九十二歳）で、七十八歳の壽を保つた。

彼れは寶曆十三年、江戸に生れ、本名を石川雅望、別號を五老山人、蛾術齋といひ、狂歌の作者としては、宿屋飯盛のペンネームを用ゐた。彼れの父は糠屋七兵衛と云つて、小傳馬町三丁目に住み、旅人宿を営んだが、浮世繪に巧みで、畫名を石川豊信と稱した。六樹園も最初、父の業を繼いだが、後、専ら文筆に従事するやうになつた。

彼れは最も國文學の研究に力を盡し、『雅言集覽』の大著（功半ばにして卒し、中島廣足、これを補うて出版）を編纂した。また『源氏』を精讀して『源注餘滴』の著がある。青年時代には、一時、吉原に耽溺したことがあるので、戯作『北里十二時』なども書いた。文藝趣味に豊かな人であつたところから、支那小説を譯して、『通俗醒世恒言』を出版し、且つ清人孫洙の『排悶錄』をも譯した。その讀本として知られてゐるのは、『飛驒匠物語』（文化五年）、『天羽衣』（文化五年）、『近江縣物語』などである。

以上の三篇は、何れも馬琴の如く、プロフェシヨナルに書いたのではない。アマチュアの分子が多分にある。が、そこに六樹園の特色があつてよい。馬琴、京傳の讀本は「商品」として市價を有する（くわんりつ）玄人筋の作



品であるが、六樹園のものは、必ずしも、市價の如何を眼中に置いてゐない。従つてその文體さへも、國文（和文）本位で、一般的な讀者には、少し讀みにくいやうな點がある。けれども馬琴、京傳に見るが如き、わざとらしく、巧みに讀者を釣らうとする手段を採らず、さつぱりしたところが心持よく感ぜられる。

六樹園が最も力を入れて書いたのは、『飛驒匠物語』と『近江縣物語』とであつた。前者は『更科日記』、『今昔物語』、『唇中樓傳奇』、『支那戯曲』及び左甚五郎に關する傳説などを綜合して、一篇の趣向を立て、卓越した工匠墨繩及び竹芝山人（仙人から生れ變つた美男）の情事を中心として書いてゐる。何れかといふと墨繩の藝術的卓越を主として書いた前半の方が印象も深く、興も多い。後半に於ける竹芝山人のロマンスは、彼れと同じく、神仙の生れ代りである王女との戀を普通に描いた文で、別段、特殊の興味はない。寧ろ親同志が讐敵關係にあるために、竹芝山人と結婚することが出來ないで悶死した蘆屋の船主ふなぬしの娘に一味の哀愁を見出すところに幾分の興味がある。この娘が親にかくれて、淺草で竹芝山人と逢ふところなどは、六樹園の筆も生々して、描寫が光つてゐる。

六樹園としては、墨繩のことばかり書くつもりであつたかも知れぬが、それでは餘り色彩に乏しいので、竹芝山人の情事を加へたにちがひなかつた。その結構、筋立は、馬琴、京傳の如く、込み入つてをらず、また無闇に荒唐、怪奇のグロテスク趣味を發揮せぬので、いかにも素直な感じがする。墨繩が、その競争者松光をすぐれた技術の不思議で驚かして、弟子とし、共に材木を山に見に行つて、不知不識、仙界に入り、仙人から優遇せられて、竹芝山人と王女が仙人から人間界へ生れ變るところを見せられたりするあたりも、軽い可笑味があつて、快く讀者を微笑せしめる。

その描寫も亦誇張せず、故らに調子付けず、平々淡淡としてゐるが、そこに普通の讀本にあるやうな、わざとらしさ、輕浮さがないので、讀者は大に助かる。その代りに、十分油が乗つて、深い感銘を與へるやうな場面には乏しい。大體に於て、以上の如き自然味があつて、仙界のことを書いても、左程不自然に思はしめぬあたりは、六樹園に當て込みといふものが少しもないからであつたらうと思ふ。何れにしても、佳作として推奨すべき作品である。

それにくらべると、『近江縣物語』は少しく落ちる。それは支那清代の『笠翁十種曲』中の「巧團圓傳奇」から趣向を借りたのである。順序上、「巧團圓」の概略を述べると、姚あや繼といふ孤兒が隣に住む曹玉宇の女、曹小姐と戀中になつたが、折柄、李自成の亂が起り、皆騒ぎのうちに手を分たねばならぬ有様だつた。その後、姚繼はめぐりめぐつて、眞の父母に逢ひ、且つ曹小姐をも救ひ、郷試にも及第した。また曹小姐の父は、本當は姚器汝といふ大官で、今度の亂を鎮める上に功があつたので、侍郎に任ぜられ、且つ久しく逢はぬ娘や姚繼にも逢ひ、目出たく、大團圓を告げるといふのである。

六樹園の『近江縣物語』では、姚繼が梅丸といふ若者になつてをり、曹小姐は蘭生といふ娘になつてゐる。姚器汝は差當り橘安世といふところであらう。

原作に於て、李自成の亂を背景としてゐるが『近江縣物語』では、盜賊の多い平安朝時代を背景としてゐる。内容は梅丸立志物語とでも云ふべきもので、橘安世の弟子、常人つねんどと梅丸とを對照し、常人は佞惡、梅丸は溫和誠實で、この二人が境遇に應じ周圍につれて移りゆく。常人は墮落して盜賊の群に加はり、梅丸は正しい道を歩んで、文武の達人となり、戰爭に勳功を樹て、近江掾になる。この間を盜賊團が始終出沒するといふことにして筋を搬び、平安朝時代の不安に満ちた空氣を匂はせてゐる。

本篇では、藤原季光が妻初瀬との間に出來た梅丸の假死状態にあることを知らずに、眞に死んだと思ひ込み、船岡のあたりに葬り、金銀珠玉なども、梅丸が持つたのは悉く一緒に埋めたところが、乞食がそれを掘出すと共に、梅丸蘇生し、通りかかつた旅人に救はれるといふところが奇抜で興深く書いてある。第二回以下は平明な文章で、その頃の世相を描き、旅人に救はれた梅丸の一代記を述べてゐるが、誇張、怪奇がない代りに、特別のヤマもなく、平安末期頃の物語でも讀んでゐるやうな心持ちがする。大體に於て、無難の作で、プロフェシヨナルな書き方をしてをらぬのが、何よりも親みを感じせしめる。京傳らの讀本を見たあとで、本篇を讀むと、強い日本酒を飲んでから、淡いビールを少し飲んだと云つたやうな感じがある。

六樹園のほかに、雲府館天歩の『棧道物語』(寛政十年)、村田春海の『竺志船物語』(文化十一年)、戀川好町の『月宵鄙物語』、感和亭鬼武の『自來也物語』などの作がある。また京阪の讀本作者として手塚兎月、栗杖亭鬼卵、竹内確齋、池田東籬亭などもあつたが、特に注目すべきほどの作はなかつた。

## 第五章 歌舞伎趣味を反映したロマ

### ンス(合巻物)

#### 一 柳亭種彦の閱歴

讀本についての考察は以上に留め、今度は傳奇文學の一體たる合巻物に關し、種彦を中心として、概観する。合巻物は外形に於て黄表紙の如く繪を主とし、内容に於て、讀本の如く、浪漫趣味を主とした、一種、變態の小説であつた。種彦も最初、數種の讀本を作つたが、到底、馬琴に及び難いことを知り、合巻物の上に彼れ獨自の世界を切り開いてゆくことにしたのである。その代表作は、『田舎源氏』だつた。

馬琴が合巻物に力を入れることを潔しとしなかつたのは、唯單なる負惜みのためばかりではなかつた。讀本は繪よりも内容を主としたので、十分、作家の技倆を發揮出来るが、合巻物は繪を主とする形があるので、作家の腕を揮ふには、聊か物足りないところがあつた。それに馬琴の云つたやうに、合巻物の讀者層は、讀本よりも更に廣い丈に、勞少くして功多く、報酬の方も、合巻物の方がよかつたのであるが、馬琴は、それに満足してゐなかつた。彼れの如く自信強く、抱負もある作家は、主力を讀本に注ぐを以て、正當と信じた

のである。

ところが、種彦は必ずしも左様考へてをらなかつたらしい。彼れは『浮世一休郭問答』(文政五年)の中で「此の冊子は讀本を綴らんとして大むね趣向をまうけおきしが、障ることありて草稿を終らず。然ればとて反古にせんも口惜しく、其繁きをはぶき、唯要を摘んで例の繪草紙とはなしぬ。」と云つてゐるのを見ると讀本の如く、こみ入つた事の末に至る迄詳密に叙せず、その要所々々をざつと記すのが、合巻物の本質だといふ風に考へてゐるのではなからうか。毎ページに必ず繪があつて、それが主たるかの如くなつてゐる以上、文章、會話に於て、讀本式の周密を旨とする必要がなかつた。それに讀者は少年少女か、或は讀本の繙讀者にくらべて、いくらか程度の低いものであつたから、「繁をはぶき、要を摘む」といふことを旨としたのであつたらう。それは『田舎源氏』の書き方を見ても分ることである。

それも一つの行き方で、無意義ではなかつたが、唯物語が佳境に入るかと思ふと、すらすらと一筆書きにして了つて、讀者を失望させる點がないでもない。殊に今日の眼で見ると、この感が深い。讀本の描寫ですら、皮相的に思はれるのであるから、合巻物は尙更のことで、昔の人々の如く繪を樂むにしても、その説明に充當せられる小説が描寫の上に於て、讀本よりも略式になつてゐることは、一層、物足りない。が、それらについては、當時の文壇的情勢を參酌して、餘り過酷に批判せず、多少、同情を以て評價するより他はない。

さて茲に順序上、柳亭種彦の經歷について述べる。彼れは天明三年、幕府旗下の士(食祿二百俵)の家に

生れた。彼れの父は相當に文學の素養があつたと見え、種彦が幼時、疍辯が強いのを憂ひ、「風に天窓はられて眠る柳かな」の句を與へて、訓戒したといはれる。種彦が小説に志したのも、一つは、父の遺傳感化によると思ふ。

彼れは通稱を高屋彦四郎といひ、姓は源、名は知久、愛雀軒、足薪翁、諺紫樓などの別號を持つた。文學上の素養は相當に積んだらしく、俳句、狂歌、川柳の嗜みがあるほかに、國文漢籍などを修めた。平生、殊に芝居好きで、日本古今の劇文學は大抵、涉獵しないものがないといはれた。この點、馬琴が特に支那文學に傾倒したのと、好個の對照を爲してゐる。彼れの作品に歌舞伎趣味が濃厚に浮んでゐるのは、そのためだつた。

種彦が文壇へ始めて顔を出したのは文化四年、二十五歳の時であつた。その際、『奴の小萬物語』、『江戸紫三人兄弟』、『阿波の鳴門』などを公にし、讀本作家として起つたのであつた。それは、京傳が『本朝醉菩提』を出し、馬琴が『弓張月』、『三七全傳南柯夢』などを出した時分、讀本勃興の形勢が明かに看取せられたからであつたらう。續いて種彦は翌五年、六年に亘り、洒落本『山嵐』のほかに『淺間嶽面影草紙』などを出したが、彼れが期待したほどの反響がなかつた。それで少し失望の體で、今度は文化八年、合巻物『鱸庖丁青砥切味』を出して見ると、この方はいくらか手答へがあつた。

勿論、その頃は、合巻物で、矢張、第一流の地歩を占めた京傳が勢を張り、馬琴、三馬、一九及び鶴屋南北な

どが腕を揮つたので、この方面への進出も、決して容易でなかつた。が、合巻物の才能が、種彦に恵まれてると見え、この方は、始めから評判が悪くなかつたので、翌九年には、『京一番娘羽子板』、『梅櫻振袖日記』などを出したのである。勿論、讀本も、文化十年には、『勢田村龍女本地』、『緞手摺昔木偶』などを出したが、爾後、再び手を着けず、専ら合巻物に全力を集中したのである。

合巻物の第一人者とも云はれた京傳のものをみると、流石に黄表紙で鍛え上げた丈に、繪面に合せて文章筋を書下すことが巧みである。潑刺たる彼れの才氣がそこに渦を巻いてゐるし、局面の展開なども手に入つてゐる。が、讀本ほどの興味さへないのは、繪を主として書いた爲めである。種彦の所謂「繁を省き、要を摘む」といふ筆法が茲に出てゐる。が、描寫が粗枝大葉であるから、讀むと味に乏しい。唯彼れの讀本に見る怪奇と誇張が少い丈に助かる位のものだ。けれども合巻物の呼吸といふ上からは、京傳の行き方が正しかつたのである。茲に文學上の矛盾がある。それは如何ともすべからざる矛盾であつた。

が、種彦にして見れば、讀本で發展する見込が立たぬ以上、合巻物に於て、自分の世界を開拓してゆくよりはかはなかつた。それに種彦は、京傳の如く、多少の獨創的才分を持たず、馬琴の如く、勸懲主義の大旗を立てる自信力もなく、一九、三馬の如く、市井趣味の小説を作る長所もなく、何れかと云へば、上品を主として、平生好む歌舞伎趣味の小説を書かうとしたのであつた。翻案といふことが、彼れの作品を略ほ一貫してゐるのも、そのためで、思ひ切つて、大膽に新天地を開くといふやうな勇氣に缺けてゐた。その正本製の如

きも、既に京傳が合巻物の上で、端緒を示してゐることは、彼れの『朝茶湯一寸口切』(文化九年)などを見てもわかる。短い地の文が一寸這入つてゐる丈で、芝居の臺詞的な會話本位になつてゐる。

それらによると、種彦は餘り文學的天分に恵まれてをらぬ、その成功は、彼れの勤勉と努力とに負ふところがあつたやうに思ふ。かくて彼れは文化十一年から天保十三年迄、合巻物の作家として始終一貫した。その大成したのは、『田舎源氏』初篇を出した頃(文政十二年)からで、それは四十七歳の時だつた。種彦といへば、『田舎源氏』を思ひ、『田舎源氏』といへば、必ず種彦を思ふ。その作品を彼れは五十歳前に書きはじめたのである。

それほど有名な『田舎源氏』ではあるが、今讀むと、どうも退屈する。國貞の繪については、必ずしも左様でないが、小説の方はどうも讀みづらい。優しく、上品な書き方をしてゐるが、頓と熱がない。それに描寫は粗枝大葉であるから、一向、油の乗つたところも見えぬ。まあ無難だといへる丈のことで、馬琴、京傳の讀本などに見る荒唐、怪奇、誇張のないのが氣持がよい位のものだといふよりほかに仕様がな

## 二 『田舎源氏』が歓迎せられた理由

それなら『田舎源氏』は何故、あんなに歓迎せられ、高評であつたか。それは(一)大作「源氏物語」を近世式に翻案したこと、(二)文學者として氣品よき彼れの柄が、それに適したこと、(三)結構、筋立を整へ

る上に於て長所を有し、且つ歌舞伎趣味が豊かであつたこと、(四)國貞の源氏繪が、興趣を助けたことなどによると思ふ。

私一個の立場からいふと、すば抜けた『源氏物語』の藝術味をいくらか知つてゐるために、『田舎源氏』に却て興が持てぬ。けれども種彦の時代に於ける一般讀者は、『源氏物語』をその時代相應に解釋し、翻案したといふ上に、少からぬ興味をよせたのである。馬琴の『八犬傳』の如きも、大作『水滸』によるところが多いと傳へられた一事が、人氣を呼ぶ一要素ともなつたのだ。殊に國文學趣味を多く持つ大奥の女中などが、『田舎源氏』の出現を喜んだことは非常なものだつた。

それに身分にもよることであるが、小説家中、種彦が一番、上品であつた。彼れの趣味も上品であれば、文章も上品だつた。『源氏物語』は、そのすべてが貴族趣味で、典雅、優麗の趣に満ちてゐる。これを『水滸』の梁山泊趣味にくらべると、大分の差がある。且つ『水滸』は種々の小説家が翻案に手を着け、當時は馬琴の『傾城水滸傳』が大當りを取つてゐた時代だから、種彦は、その上品な趣味から、『源氏』に着眼したのであつたらう。

勿論、彼れは、最初から『源氏』を愛讀してゐたらしいが、研究者ではなかつた。趣味の上から、『源氏』を喜んでゐたといふに過ぎない。その座右にあつたのは、加藤美樹註釋の『湖月抄』に過ぎなかつた。傳ふるところによると、『水滸』熱に對して、その後座を追ふことを潔しとせず、『源氏』翻案を考へつたといはれるが、いづれにしても、『水滸』翻案は種彦の柄になかつた。『源氏』こそ彼れの平生にふさはしく、性格にもかなひ、趣味にも一致したと云ふべきである。

凝り性の彼れは、『源氏』を翻案するについて、度々、『源註餘滴』の著者六樹園の教へを請ひ、手の届く限り、力の及ぶ限り、『源氏』に關する文獻を涉獵した。かうして彼れは、十分、『源氏』の風趣、結構を呑込み、然る後に着筆したのである。即ちそれは彼れの柄に合つてゐる上に、その熱心を以てしたところに、歡迎さるべき下地が出来てゐた。

それから種彦の歌舞伎趣味と周到な結構筋立の用意が『田舎源氏』の成功を得しめた一要素であつた。勿論、馬琴、京傳の讀本にしても、或程度迄、歌舞伎仕立でどの小説も、歌舞伎趣味に迎合したが、殊に種彦は平生、芝居好きで、歌舞伎に精通し、正本仕立の如く、小説の劇化を計つた位であつたから、『田舎源氏』の場面も悉く歌舞伎式とした趣がある。彼れが挿畫の見取圖を描いたのを見ても、そつくり歌舞伎だつた。左様した場面を活動寫眞式にぐるぐる轉回してゆくところに、『田舎源氏』の興味があつたと思はれる。

それに種彦は結構、筋立の上に周密の思慮を重ね、前後の脈絡よく通じ、照應や對立や變化などについても、注意するところがあつた。勿論、大體の構圖は、原作によるのであるから、それへ倣るやうな人物を配合し、矛盾、錯誤のないやうにする上に種彦の苦心があつた。かうした事について、彼れには、一種の長所があつたから、この事が『田舎源氏』を書く上に役立つたのである。若しそれ國貞の挿畫については、特にいふ

必要があるまい。

右の如く、種彦の時宜に適した思付とその技倆によつて、『田舎源氏』の成功を収めたが、曲亭馬琴の如きは、文學上、これを左程の價値なきものとして輕視するが如き口吻を洩した。一體、馬琴は純文學上から合巻物の價値が大したものでなく、讀本より下位にあると信じてゐたのだから、種彦の『田舎源氏』についても、素より感服しよう筈がなかつた。それに馬琴と最も親しかつた伊勢の殿村篠齋が、再度、手紙のうちで『田舎源氏』を賞揚したので、馬琴はそれを苦々しく思つたらしい。それで彼れは、『田舎源氏』を評して、「全く合巻物の體裁にあらず。これも新奇といはゞいふべし。故人京傳にくらべ候はゞ、その才、十段も下に候處、これが唯今の戲作者の一家に候はゞ、才子はなきもの也と一嘆息いたし候。」云々と述べた。「京傳よりも十段も下に候」といふことは、誇張に失するが、二三段、下位にあるのは止むを得ない。

それにしても、種彦の優雅な筆によつて、江戸城の大奥に於ける生活の一面がわかり、合せて、大作『源氏』の近世的解釋と民衆化とを實行したところに、一つの意義があつた。江戸時代に「源氏」の二字を用ゐた小説は、可なり出たが、これを集大成したのは、『田舎源氏』であるといつてよかつた。それ故、馬琴の如く、頭からそれを貶してかかるのは妥當でない。今、左に『田舎源氏』の梗概を述べる。

### 三 『田舎源氏』の梗概

室町御所が榮えた頃、將軍足利義正は正妻富徹とよしの前のほかに二人の愛妾を持つてゐた。一人は花桐、今一人は晝顔と云つた。義正の愛は花桐の方に傾き、かの女は次郎の君を設けた。當時、既に正妻の腹に出來た長男義尙があつたに關らず、義正は次郎の君を寵愛して世嗣としようとした。ところが、次郎の君の五歳の時、花桐は病死したので、義正の愛は一層深くなつた。かくて次郎の君は成長、元服し、名を足利次郎光氏と云つた。即ち本篇の主人公である。

茲に管領音川勝元の妹に猪名野谷いののやといふのがあつた。かの女は、實際、勝元の妹ではなく、將軍義正の妹、眞弓の方と花満中將との間に出來た姫君であつた。猪名野谷は光氏の計で室町御所に入り、藤の方と呼ばれて、その容貌が卒去した花桐に似てゐるといふので、義正の寵愛を受けた。また光氏は、藤の方が自分の母に似てゐるといふので、内心、かの女を慕つた。或時、光氏が人丸の祠で、藤の方と話してゐると、かねて藤の方に横戀慕した山名宗全といつて音川勝元と權力を争ふ悪人に見付けられ、よくない噂がばつと立つた。それについて、藤の方は心を苦めたが、光氏は兄義尙を越えて世嗣となりたくないと思つてゐるので、却て浮名を立てられたのを幸ひとし、表面、耽溺を装うて、嗣子となることを避けようと思ひ、いろいろと苦心した。そのうち、光氏は十七歳になつたので、足利家の重臣赤松正則の娘二葉を正妻に迎へた。

或夜のこと、室町御所の寶藏に大膽な女賊が忍び入り、小烏丸の名劍を奪ひ去つた。その寶刀詮議のため、また謀反心を抱く山名宗全を倒すため、手段として、光氏は心にもない放蕩を始めた。彼れは家臣仁木喜代

之助の留守宅に宿つて、その妻空衣に情を通せんとし、或は五條坂の賤が家で美少女黄昏を見そめて、はかない契りを結び、或は六條三筋町の廓に通つて、遊女に戯れた。かうして彼れは悪人山名宗全の様子を探り小鳥丸の行方を知らんとした。折柄、黄昏の自刃によつて、その母、凌晨が去ぬる夜、御所の寶藏に忍びこみ、奪ひ去つた寶劍は今、山名の手にあると知れて、前途に一路の光明を見出した。また光氏は三筋町の遊女阿古木が御家の寶、勅筆の短冊を所持してゐると知り、それを手に入れたい一心から、阿古木のもとへ度々通つたのである。

話變る。茲に紫といふ十二ばかりの美少女があつた。豪族遊佐河原之進國助の落胤で、末は遊女になすつもりでもあらうか。葱屋の祕藏娘として育てられてゐたのを、光氏が不圖、垣間見て、そのあどけない美しさに心をひかれた體にして、到頭、これを根引し、嵯峨の館に圍つた。が、それは、かの女の父を山名宗全の味方とならしめぬやうする心づかひからであつた。

その頃、光氏は寶刀の詮議と悪人の様子を知らため、侍女杉生、尼刈萱などの手引により、そつと度々、藤の方と逢つた。そのうち、藤の方は妊娠して玉のやうな男子（春若丸、後に義植）を生んだ。義正はかくと聞いて、深く悦んだが、その容貌が何となく、光氏に似てゐるために、いろいろの噂を生んだ。藤の方は深くそれを氣にした。

當時、義正の兄、義勝の嫡女に稻舟姫といふのがあつた。糺の森のほとりで、わびしい不遇の日を送つて

ゐた。この姫に對し、山名宗全の子統清が、うるさく云ひよるので、光氏は謀を以て、統清を翻弄し、彼れを追ひのけた上、親切にいろいろ世話をした。この稻舟姫に仕へた水原といふ女は、後に室町殿の奥女中となつたが、既に五十の坂を越しながら、光氏に懸想し、或時、不圖、宗全からの廻しもの、侍女白絲と往復した密書を落した。光氏は茲に手がかりを得て、問ひ質すと、かの女は、その素性を明かし、糺の森の御殿で足利家の寶物、玉兔の名鏡を盗んだことを白狀した。やがてその鏡は水原の娘綾萍の手から光氏へ戻つた。かく光氏が種々、手をつくしてゐるうちに、正妻二葉の上は光氏がいろいろの女に關係して、かの女を疎外するのを恨み、病んで世を去つた。その怨靈が頻りに光氏が愛した阿古木を惱ましてやまぬので、阿古木は娘磯菜を光氏に托し、伊勢地方へ赴いたのである。

時に青葉琵琶之助の娘桂樹は、云ひ交した夫、石堂馬之丞が病死したと思ひ定め、かの女を挑む光氏と情を結ばうとした折柄、馬之丞の生きてゐることを知つて悔ひ、夫に向つて貞操を立てた。が、そのため、桂樹を御所に入れようとしてゐた富徴の前と光氏との間が面白くなくなり、讒訴が頻りに行はれた。光氏はそれを快からず思つたのみならず、深く打案じた。

そこで光氏は決心して、惟吉、馬之丞、喜代之助の子、良清らを伴つて、都をあとに須磨へ赴き、そこで、わびしい生活をした。そこへ都の紫君から、度々たよりがあつた。茲に山名宗入といふ豪族が、その邊に住んでゐた。宗全の弟ではあるが、惡逆の仲間に加はらず、都から遠く離れた明石の里にをり、美しく育てあけ

た娘朝霧を自慢に日を暮した。宗入は光氏が須磨へ來たのを知り、自分の邸へ迎へようとした。その頃、都では宗全が叛亂を起して戦争が始まり、悪人らの一隊が須磨へ押寄せて光氏を亡きものとしようとしたが、暴風雨に辟易して逃げ去つた。こんなことから、光氏は明石へゆくのを躊躇したが、或夜、生母花桐の亡靈が現はれ、頻りに明石へゆくことを勧めるので、光氏は彼處へ行くと、宗入が宗全の弟である事から、自然敵の様子も知れるであらうと思ひ、すぐ須磨のわび住ひをやめて、明石の宗入の邸へ赴いたが、やがて朝霧との關係が、いつの間にか成立つた。

#### 四 足利光氏の後半生

その後、都の戦亂が平定し、周圍の形勢は漸く光氏に有利となつたので、愈々都に歸ることに決した。朝霧は、その時、光氏の胤を宿してゐたので、頻りに別れを惜んだ。光氏も離れ難い思ひをしながら、都へ向つて出立した。そのあとで、朝霧は間もなく、女兒を生み、明石姫と呼んだのである。

時に將軍義尙は、その子、香壽丸を世嗣としようといふ母君富徹の前の意見を斥け、藤の方所生の春若丸を世嗣としたので、春若丸はやがて軍職を襲いで、尼利義種と云つた。その北の方には、執權赤松高直の娘初花が上つて、富世の前と云つた。

都へ歸つてから光氏は、或時、不圖、桂川のほとりで、曾て阿古木から托せられた娘磯菜が美しく育つたの

を見て、心を惹かれ、光氏の計ひで、義種の御側に仕へしめた。ところが、磯菜は富世の前と寵を争ひなどしたので、光氏も巻きぞへをくひ、惹いて執權赤松高直との間が面白くなつた。

そのうち、明石の宗入の娘朝霧が明石姫を携へて上京、桂川の邊に簡素な、氣の利いた家を建てて住んだ。光氏は當時、嵯峨の館にゐるが、紫君に氣がねしながらも、明石姫の可愛い姿に心をひかれ、度々桂川の館を訪うた。その度毎に紫君は妬み心を起して、快く思はぬ。その頃、將軍義種は兄の香壽丸を請ひ受けて、その世嗣とした。

話變つて、茲に紫君の腰元に菊咲といふのがあつた。光氏はその美容に心ひかれ、氣輕に戯れると、その噂がばつと殿中に弘まつた。菊咲はそれと知つて、何故か喜ばぬ様子で、暇を乞ひ、家へ戻つた。光氏はかく冷めたい様子をされると、尙ほ捨てかねて、或雪の夜、わざわざかの女の家を訪うた。そつと菊咲の部屋に入つて、親しく話すと、菊咲は涙ながらに、山名宗全の女と生れたことを白狀し、その實名を朝顔といふ旨を打開けた。次いで朝顔の母も亦身の上を打明け、寶劍小鳥丸を御渡しするから、娘の一命を助けてほしいと嘆願した。そこで長い間、行方の知れぬ寶劍が光氏の手に入つたのである。

その時分、光氏の一子、夕霧丸（二葉の前所生）は外祖母の手で育ち、立派に成長したので、足利雲井之丞氏仲と名乗つた。學問がよく出來て、前途に望を囑せられてゐた。氏仲は幼馴染の雁音（赤松高直の女）を戀し、雁音も亦氏仲を憎からず思つた。外祖母は早くも、それと知り、成るべく、夫婦にしたいと思つたが、



高直の方では、政略上から、雁音を御所に差上げようと思ひ、氏仲と婚することに反対した。

茲に光氏が曾て契つた黄昏の女に玉葛といふのがあつた。それは光氏と情を結ぶ前、高直と親しくした頃に出來たのである。かの女は母亡き後、その家來筋に當る大兒彌五郎夫妻に養はれ、九州のはてまで至つて、苦勞を重ねたが、年頃になると、母そつくりで、求婚するものも多かつたが、應ぜず。都へ歸つて、父にめぐり逢ひたいと一心に思つた。光氏はその事を侍女から聞き、不圖した機會で、玉葛に逢つた。ひどくなつかしい氣がしたので、世話する事にし、自分の娘と披露して、立派な生活をさせた。玉葛は心から喜ぶうちにも、早く實父に逢ひたいと思ひつめた。

この美しい玉葛の姿に足利四郎正尙を始め、一色多京氾廉、赤松柏之助などが思ひを寄せたが、そのうち、玉葛は赤松高直夫妻と逢ひ、實の父が高直だと知つた。それについて、一番失望したのは柏之助である。ところが、そつと思ひをよせ乍ら、實の妹だと思ひ、遠慮した足利氏仲は、愈々彼の女に慕ひよつた。然し誰よりも熱心で執拗だつたのは一色氾廉で、彼れには賤機といふ妻があるに關らず、何とかして玉葛を手に入れようと思ひ、柏之助を通じて、高直に懇請した。高直は反対でなかつたが、光氏は玉葛を自分の子、正尙に嫁せしめたいと思ひ込んでゐるので、高直も流石にそれを拒みかねた。

以上で『田舎源氏』は終つてゐる。種彦の歿後、發見された二十九篇、四十篇には、玉葛を中心としたロマンスがある丈で、矢張完結してをらぬ。唯玉葛の可憐な思ひと賤機の嫉妬に燃ゆる心とが寫し出されてゐる丈だつた。この點は惜しい氣がする。若し水野越前守の改革によつて、種彦に對する壓迫がなければ、彼れも落膽せず、また病氣にもならず、數年存生して、『田舎源氏』を完成したかも知れぬ。ところが、天保十三年六月、種彦の上官、永井五右衛門から呼出を受け、以後、著作の筆を斷つべきことを嚴命されたので、小心の人であるから、深く恐縮し、爾後、心身を害して、同年七月、病革り、六十歳で卒去した。但し『田舎源氏』は春水の人情本の如く、絶版を命じられなかつたと云はれる。

## 五 光氏の生活態度についての非難

一體、『源氏物語』は馬琴が誨淫の書として斥けたのであるが、これを翻案した『田舎源氏』は、表面原作のあとを追うたけれども、武士的精神を以て一切を解釋し、原作の光源氏が自然の性情を流露したのとはちがひ、光氏の耽溺は、寶刀の詮議や、悪人山名宗全らの様子を探るための手段だとした。即ち光氏の戀は功利的で、胸に心火が燃えて、戀するのではなく、他の目的のための戀であつた。紫を請出したのも、黄昏と契つたのも、水原に戯れたのも、朝霧に心を寄せたのも皆享樂のためでなく、一つの政略からだつた。が、それにしても、餘りに多くの女性と交つたといふことが、正當に解釋されにくい。紫式部の原作の如くであるに、寧ろ自然に近いが、忠義のため、將軍家のためといふことが主で戀から戀へ移りゆくといふことは、辻褄が合はぬ。また寶物を盗み出したり、これを所持したりしてゐるものが、多く女に限られてゐるのも不自然。

で首肯し難い。

それに内容の上に右の如き近世的解釋を下すならば、原作に拘泥せず、もつと女性の人数を減らし、事件をも別に創造して、表裏ともに近世の人情に一致するやう、大膽な態度を執つたら宜かつたであらうと思ふ。例へば、馬琴が支那小説『金翹傳』を『風俗金魚傳』として翻案するとき、原作に於ける草賊の頭を將帥名家の子孫とし、その妻も亦無双の孝女だとして全く馬琴一流の人物としたやうに徹底すれば、もつと作品として特色を出せたであらうと思ふ。

勿論、彼れはその點に氣付き乍ら、一つの矛盾に陥つた。一方では、當時の芝居式に暗殺や毒殺や反間苦肉の計略や仇討、身代りの類を點綴し、光氏が紅葉狩を舞ひながら、惡漢を斬殺するといふやうな場面迄用ひ、所謂、その頃の當世風にしながらも、須磨、明石の巻以後は、漸次、光氏を腹からの享樂主義者の如く扱ひ、六條の館に多數の美婦をあつめて歡樂に酔ふかの如くにしたのは矛盾である。また血腥い足利時代を背景としたのは、少くも表面、閑雅和易な享樂本位の平安時代と全く背馳せざるを得ない事となる。茲にも、一つの矛盾があつた。が、それも草双紙の常で、一つの愛嬌だとして了へば論はない。

今一つ、『田舎源氏』に於て感ずることは儒教化せられた武士道が、ともすると、虚偽を醸しやすいことである。光氏の行動によつてもわかる通り、彼れは表面から見ると、實に耽溺生活をするに留らぬ。不義、いたづらを重ねてゐる。道德上から、彼れの行動を點檢すると、指彈せられねばならぬ。ところが、その實、彼れ

は耽溺、享樂を裝うて、彼れの忠義を行ひ、公正な道をゆかうとするのである。

けれども實際上、左様したことが許されるであらうか。故らに情を矯め、思ひを抑へて冷めたい石のやうな打算的な考へで、すべての場合に臨み、多くの女性を翻弄して犠牲にすることが出来るであらうか。いかに正義のためとは云ひながら、それは外部から許されぬ。のみならず、その行動者自身が良心の呵責に堪へぬこととなるであらう。それも、京都といふ一小區域、殊に貴族の一部に於て、享樂思想が旺んで、政治上、これといふ事件も大方なかつた平安時代なら、兎も角、鬭争止むことなき殺伐な足利時代に、光氏の如き悠悠たる享樂生活が出来ようとは思はれぬ。

よし、それが江戸時代のつもりであつたとしても、光氏の行動は久しく黙過せらるべきことでない。彼れはいろいろの美名のもとに、その愛慾を満たし、多くの女性を犠牲としてゐる。而もそれについて恥づるところがなく、内省に缺けてゐるとしたら、彼れは偽善であらねばならぬ。その戀愛行動は利己的で、些の純情がない。それは光氏の罪か、時代の罪か。

蓋しそれは、武士道の罪である。武士道そのものは、決して悪い分子を含んでをらぬが、忠孝のためには、どんな犠牲をも拂はねばならぬとする一つの慣習が、そこから發生し、人情を蹂躪しても、士人としての面目を全うしなければならぬとするの風、即ち義理のためには、忍ぶべからざることすら、忍ぶといふことが、一轉すると、虚偽の風を生ずるに至る。光氏の如きは、その好典型だと思ふ。

種彦の生活した時代は、もう武士道が形式化してゐたのである。山鹿素行の武士道學の完成は武士道の概念、内容を明かにしたが、それによつて規定せられた武士道は、それ以上に展開せず、禮儀とか典例とか作法とかいふことが主となつて、内生命を輕視しやすくなつて來た。それが江戸文化頽廢時代に入ると、一層形式のみの武士道とならざるを得なかつた。そこから、虚偽を生じ、偽善を生む。種彦の『田舎源氏』には明白に左様した暗面曝露をしてゐる。それが心あつてしたことか、偶然、左様なつたのであるか、種彦は馬琴の如く、はつきり彼れの主張を示さぬので、明白を缺くが、恐らく、偶然、左様した結果に立ち至つたのであらう。

更に女性の方面に於ても、既に好色の名が高い光氏のために、犠牲となることを甘んずるほど、幼稚で低能なものだと思へぬ。ところが、多くの場合、彼等は光氏のために操られ、光氏のために奴隷視せられてゐる。といふと、少しく極端に失するけれども、萬事策略本位で、戀愛假面のもとに動く光氏を信じ切つて、彼れの云ふ儘になる女性が多いのは、平安時代ならば兎も角、足利時代にありさうに思はれぬ。それを平氣で無反省、没個性的に描いたのは、つまり、形式化した武士道に於ては、ともすると、女性の人格を無視する傾向があつたからではなかつたか。それとも、文化文政時代の女性が美貌の權力者の前では、それほど、没個性的であつたのか。茲にも、一つの問題がある。

勿論、兒女を相手とする草双紙であるからと云つて了へば、それ迄のことであるが、それにしても、原作

『源氏』では、光源氏が好色生活のうちに溺れつつも、次第に苦悶してゆく心持が現はれ、いつも黄昏のやうな空氣に包まれた歡樂の悲哀がある。また光源氏を中心とする女性も、『田舎源氏』のそれの如く、没個性的ではない。それは、光源氏が多恨多情で、浮萍の如き情生活をしてゐても、一味の純情が彼れに於て見出されるといふ點にも關係すること、『田舎源氏』の光氏の如き虚偽、虚飾、偽善がないのである。即ち紫式部の描くところ、種彦の描くところとを對照すると、そこに時代の隔り、文化の相異點が明かに見える。

## 六 種彦の正本製

以上、『田舎源氏』の考察を略ぼ終つたので、種彦の正本製を一瞥する。『田舎源氏』で窮屈な態度をとすると曝露した彼れも、茲へくると、のびのびしてゐる趣がある。正本製は唯讀むための脚本だといふわけであるが、唯それ丈ではない。その何れもが、眼前で芝居を見てゐるやうな感をさせるため、芝居の内外の光景は勿論、その取扱ふ事件人物も脚本同様にし、讀者が左迄、想像力を働かせずとも、そこから觀劇の實感を生ずるやう書いてある。これを助けるのに挿畫があつたから、當時、歌舞伎好きの人々にひどく喜ばれたのは、最も千萬であつた。

もう京傳は、種彦に先立つてかうした行き方に近いものを合卷物で書いてゐるが、まだ種彦ほどに、芝居めかさなかつた。茲に種彦の作者としての働きがあつて、彼れの器用さを思はせる。正本製は、彼れ独自の

表現式だといつても宜い位で、それには、當時、戯曲出版のことがいくらか流行したのを参考としたのであらうかと思ふが、一面京傳あたりから暗示を得たのであつたらう。

種彦の正本製は、文化十二年、その初篇を出し、翌年第二篇、翌々年第三篇を出すといふ風に十二篇續けた。その完成したのは天保二年で彼れの四十九歳の時だつた。初篇は『於仲清七物語』、二篇は『小稻判兵衛物語』、三篇は『顔見世物語』、四篇は『於菊幸介物語』、五篇は『吾妻花雙蝶々』、六篇は同續篇（吾妻與五郎新狂言）七篇、八篇、九篇は『立物抄』としお染久松のロマンスを扱ひ、十、十一篇は『淨瑠璃狂言』として、『夕霧伊左衛門物語』としてゐる。十二篇は『花咲綱五郎』で、大體かうした調子のものであつた。

以上のうち、第三篇を除くと、概ね世話物である。それらは大抵、淨瑠璃や脚本に於て取扱はれてゐる材料で、それへ種彦の趣向を加へたものであつた。今日の眼で見ると少しも新味を感じないが、彼の武士道的精神が、その何れをも貫いてゐる。何事も、彼れは武士道の心で解釋しなければ満足しなかつた。それが『田舎源氏』に現はれて、内面的に矛盾、破綻を生じたが、正本製に於ては、江戸時代を舞臺とし、主として義理人情の葛藤を描いてゐるから、彼れの武士道趣味も、わづらひを爲してゐない。第三篇で、相馬の殘黨や源頼光の弟頼信などを扱つて、荒唐、怪奇を恣まにしてゐても、それが小説で見るとやうに不自然とも思はれぬのは、基に於ける定石のそれのやうな芝居通有の行き方をしてゐるからであらう。のみならず、その怪奇、荒唐さへが、一種の可笑味となつて讀者を微笑せしめる。

それは種彦が、この方面の呼吸を、十分、知つてゐたからで、人物、場面の配置、臺詞の受渡しなどは頗る手に入つてゐる。手に入り過ぎて、餘りに黒つほい。が、その代りに、鷹揚なところがなく、聊かコセ附く氣味がある。けれども種彦自身が面白がつて晝いて居る様子が歴々と想像される位であつて、讀者側も理由なく、面白いといふことになる。そこに正本製に於ける種彦の特色があつた。

唯その著しい缺點は、勸懲主義に左右されて、悪は何處迄も悪、善は何處迄も善と定めて了つてゐるところである。悪人は最初から、すぐにそれとわかり、善人とても同様なのが興味を滅殺する。お染久松のロマンスは力作であるが、第一幕に於て、登場人物の善悪が大抵わかつて了ふやうに書いてあるために、話の底を破るのも同様、興味を減する憂ひがある。それは彼れの正本製に於ける缺陷で、一つは讀本に馴れた讀者が左様したことを要求してゐたのかも知れぬ。が、左様した不満はあつても、正本製は種彦の柄にびたりと嵌つて、そこに彼れ獨自の面目を發露してゐる。藝術家としての種彦を解するには、この方面の作品を味はねばならぬ。今左に『於仲清七物語』の一部を掲げる。

○於仲清七物語（第一場）

○荏柄天神の場「ヤレ／＼吹矢も置にしてどれ茶を一ツばい飲で行ふと吹矢の店より二三人茶屋の牀几に腰を打掛「ナント此荏柄天神様はいつも賑やかなことで御座るノ」左様とも／＼今日は殊更御縁日何でも御利生のある様しつかりと拜むで行ふ「イヤ天神様より御利生を受けたいは此所の娘モシお前の名は何

といふト問はれて莞爾と打笑ひ「ハイ梅と申し不束もの今日始て出ましたればまだお舊交の御方もなし御最辰成れて下さりませそれはそふとあの吹矢といふものは中ると何か人形が出ますものでは御座りませぬか「チ、初手に中るといふ鹽梅に金時が出るは又中ると一ツ眼のきり禿が茶臺を持ってこふ出るはトしかた咄しの側から、まだ中るものがある此繪草紙が中つて板元から褒美が出た「イヤおれが的が此所にあると浮かり起たお梅をびつしやり「そりやこあたりにあたつたら笑ひが出たと仇口皆散々に立歸る。折から來るは道具屋の團九郎、お仲といふて大磯に并ぶ方なき名取の藝子幫間末者を引連て華表の前に企佇ば船頭の生の八遙か後より聲高に「モシ旦那此荏柄の天神までは大磯から餘程の道どふいふ趣向で御座りますといふうち茶屋の牀几に休み「さればサ俺も何角様子は知ねどお仲がこゝの天神に願懸があるといふゆる牛にひかれてのろひ奴サ「さいナ私も日頃から信心した天神様久しひ願ひで今日の參詣船から上つて道も遙々オ、新どやト取出す鏡袋の厚板も金氣の多いを見そけの團九「梅は一生立ねども天神様へ連て來たは御蔭で嬉しい返事が聞たさ張も意氣地も程があるといふを仲居が引取つて「引手数多の團九さんほんに當座の花ならば後でけつく思ひの種と案事過しは女子の常ネお仲さん大方おまへもその心でござんせうと取り繕ふその折柄「ア、これどうぞ清七に逢たひものじやト呟きながら來蒐る男がそれと見て「これは〳〵團九様相替らず御全盛お羨ましう御座りますと挨拶すればじろりと見やり「オ、貸物屋の磯六天神へ參詣か「イヤ私が參たは信心ばかりの事ではなくチトお仲様には差合ながらあの小浪屋の清七の跡の月の晦日

までと屹度對談致した金耳を揃へて三十兩今までなしもつづてもなく内へ行けばいつでもなすなり所が此天神の縁日には屹度參詣致すとの噂ゆる今日は是非とも清七に出會せ受取ふと存じまして「そんならなんといふあの清七が此所へ「夕暮には參ります「フウ聞へたお仲が今日この天神へ願懸があるといつたもあの清七に「エ、と驚くお仲が顔尻目に見遣りて團九郎「井筒屋で飲掛う磯六其方にも用がある皆も來やれと連引れて本社の方へ歩み行く〇跡に娘が獨言「あの様な美しい慣染のある清七さん縦令私がどの様に思ふても及ばぬことエ、儘ならぬ浮世じやと思案途法に暮れ近く一僕連れし武士が何か心に左思右考屈訖顔に歩み來る後より息急ぎ小浪屋清七助松といふ小僧引連れ「モシモシそれへお出なされますは小越木の御家中大倉佐賀右衛門様ではござりませぬかトいふに武士立ち止り「そふいふは小浪屋清七ハテ善い所で逢ひましたチト折入つて頼度仔細もあり幸ひあの茶店ト頼て牀几に腰打掛け家來に向ひ「コリヤ可内大切の密事なれば四面へ心を附やれと小聲になりてイヤなに清七お主人小越木左衛門公の息女調姫兼て大友判官の子息小太郎殿と結號ありし所此節専ら輿入を急がる、一體大友小越木は御先祖より御中が不和なるゆゑ兩家和睦の爲とあつて是れ將軍の嚴命なれば私の事にあらず茲に難儀なるは主君の姫君十二歳の時より家出し給ひ御行方曾て知れず白地にいふときは御家の恥辱とあつてより〳〵行方を尋ね給ふその時携へて出で給ふ守太刀は無名の正宗長さは七寸銅より三寸上に毀はあり鞘は黒塗金粉にて三本傘の紋散し何卒其方を盡し御行方を尋ね出さば此の佐賀右衛門は推舉して再び舊の武士に回復る小浪屋清七其方が性根を見

込んで頼むト眞實見えて物語れば清七は頭を下げ「思ひ掛ない御家の大事以前私の親共は尊君様の御朋輩或時殿の御金藏へ盜賊が忍び入り數多の金子を奪ひ取る其夜の番は即ち親共それゆゑの御暇其の事を苦に惱んで病死なせしも早や昔しそれより私は小浪屋の養子となれど何卒一ツの功を立て父の家名を興し度と片時忘るゝ間は御座りませぬ御氣遣ひなされますな御姫様の御行方は此の清七が命に替へ屹度尋ね出しますトいふに大倉打點頭うたて「それは過分まさかの時の入用金と小判兩取出し清七が手に渡しイヤ序でながらも其方は大磯の藝子お仲とやらいふ女に深く慣染碌々内へ戻らぬとの噂若い身にはあることなれど邸の間えも宜しからず獨身では身が持ぬ早く内方を呼迎へ勤直うなられよト眞味の意見に面目なく「成程左様のことも御座りましたが今ではふつ／＼思ひ斷り近々妻を呼びます相談「それは重疊シテそれは何方からと當座通れの間似合口眞顔に受られ行詰り「ハイとはいへど手をモヂモヂ「恥しさうにお梅は差寄り「ハイ清七様の女房は私で御座ります思ひに思つた清七様へ嫁入する様なつたも天神様の御蔭今日一日此茶店に出で居たも天神様に仕ゆる心といふ顔つく／＼佐賀右衛門は打守り「いかさま左様いへばつまはづれの尋常さ賤しからざる顔容丁度似合の良い夫婦それで身共も安堵致したなにかといふ間にモウ暮れ六ツそんなら清七「佐賀右衛門様「ヨフ御出なさんした「可内來やれと默禮なし原來し道に立返る清七は不審顔「竟に近附でもない茶店の娘子貴女が味にいうてくれたばかりであの正直な佐賀右衛門様御歸り成れ忝い忝い「アイ此御禮は屹度受ねばならぬわいな「オ、何なりと望んでみや「サア此御禮には「夫婦になつて下

さんせト駢りいうても娘氣の顔は上氣の恥紅葉助松は遠慮もなく「モシ旦那さんお前の女房になりたいと日外文いつぢぶんを頼まれたお梅さんとは此嬢さんその文お前讀んしたを豈夫や忘れはさんすまい自分も其時貰うて喰た天麩良の其美味さ今によう覺えて居るトいふに清七「そんなら日外助松に文をよこしたお梅とは「アイ恥かしながら私でござんす「フウ團九郎がゑりにつき性根の腐たお仲へ面當此方も丁度渡りに舟「モシ其面當といはしやんすは「イヤ難儀つひひも憂も戀の習ひあの玉章が眞實なら「夫婦になつて下さんすか「此世は愚か未來まで「いえ／＼そりやお前のがみんな謹清七お仲と浮名の立深いお方がありながら野面に育つ藪の梅色も香もない私をなんの女房に持しやんシャウ「ハテ疑ひ深い十呂盤取らぬ法もあれ夫婦になるに違ひない「そんなら私が心休め起請を書いて下さんせ「イヤもう易いことなれどこゝには紙も筆もなしはてあるわいなト起上り牀間とこのまに飾りたる盆畫をお梅が持來り「天神様へ奉納の梅の盆畫私が名に所縁もあり神の物なりや牛王も同前此所へ變るまいと起請を書いて下さんせと望むに否と言れもせず響取ひびきてさら／＼と砂に書たる起請の文言「讀でみやれと差出す清七、お梅は嬉しく推戴き守袋を取出し砂を包んで納むれば助松は吹矢筒一寸此場のさゝやき竹「モシ／＼お梅さん此茶屋で濡掛ると却て人が目を着る思ひも附かぬ吹矢の店私がいつて借りて置たサア／＼お出と恥かしがるお梅が手を取り無理やりに「なんの燈りは入らぬもの氣のきかぬ雪洞だと又取出す吹矢筒蠟燭ふつと吹消せば「これは闇いと清七が探り寄てお梅さん「清七さん必ず變て下さんすなト寄添ふお梅の振袖があたつて撒ちる、吹矢の的ぐわつたりいうて兩人が間にぬ

つと盤若の人形吃驚飛退く清七お梅」チョン（此道具ぶんまはす）

## 七 『邯鄲諸國物語』の内容

以上のほかに種彦の合巻物として注意すべきは「邯鄲諸國物語」である。それは天保五年、五十二歳の時、初篇を出し、天保十二年、七、八篇を出した。彼れの技巧が圓熟した時代の作品で、出来榮えも大體に於て宜かつた。諸國物語は、『宗祇諸國物語』を始め西鶴にもあれば、其積にもあつた。建部綾足の『漫遊記』も、この部類に屬する。種彦のは、外題に於て西鶴に似てゐるが、内容は異り、また一ヶ國について一つの説話を收めた點は、其積のに似てゐるが、その他はちがふ。本篇を綴るについて、種彦が最も負ふところが多いのは淨瑠璃本などの上にあつた。この點は又支那趣味の馬琴などと異る。

種彦が若しもつと長生したら、『田舎源氏』の續りを附けると共に、諸國物語を延長して他の國々に及んだかも知れなかつた。現存するのは、近江、出羽、大和、播磨などの巻で、それぞれ一つに纏り、獨立してゐながら、ほのかに互に一縷の筋を引いてゐる。

最初に出た『近江の巻』は、六樹園の『近江縣物語』に似たところがある。二人の双思の男女、盜賊の出沒する具合など、六樹園のものから暗示を得たのでなからうか。内容は近江鏡の宿の旅舎に於ける一人娘、おなかと同國八幡の竹花屋の一人息子鯉七との戀を描き、それへ藥王太郎、同次郎らの盜賊をからませたの

である。『出羽の巻』は『近江之巻』に附載せられた一小篇で、別に取立てて云ふべきこともない。

それから大和、播磨の二巻になると、大近松の影響が著しい。趣向に於ても、文辭に於ても、彼れは近松に私淑するところがあつた。この點、馬琴が唐山の小説によるのと大分、趣を異にしたので、構想上、馬琴よりも損をしたところがある。『大和の巻』は近松の『戀八卦柱曆』（原題、大經師昔曆）の一部及び『瀧口横笛娥歌加留多』の趣向を借りてゐる。また『播磨の巻』は、近松の『鎗の權三重帷子』の翻案である。

さて『大和の巻』の内容は、茂山鍾三郎とお笹との戀愛ロマンスで、鍾三郎は近江の箕作家に仕へた料理役だつたが、同藩の稻積家の養子となり、家付の娘おさみと夫婦になつて、仲睦しく暮した。その中、二人の間に京之助といふ男子を設け、家庭は一段、賑かになつた。ところが、その後、おさみが病歿したので、ひどく落膽し、強賊藥王次郎（『近江の巻』に出づ）を征伐する擧があつた時、真先に一行へ加はらうとしたが、許されぬ。彼れは失望して、京之助を姉の手許へ預け、亡妻の遺骨を高野山に納めるため、主家から暇を取つた。かくて高野へ赴く途中、亡夫の遺骨を納めにゆくお笹といふ女に逢ひ、その困窮を救つたのが縁で、戀に落ち、互に後悔はしたが、到頭、夫婦になつた。それから鍾三郎は大和の國司花木家に仕へたが、相役と争つて毒殺され、一家忽ち零落する。折柄、成長した京之助が亡交の讐を討ち取り、近江の箕作家に再び仕へたといふのが一篇の大要である。それに於て、鍾三郎、お笹の關係を描いたところに、幾分の新味があるけれども、結末は餘りに平凡だつた。

次に『播磨の巻』は、『大和の巻』とほのかに一縷の絲を引き、鍾三郎と後妻との間に出来た一子が、權三といふことになつてゐる。が、他に別段の關係はない。本篇では、近松の原作で、餘り描かれてをらぬ淺香逸之進（淺香市之進）が主人として、前半では可なり詳しく描かれてゐる。また逸之進の妻おさるは、原作で伶俐な女となつてゐるが、種彦のはいくらか低能な女とし、娘お菊も原作では十二三歳のを、本篇では十六七歳とした。それに原作では、おさるが逸之進に討取られるが、これは我から自及して申譯をする上に權三は原作のその如き悲しい最期を見せないで、淺香の娘、お雪と夫婦になり、局面が圓滿に收拾される。右の如く、趣向を變へたところに種彦の働きがあるのだが、原作が優れてゐる丈に、今、一息の感なきを得ない。尙ほ彼の作のあとを續けて、その高弟、笠亭仙果が『種彦諸國物語』として、『伊勢の巻』、『遠江の巻』などを出したが、格別、云ふに足るべき作でなかつた。

その他、種彦の作品中、注目すべきものは、『誂染逢山鹿子』（天保二年）、『淺間嶽面影草紙』（文化六年）、『浮世形六枚屏風』（文政四年）などである。『六枚屏風』は奥人アウグスト・フイツツマイエルに蘭譯せられた。江戸化政時代の小説で、外國人の手に譯せられたのは、これが最初である。

要するに、種彦は京傳の弟、京山とひとしく、小説家としてよりも、學者として起てば、より多く成功したかも知れぬ。彼れの隨筆『還魂紙料』、『用拾箱』、『足薪翁百話』などは、相當、學的考證などの方面から見て馬琴の隨筆などよりも、優れてゐるからだ。が、彼れは、かうした方面に力を入れないで、小説方面に主力を

注いだ結果、京傳、馬琴、一九、三馬、春水などと比較して、以上の四人は勿論、春水にさへも聊か護るところがあるやうに思はれる。その輪廓が小さく、想像力が乏しく、小器用で、説話の構成を能くしたといふに留り、怪奇荒唐が烈しくない代りに、又これといふ深いうまい味が少かつた。が、合巻物に新機抽を出して、そこに一期を劃した彼れの業績は相當尊重しなければならぬ。この點に於て、『田舎源氏』の生命は長い。

その他、種員の『白縫譚』（嘉永二年—明治十六年）、美圖垣真顔の『兒雷也豪傑譚』（天保十年—慶應二年）岳亭定岡の『神稻水滸傳』（文政十一年—明治十四年）などの傳奇小説などもあるが、それらは、明治時代に足を踏みかけてゐるし、特に傑出した作品でないから、茲には觸れぬこととした。



## 第六章 江戸情調に彩られた戀愛文學(人情本)

## 一 人情本の特質

江戸文化は爛熟期から頽廢期に移つた頃、エロチックの色彩、抒情的な模様を一つにして興つた民衆文學があつた。それが即ち人情本で、今日いふところの戀愛文學と略ほ趣を同じうする。人情本の名稱は何處から起つたか、その名稱が喧傳したのは爲永春水あたりからであらうと思はれるが、頗る漠然たる意味で、小説である以上、その何れもが人情を主とするのであるから、いかにも變な名稱である。が、一方、非人情主義に近かつた讀本の類がある以上、それらと區別するために、何等かの名稱が必要だつたとすれば、人情本の名を設けるのも、おのづから避け難い事であつた。平たくいへば、それは今日の戀愛文學に他ならぬ。人情本は洒落本に淵源してゐるが、既に述べた如く、田螺金魚、梅暮里谷峨などの作は早く人情本的傾向を帯びたのであるから、洒落本の延長とも見られる。唯その異るところは、人情本に於て、可笑味を主とせず、また材料を花街にのみ限定せず、その形式に於ても、長篇を主とした邊にある。結構、脚色に相當、意を用る、表面、教訓を標榜したところは、いくから讀本に似てゐるとも見られる。この種の文學に先驅した作

者は、京傳門下の鼻山人(東里山人)であり、これを略ほ仕上げたのは爲永春水である。

文學上に於ける人情本の價值は寧ろ低い。が、江戸頽廢期の市民生活を窺ふには、どうしても、これを除外することが出来ぬ。それに京傳、馬琴の讀本が、現代人に取つて、ひどく退屈に感ぜられる點が往々あるのにくらべると、輕快な心持で樂に讀める丈でも今日の文學たる意義が存する。またそれは洒落本と共に、明治文學に相當の影響を與へてゐる點からして、閑却すべきではない。

洒落本、滑稽本、黄表紙などによつても、化政度の江戸市民生活が相當わかるが、頽廢期の半面を窺ふには人情本が殊に役立つのである。式亭三馬が滑稽本に於て、度々江戸市民と京阪市民との對立を描いたことは既に指摘して置いたが、當時は尙ほ上方文化と互角の勢を持つといふ考へが江戸市民を支配してゐた。ところが、春水が『梅ごよみ』を書いた天保頃になると、江戸人は、その文化の優越を誇り、最早、上方文化を凌駕したと信じてゐた。彼等は江戸文化を最高のものと信じ、江戸趣味を最優勝の地位にあると考へ、事毎に、江戸讚美をしなければやまぬ状態に立ち至つてゐた。

江戸文化が行きつくところ迄行きつくして、絶頂に起ち、それが下り坂に向つたのが頽廢期(天保前後)だつた。云ひかへると、江戸文化は、もう完成されてゐた。そこにプライドを感じるのは至當であるが、新しい文化を更に生産してゆくべき母胎がまだ出来ぬ。それ故、頽廢期の眞只中に起つた時分の藝術は勢ひ氣象が萎靡して、鬱勃たる生氣を缺くのは、素より止むを得ない。

人情本を通じて、江戸市民の理想とする生活を見ると、富裕で閑暇があつて、享樂に日を送るといふ如き上に存してゐた。勿論、それは江戸末期に限られたことでなく、いつの世でも、左様した希望が誰にもあるけれども、人情本の大半が、男主人公として富裕な樂隱居、若隱居を選び、彼等を謳歌してゐるのを見ると、實生活上に於ける江戸市民の理想、希望が、その邊にあつたらうと見るのは不當でない。彼等は當時に於ける高等教育——文學、遊藝、茶道、花道などの類に通じ、最もレファインされたタイプであつた。『柳の横櫛』のうちに「萬事内端に如才なく、讀書、算盤、竹絲の道さへ嗜み……亦好めるは彼風流の道にして、芭蕉、其角のあとを慕ひ」云々と主人公のことを書いてゐるので、それとわかる。

次に女主人公は、どんなタイプを備へた婦女であつたか。これには二種あつて、富裕な家に生れたもの、餘義ない事情のために身を落して、遊女、歌妓、女義太夫、茶屋女などになつてゐるものが、それである。大體に於て、人情本の女主人公は、後者に多い。素人の身から歌妓などになり、社交界の洗禮を受けて、意氣でもあり、氣質もよく、情に厚いと云つたやうな婦女こそ、人情本の理想とするところであつた。爲永春水の『春色梅ごよみ』(天保三年)などには、左様した女性を主として描いた。概して下町情調のものが多く、江戸女としてのプライドをその優しい胸に抱いてゐたのである。

彼等は皆美美女であつたが、本質的にすぐれてゐるといへなかつた。殊に男主人公は、『梅ごよみ』の丹次郎のやうに女性的で、無氣力で、優柔不斷に近い人物が往々ある。丹次郎といへば、色男の代名詞とせられた時代があつたが、彼れは顔が美しく、言動が優しい丈で、女性の庇護によつて、生活を維持してゆくと云つた弱々しい性格の所有者たるに過ぎぬ。彼等は生活戦において逸早く人生の敗北者たるべき傾向を有した。時には、丹次郎にくらべて、もう少し實力があり、物のわがりの早い人物も見えぬではないけれども、概して、性格上缺陷があり、人生の經驗に乏しい若旦那階級が主位を占めてゐた。

それにくらべると、女主人公は、性格上、多少、立優つてゐた。かの女らは概ね理性的には發達してをらぬけれども、情に厚く、自分がかうと思ひ込んだ男性に向つては始終思ひやりがあつて忠實だつた。中には溫和で伶俐なもの、意氣と張とがあつて凛として寒紅梅の如き風姿を備へたものも見出される。が、精神的教養に乏しく、眞の貞操觀念に目ざめてゐないものが寧ろ多きを占めてゐた。

それから男主人公の間には、一夫一婦の觀念を正しく保つものが少く、概ね一夫多妻主義に立脚してゐた。人情本を見ると、大體、一人の男主人公を取巻く數人の女性があつて、そのため三角關係、四角關係を生じ、烈しい戀愛合戦が女性の間に繰返される。左様した事に依て、戀の行進曲が破綻に終るかといふと、多くの場合、圓滿に局を結び、一人の女性が第一夫人となり、他の女性が第二夫人、第三夫人、或は第四夫人となつて、互に譲り合ひ、一緒に暮すのである。『梅ごよみ』の如きも以上の如き過程と結末とを示してゐる。かうした現象は、やはり、江戸頽廢期の習俗をおのづから反映してゐるのであつて、男女共に性的道德に目ざめず、眞の戀愛的意義に徹底してをらぬ。それはやがて性的道德の頽廢を意味し、眞の戀愛、眞の愛

情を自覺しないで、戀愛そのものも亦頽廢色を帯びてゐたことを示すのである。

いづれかと云へば、當時の女性は、皆あきらめ主義に起つてゐた。「女は弱いもの、運命に服従するもの」と始めから定めてかかつてゐた。男子に向つて反抗するとか、男子を征服するとかいふことは、當時の女性の夢想だもせぬところで、何れかといふと、「男子は一體に浮氣で、一人の女性を守つてはをらぬ。」と考へてゐた。「梅曆」の米八は丹次郎が浮氣するについて、彼の女一流の解釋を下し、「男といふものは、どんなに此方が氣をもんでも長い月日の中には、是非一人か二人、情人をこしらへずに居ないよ。」と述懐した。

事實、一夫多妻主義を性道德の旨と背馳せぬと信じてゐたらしい當時の男性は、浮氣することを一種の特權であるかの如く思つてゐたのである。それ故、女の方が如何に氣を揉み、心を配らうとも、男子側は、それに満足してゐなかつた。それが一因となつて、戀愛合戦が始まる。若し戀愛争闘の上に於て妥協を許されないとすると、必ず失戀に泣く女を生ぜざるを得ぬ。茲に於て、當時の女性は勢ひあきらめ主義を一つの宗教としなくてはならなかつた。春水の『英對暖語』(天保八年)に於けるお増、お柳の二女性は共に宗次郎に戀したが、若し彼女らの間に妥協が成らぬとすると、何れかが戀の敗北者とならねばならなかつた。それ故、かの女らは「お互に和合して、野暮を云はないやうに……」といふ約束をしたのである。

勿論、かうした妥協に辿りつく迄、米八と仇吉とのやうに、烈しい血みどろにひとしい戀愛争闘を経過する場合は、決して少くはなかつた。女性の本來、欲求するところは、自分のみが、一人の男子の愛を獨占する

ことである。他の女が自分の眞實、愛する男に一指だも觸れないやうに念するのであるが、一夫多妻主義が無言の間に肯定せられてゐた當時にあつては、左様した欲求を満足せしむる機會と事情とに乏しく、それが歌妓、遊女の場合には、尙更のことであつた。その結果、勢ひあきらめ主義が擡頭するのである。

それらの日に於て、女性が愛人として選んだ人物は、人情本に於けるが如き主人公であつたかどうか。春水の作品が最も多く女性間に愛讀されたのを思ふと、人情本に於ける主人公に見るやうな教養あり趣味あり、風采又すぐれた人物を好ましく思つたにちがひない。それに主人公の多くは富裕で、生活上の心配がなかつた。中に零落したものはあつても、多くの場合、それが放蕩ゆるの勘當から來てゐることで、眞の貧乏人ではない。それに零落しても、氣位あり話もわかるといふ點が、女性を失望せしめなかつたのであらう。勿論、前に述べたやうに、性格的にすぐれない點もあるので、その無氣力、優柔までも、これを實際上で好ましいものに思つたかどうか。嘉永元年に出た『臘月花の葉』(一筆菴主人)のうちに、「私どもが年のいかない時分は、此人がよいと思ふと、たとへ、どうであらうとも、それを立通す氣で熱く成つて騒いだ。」と或女性がいつてゐるのを見ると、この點ばかりは、性格、才能のみの問題でないと思はれる。好く好かぬは、一面、感情によるところが少くないのである。

以上、人情本の作者によつて描かれた典型的な若き男女が、その儘、天保頃の男女だとは素より思はれぬ點がある。けれども烟のない所に、火の手があらぬとすれば、その頃に於ける男女の戀愛に眞劍味が缺け、

情熱が乏しくなつてゐたことは蔽はれぬ。そこに江戸文化頽廢期の姿が見える。

## 二 人情本の時代と春水

かく江戸頽廢期のアトマスフィアから生れた人情本は、藝術的價値に於て、黄表紙、洒落本の下位にある。少くとも一段落ちる。第一にそれは作者の素養、實力も關係し、第二にその相手とする讀者とも關係するところがあつた。黄表紙、洒落本と人情本とはその性質、内容を異にするから、一概にその優劣を判することには困難であるが、事實、黄表紙、洒落本の作者は、學問上の素養に於て、人情本の作者よりも、概して優れてゐた。それに彼等は江戸文化爛熟期の生活者で、未だ頽廢相を帯びた時代に入らない丈に、その彈力が尙ほ存した趣があつた。

それに黄表紙、洒落本はより多く男子を相手とし、相應に知識階級のうちにも、これを愛讀するものがあつたが、人情本は概ね當時の學問的素養乏しき婦女子を讀者とした爲め、勢ひ調子を下げねばならなかつたのみならず、人情本の代表作家といはるる春水さへも、文學上の見識が低くかつたので、藝術的醇味の減少することを免れなかつた。

かうした事情のもとに、人情本が製作せられたので、そこに理想もなく、道念もなく、人生的意義もなく、唯末期江戸文化の色彩をいくらか留めてゐる位にすぎぬのは、止むを得ぬ結果であらうと思ふ。勿論、そこ

には、低調ながら一縷の抒情味があり、エロチックの匂ひが漂うて、情痴の世界を展開しゆくところに、おのづから、讀者の興味をそそる魅力が多少あるけれども、概して千篇一律で、同一の趣向、同一の内容を人名、地名を變へて繰返すので、勢ひ又かと思はしめる點が多い。

が、人情本の出現は、一面、當時の讀書界の要求に應じたものと見なければならぬし、またそれらの日に於ける文學にいくらかの新味を加へるべき使命を持つたので、一概にそれを輕視し去るべきではない。蓋し人情本に先立つて新興し、洒落本に取つて代つた讀本は、小説中の最高位を占めるものとせられ、教養ある人々にも歓迎せられたが、多く史上のロマンスを綴り、當面の江戸生活については、没交渉に近かつた。のみならず、これは支那小説の翻案、模作が半ばを占め、日本人の思想、感情、趣味にびたりと一致し難いところさへあつた。その上、文體は『平家』、『太平記』などを氣取つて高尚めかし、抽象的道念によつて人物を操つた爲め、骨のみあつて血肉なき作品となつた氣味が見えた。かうした點について、婦女子たちは相當の不滿を抱き、男子側にも亦讀本に嫌らぬとするものがあつて、茲に人情本の新興を促したのである。

と云つて、私はそれがために、讀本の價値を低く評價しようとするのではない。唯勸懲の旗印のもとに道徳を説教する讀本のみでは、江戸の讀者も嫌らなかつたであらうと想察する。この機會に乗じたのは爲永春水で、彼れは血肉を洒落本に採り、表皮を讀本に採つて、茲に人情本の一派を開いた。彼れは茲に至る迄、文學上、いろいろの苦心を重ねたのであつた。茲に春水の經歷を振返つて見たい。

彼れの前半生は甚だ振はないのみならず、文學上、卑劣なことをした人として傳へられてゐる。その傳記も未だ正確なものもないが、寛政二年の出生で、純粹の江戸つ兒である。本名を佐々木貞高、通稱越後屋長次郎と云つた。一目眇してゐたため、また目長とも呼ばれた。長じて、本の仲買を營み、貸本屋、出版業をも兼務した。性來、文學が好きで、暇さへあれば、小説類を耽讀した。そんなことから、彼れの同業中では、物識りと云はれたので、自分にも小説の類は書けるであらうと考へ、茲に戯作者にならうとして先づ式亭三馬の門に入つた。

ところが、三馬の門下には、古今亭三鳥、徳亭三孝などの兄弟子がゐて、容易に手足を伸ばすことが出来ぬところから、去つて、振鷲亭のあとを繼ぎ、二世振鷲亭と稱して戯作の筆を採つたが、一向認められぬ。春水は失望して、更に奔走した結果、南仙笑楚滿人の遺族から承諾を求めて、二代目楚滿人と號したが、やはり、世を動かすことが出来なかつた。この間、爲永正輔と稱して、伊藤燕晋の弟子に加はり、高座に上つたが、これも亦失敗して了つた。

かうなると、春水は自暴自棄的になり、速かに文名を得ようとあせつて、當時、曲亭馬琴の舊作中、火災のため、版木が焼失してゐるのを至極廉價で版權を手に入れ、多少補綴を加へてから、自作の如くにして、新たに賣出した。それは『化競丑滿の鐘』、『當世物語』、『三國一夜物語』などで、この事は倨傲自尊の風ある馬琴の感情を少からず害ねた。それ故、馬琴は事毎に春水を罵り、且つ冷淡な態度を以て春水を見下した。事實、春水の如き卑劣な振舞があつては、何と云はれても仕方がないのである。

### 三 爲永春水の人物及び作品

かく焦慮に焦慮を重ねて、自ら面目、體面さへも傷けた彼れは、文政四年、三十二歳の時、兄の瀧亭鯉丈と合作した『明烏後正夢』を出すに及んで、漸く世に認められ出した。この二世楚滿人のペンネームを用いた時代の春水は、いろいろな事をしてゐる。即ち曾て有名である作品を再刻し、それへ後篇を付けて新版冊子の如くすることだ。文政十二年に出した『孝女二葉錦』の如きが、それである。本篇は谷峨の洒落本『傾城二筋道』(寛政十年)、同二篇『廓の癖』(同十一年)、第三篇『宵の程』(同十二年)の三書へ春水が後篇を附加したのである。春水はまた田螺金魚の『當世虎之巻』(安永七年)をも同様の方法で再刻し、そのあとへ後篇を創作して加へ、文政九年に出版したことがあつた。それらによると、春水が洒落本中に於ける人情味がかつた作に傾倒してゐたことがわかる。

かうした徑路を辿るうちにも、文政九年から同十一年にかけて出版した『婦女今川』は、彼れの前途の漸く多望ならんとすることを示した。茲には、もう春水の特徴が自然、鮮明になつて、彼れ特有の色彩を發揮し始めて來た。勿論、それは『梅ごよみ』ほど、整つてをらぬが、他の人情本作家にくらべると、結構、書き方などに、一歩を進めたところがあつた。殊に内氣なおしけといふ女性を描いてゐるところは、讀者の同情

を惹く力があつた。茲迄、春水が漕ぎ付けるのには、一通りならぬ努力をしたのであらう。そして『婦女今川』を書きあげた文政十一年に、彼れは楚滿人の號を返して、改めて春水と號するに至つた。それから二三年の後、彼れの『梅ごよみ』が出て、一躍、人情本に於ける代表作家となつたのである。

一體、春水には、代作、作りかへ、補綴的な作などがあつて、どの程度迄、それが彼れ自身の筆になつたか判明しないものがある。『春色辰巳園』(天保四年)には「以前、楚滿人と呼ばれし時は、多く門人に筆をとらして自作の草紙稀なれば、巧拙ともに本意にあらず、梅曆より以來は、實に予が手に綴りしもの」云々と述べてゐるが、この言を信じてよいかどうか。一體、楚滿人と號した時代の彼れは、『婦女今川』を書く頃に及んで、やつと一家を爲したとも云ふべきであるから、彼れのもとに、相應の門人がゐるとは思へぬ。かの補綴の作の如きは、剽竊といはれても仕方がないほどであるから、代作といふことさへも、聊か可笑しい。それに『梅ごよみ』以後は、皆彼れの筆だといひ乍ら、天保九年に出した『梅の春』及び『祝井風呂時雨傘』の一部は何れも門人の助筆を得てゐると解すべき事實がある。かうなると、どの點が春水の筆で、どの部分が門人の筆であるか、一寸わかり難い。が、『梅ごよみ』以後の作品は八分通り、春水の筆に成るものと假定して置くことは必ずしも不當でないであらう。

人情本は、春水に取つて、文學上、一番、適合したものであつた。彼れには遊蕩の經驗もあり、歌妓、帯間、女遊藝者などとも交際して、情痴の世界を知つてゐたことが、人情本を作る上に役立つた。春水の若い頃は深川木場の通人、初代津國屋藤次郎(津藤と云ひ、龍池と號す)と交際し、その取巻の一人として、深川、吉原などに遊んだ。森鷗外氏は曾てこの事に言及し、「春水の人情本には、デウス・マキナアとして、所々に津藤さんといふ人物が出る。情痴で金持で、相愛する二人を困厄の中から救ひ出す」と云つて『梅ごよみ』の千葉——千葉の藤兵衛は即ちその人だと指摘した。かうした關係で、春水が情痴の世界を知つたのは、津藤に負ふところが多い。それに彼れの性質は女性的で多感多恨と云つたやうなところがあつて、男女の口説、戀の葛藤といふやうな方面に特殊の興味を感じたらしく、且つ深川の情趣を深く愛してゐた。左様した點が、おのづから彼れを人情本の作者たらしめたとも云へるであらう。

一體、春水は化政期を中心とした有力な小説家にくらべると、一番、學力に乏しかつた。一九の程度にすら達せず、雜學で一寸氣の利いた風を見せる三馬には、尙更及ばなかつた。それ故、彼れは「自分が小説を書くのは、生活の助けにするため、これを士君子に示さうとは思はぬ。その假名ちがひ、筋の通らぬところは、大目にゆるして戴きたい。」と云つた。さう云ひながらも、流石に多少の物識り振を示したいとも考へ、『松月露談、玉川日記』に『剪燈新話』の「金鳳釵記」を翻案し、『遊仙奇遇、錦之里』で『遊仙窟』の作意を借つた。が、支那文學の知識が殆どなかつた彼れのことであるから、左様した行き方をするのは、却て彼れの短所を曝露するやうなものであつた。

更に春水は兩面摺一枚物の『外題鑑』(文溪堂舊版)を増修して、『増補稗史外題鑑』を公にしたが、素よ

り彼れの柄にない爲め、馬琴などから嘲笑を浴びせられた。これ又無學を隠したい爲めからしたのであつたらうが、却て一層、彼れの學力の乏しいことを裏書したやうな結果になつた。

が、能く考へると、この無學こそ、却て彼れを人情本作家たるに適合せしめたとも云へる。當時の讀本作家は、何れも國語、漢文などの専門學者に向つて、素養上、決して劣らぬといふことを示すために、餘りにペダンチックになり過ぎた。馬琴は勿論のこと、京傳、京山、種彦らにも、左様した傾向があつた。ところが學者的だと思はれた馬琴の學力が、存外、稀薄であることは、今日、學者間によく知られてゐること、馬琴が好んで振廻はす『水滸傳』も、どの程度迄、原作を味解する力があつたか、頗る疑問となつてゐる。

馬琴は『女同放言』に一寸、『水滸』のことを書き、又自ら原作によつて十回迄譯し、支那の俗語に和訓迄付けて『新篇水滸畫傳』として出してゐるが、十一回以後は譯述しなかつた。ところが、十回迄なら、岡島冠山が原作に訓點した和本もあり、鳥山石丈、陶山尙善の『水滸傳解』(三十六回迄)もあるもので、どうにか支那俗語の知識がなくても譯せたのである。馬琴の種本は、これに依つたもので、十一回以下を譯しなかつたのは、博學めかす彼れも流石に難解に當惑した爲めであらうと思ふ。それから馬琴の隨筆の如きも、事實、京傳、種彦、京山らに及ばぬところがあつて、學問上、大した參考にならぬのを見ると、學問第一を標榜した馬琴の物識り振が却て彼れに禍したともいへる。

京山の如きは學者となつてをれば、小説家としてよりも遙かに成功し、兄の京傳に對抗することが出來た

にちがひなかつた。その『歴世女裝考』、『高尾考』、『煙草考』などは、立派な隨筆で、研究上、學界を裨益したが、小説に至つては、京傳よりもすつと下位にあると云つた情態である。つまり、學問が出來た爲め、少くとも、學者肌の人であつた爲め、小説に成功しなかつた。

かうなると、爲永春水の無學は却て彼れに幸ひしたと云へる。小説は必ずしも學者でなくては書けぬと定つてゐない。否、餘り學者的な人は小説が書けぬ。雜學程度で結構だと云つて差支へはない。三馬、一九が雜學程度で、耳學問を本位とした爲めに、書齋的氣臭に囚はれず、全く支那趣味、支那稗史の空氣から解放せられた純日本の色彩ある滑稽本が書けたのである。

春水とても、矢張左様で、學問がない爲め、支那小説などの影響を餘り受けず、考證、穿鑿に暇をつぶす必要もなく、直接、彼れが得た當面の現實觀察から材料を採つたので、たとひ、その趣味が低くとも、兒女に媚びるやうなところがあつても、馬琴、種彦らの思ひ及ばぬ世界に彼れ一流の開展を爲すことが出來た。當時の江戸人は、そこに彼等と同じやうに呼吸し、同じやうに生活する男女の姿を始めて見出したのである。

#### 四 人情本に先驅した東里山人

人情本には、種々の缺點もあるが、二三の長所もある。その長所とは(一)幼稚ながらも寫實主義に立脚して結構布置に意を用ゐたこと、(二)男性に對する女性の戀を眞面目に同情ある筆で描き、合せて人生の

些事を取扱ふのを主としたこと、(三) 眼前に於ける江戸の現實を部分的に示したことなどである。初歩的寫實主義は、必ずしも、人情本一派の獨創したところではなかつた。洒落本、黄表紙からも來てゐた。殊に人情本に先驅した鼻山人(東里山人)の作品は、春水に教へるところが多かつた。谷峨、金魚の二家にくらべて、更に人情本に貢獻するところがあつた。彼れの洒落本『籬の花』及びその續篇『廓宇久爲壽』は、もう人情本そつくりである。時に書出しに「天地開くるの始め、清めるものは鬩びいて、てんつる天となり、濁れるものは沈りて、ちんちり地となる。」といふやうな洒落を加へたりしてゐるが、何れかといふと、左様した洒落は彼れが力を入れたところではなく、眞面目に梅川、忠兵衛の戀を描寫することに全心を傾けた氣味があつた。

彼れは後に人情本を書いたとき、概ね東里山人のペンネームでこれを公にしたが、その數三十餘種に上つてゐる。前記『籬の花』、『廓宇久爲壽』は叙述のうちへ時々、「作者曰」と云つた調子で、讀者に呼びかけ、「舞鶴(遊女)座を立つ前後の光景、種々の興増、數多ありといへども、混亂しければ、これを略言」と、時々書いてゐる。また遊女梅川が物思ひに沈んでゐる折、素見客のそそり節を挿み、「むさし野の原に夜晝あのみぎりぎりす、思ひ切れきれ切れと鳴く。」といふ歌で、情趣を添へてゐる。それに梅川の眞實こめた手紙の文句や、その巻紙の形迄も挿入してゐるなど、春水らに人情本の型を教へたものと云つて差支へあるまい。それが文化十四年から文政のはじめにかけて出てゐるのを見ると、鼻山人(東里山人)の功はこれを公平に認めたい。

勿論、それ丈に洒落本としての要素が殆ど影をかくして、洒落味に乏しくなつてゐるが、初歩寫實主義と布置、結構に注意してゐる苦心のあとは確かに見える。前者は既に京傳によつて開かれ、三馬によつて進展してゐるが、布置、結構については、鼻山人の工夫、精勵に對してより多く團扇をあげねばならぬ。彼れは梅川、忠兵衛の戀の波瀾、その間に遊女舞鶴及び戀敵八右衛門などを加へ、忠兵衛の短氣から、梅川との戀が破綻に瀕したのを、暫間萬里の心づかひで、再び仲睦じくなるといふ筋にしてゐる。大體、筋は通つてゐるが、忠兵衛の心の推移を描くところは、餘りにあつ氣なく、皮相に墮し過ぎてゐるのが何と云つても、大きい缺點だつた。が、左様した内面描寫は、人情本一般に見出されないから、鼻山人のみを咎めるわけにゆかぬ。一體、鼻山人は最初、黄表紙、合巻物を主として書き、文政年間に入つて、漸次、洒落本を書いたが、實質上からすると、それは人情本といふべき種類に屬したのが多い。この點は、在來、餘り區別せられてゐないやうだが、實質上、鼻山人のものは、人情本に收めて然るべきであらうと考へらるる作が主位を占めてゐる。今、その手に成る人情本を挙げると左の如くである。

- 鷄卵角談『晦日の月』 二冊 文政元年
- 廓中餘情『由佳里の月』 二冊 文政元年
- 生死流轉『玉散袖』 三冊 文政四年



- 廓 かゞみ 六冊 文政五年
- 仇 競 戀 浮 橋 三冊 文政六年
- 契 情 意 味 張 月 六冊 文政六年
- 傾城此絳蘭 蝶 記 十二冊(初篇より四篇迄) 文政七年
- 風 俗 粹 好 傳 六冊 文政八年
- 契 情 肝 粒 志 十四冊 文政八年
- 永明間記『廓 雜 談』 文政九年
- 三曲廓日記朝霧全傳 文政九年
- 花 街 壽 々 女 文政九年
- 婦人孝經『江戸花誌』 文政九年
- 傾城 胸 中 極 祕 傳 文政十年
- 松籟美談『紫 草 子』 三冊 文政十年
- 珍 說 豹 之 卷 六冊 文政十年
- 廓雜談餘興『北 里 通』 六冊 文政十年
- 人情奇縁『言 葉 花』 (『玉散袖』後篇) 文政十一年

その他、天保年間のもの、刊行年月未詳のもの合せて十數篇ある。兎に角、人情本の作家として、地盤を開拓した功はあるが、春水にくらべると、會話、地の文に於ても、結構、布置に於ても、尙ほ一段、下位にあつた。それ故、春水が人情本元祖として、勢を得はじめると、鼻山人はその存在を脅かされて、結局、春水のために壓倒されて了つた。

### 五 人情本の進展

春水は鼻山人のあとから出て、谷峨、金魚の長所を探り、鼻山人の行き方をも參酌して彼れ一流の戀愛文學を編み出した。その寫實は、會話の上で、鼻山人よりも一步を進め、結構の上にも、少し行詰ると、夢の場などを用ゐて、いくらか變化を加へなどした。それから男女の風俗を記述することも寧ろわづらはしいほどに精細を極め、流行衣裳に注意することを怠らなかつた。彼れ以前の洒落本、滑稽本は茲迄、到達してゐない。若し京傳が人情本を書くなら、春水を凌駕するは勿論、必ず藝術的良心を十分に發揮したであらうが、春水はそこ迄ゆかない。けれども以上の如く、たとひ、皮相寫實にもせよ、在來より一步を進めたところがあつた。人情本の長所の一つは、そこに存する。それ丈技巧が進んだのである。

次に洒落本(初期から中期にかけて、まだ人情本化せぬ頃)、は概ね男子側が、如何にして相手の女性を我物にしようかとする方面を主に描いたが、人情本は、その逆を行き、女性がその思ふ男に對して、如何に誠

實を盡すべきかといふ點に力を入れて、縦横に描寫した。左様した傾向は鼻山人の作にも、少し芽を吹出してはるたが、これを擴大したのは春水である。勿論、それは比較上の話で、男性側が相手の女性に真心を盡す場合がないではなかつた。松亭金水の『閑情末摘花』(天保十年)の男主人公米次郎のお里に對する場合、春水の『英對暖語』(天保八年)に於ける宗次郎が娘お柳に對する場合の如きは、男性の誠實を示してゐた。

それに女性とても、春水一流の筆法の如く、男性にのみ柔順だとは限らなかつた。三亭春馬の『春秋二季種』(刊行年月未詳)に於けるお花は情人半七があるに關らず、他の男とも契り、曲山人(金水との合作)の『娘太平記操之早引』(天保八年—十二年)のお玉は多くの男と關係した上、妻を持つてゐる八百屋繁兵衛とも契つた。春水自身とても、時に例外を設けたと見え、その『玉川日記』(文政十年—十二年)のお絲が數人の男と握手したことを描いてゐるので、一概に人情本の女性たちが、一人の男子を中心として實情を盡すとばかり定つてをらぬ。が、春水のもものは、概して女性側に誠實を盡すものが多く、そのため、いろいろに苦勞する。彼れの『梅ごよみ』は全部六十巻で終結したが、そこには、一人の男主人公を取巻く數人の女性があつて、かの女は、それぞれ男のために、あらん限りの真心を傾けた。即ち唐琴屋丹次郎を中心として、本妻のお長、藝妓米八、仇吉らがあり、福徳屋宗次郎を中心として、本妻お雪、藝妓お増、遊女柳川(元、娘お柳)があり、岑次郎を中心として、本妻お京、藝妓お衆、お房などがある。

左様した三角關係、四角關係が描き出されてゐるのは、一夫多妻主義が當時、暗黙裡に是認された爲めにもよるが、一つは作者春水が、筋を複雑にして、變化を加へ讀者を倦怠せしめないとの心づかひからも來てゐる。岑次郎と戀に落ちたお衆、お房は腹ちがひの姉妹で、お衆は姉だけにいろいろ義理のために苦勞する。一旦は、岑次郎の第二夫人となるが、本妻お京及び義妹お房に對する義理を重んじて、尼となるといふやうな筋に作られてゐる。戀と義理との葛藤が自然に波瀾屈折を生ずる。春水はかうして筋を複雑にして、讀者の心をいつ迄も捕へようとした。

これを本格の洒落本や人情本になつた末期洒落本にくらべると、筋の變化と複雑とが目立つ。のみならず、在來は一人の男主人公に對して、二人の女性があるといふ程度で、戀の進行も、その落着も早かつたが、春水に至つて、その進行が時間的に長く、その落着も迂餘、屈折のある後でなくては見られぬやうになつた。と同時に、總じて巻數が多くなり、不完全ながら、長篇小説の形式をも備へるやうになつた。茲に人情本の一特色があると云へよう。

## 六 人情本の背景と人物

今一つ、人情本の特徴とすべきは、現實の江戸を取入れてゐること及び人生の些事を主として取扱つた上などにある。三馬の『浮世風呂』、『浮世床』なども、江戸の一部を取入れてゐるが、場所としては、一小部分

に過ぎぬ。一九の『膝栗毛』も江戸の情景を寫してゐるが、陋巷の一部に留る。更に洒落本は遊里、花街に限定してゐるために、普通人が日常見る江戸の光景には概ね觸れてをらず、序に一寸記述する位に過ぎなかつた。

ところが、人情本に於ては、その背景として下町方面を採り入れ、下谷、日本橋、淺草及び吉原、深川などの花街區域を多く描いてゐる。それと共に向島、小梅、龜戸、中の郷なども可なりに採り入れた。當時地名はその儘用ゐることを許されてゐないところから、淺草觀音を鎌倉長谷の觀音とし、待乳山を眞乳山、花川戸を舟川戸、向島を迎島、深川を婦多川、新吉原を戀ヶ窪（鎌倉の遊里）深川仲町を鶴ヶ岡和歌町、同區櫓下を箭村下、淺草の今戸を稻戸、兩國廣小路を花水橋の廣小路などとしてゐる。大體、鎌倉の地名に附會するか、或は語呂の上で、いくらか地名を變へるかした。それは洒落本とても同様であつたが、人情本では、その範圍がずつと擴大してゐる。

中には、少しく解し難いものもある。藥研堀を夜猿堀、靈岸島を靈南島、富澤町（日本橋）を媚澤町、根岸（下谷）を繪岸、傳馬町（日本橋）を頓馬町とするが如きが、それである。新川を眞川としたのなども、音で讀むと一寸間違へやすい。

それら江戸の市中、市外の描寫は、會話などにくらべると、寧ろ拙劣に近かつた。けれども當時の實景を左程、誇張しないで傳へてゐるところに、江戸の佛を偲ぶぬではなかつた。例へば、『梅ごよみ』に向島の有

様を叙して、『寶福寺の巳の時の鐘ボウんく、瓦焼く烟霞と俱にうすく消え、今戸に河岸揚の材木の音聲、風の間に傳へて、遙に定使を呼ぶはらの貝の音アウく。』とある如きも、大體に於て、當時の様子がわかる。

更に『梅の春』（天保九年—十年）に深夜の深川を描いて、『夕されば汐風寒み、陸行の客の通ひ路はや絶えて、一の鳥居のかげ物すこく、折節聲のするものは茶飯豆腐の御膳籠、その賣聲と佃より和歌町歸る素見の鼻唄いと淋し。』とあるのも、現時賑かになつたモダン深川と餘程ちがふ色合を示してゐるが、蓋し實景である。

それから兩國廣小路の寫生が春馬の『春秋二季種』のうちにあるが、地名を鎌倉花水橋として置いて、『實に花やぎたる賑ひ……此方彼方に小夜作つたるうちには、力持の石の重氣なる、綱渡りの身の輕業なる、共に木戸札の數を競ふ。おでこ芝居の紋看板は、ならび床の印にひとしく、長い橋の袂には、短い前垂の茶屋女。人を泣かす浮瑠璃あれば亦笑はする噺家あり。四ツ目屋の佐々木の四郎は、矢場の娘の梶原に、當つてだけぬ鎧兜。看板に虚言なしは、おほつかなくも木戸番が、人呼ぶ鳥の猿芝居、蛇を遣ふ娘あれば、油を賣るいがらしあり。これは丹波の山奥で、百姓の娘といひたてする、六部が鉦鼓を打つ音は、かの常念佛と混じあふ。』と雜沓の様を詳しく記述してゐるのにも、當時の繁昌がわかる。

江戸のロオカル・カラアは、それらによつて察せられるが、更に藝妓の擡頭し來つた様子を描き、岡場所として低く見られてゐた深川が頼に繁昌を加へて、吉原を凌がうした有様を叙述してゐることも、江戸の現

實であつた。洒落本では、遊女が女王の如く中心となつて輝いてゐるが、人情本では、藝妓が寧ろ主役となつてゐる。前述した岑次郎に心を寄せてゐるお衆が戀ヶ窪（吉原）の藝妓となり、お房が婦多川（深川）の藝妓となるといふのを見ても、宗次郎と双思の間となつた遊女柳川が、後に婦多川の藝者となつたといふのに徴しても、その頃の藝妓が次第に地位を進め、大店の遊女らと對抗してゆくやうになつた形をおのづから示してゐた。

勿論、春水に描かれた深川の仇吉、米八などは、大分理想化せられて、實際に遠いにはちがひないが、この地には、往々、俠妓があつて、その張と意氣とを以て、客を呼んだといふ事實もあるから、仇吉、米八の二人は左様した歌妓の複合寫眞とも見られる。それ故、春水などの時代に於ける深川藝者の生活を知るには、一面人情本によるを便利なりとする。

紀山人の『仇競今様櫛』（天保元年—同四年）には、川崎の藝妓絲吉のことを描き、「爰は賑はふ川崎の里に數多の傾城や、歌妓も共にゆきかひの、客をとゞむるその中に、近頃もつばら高名なる、流行の藝者絲吉は容姿は絲櫻の、花のけはひに美しき聲にてうたふ流行うた。川崎音頭といふものを作り出せしかば、世に廣くひろまりて、都も鄙も唄ふほどに、これを傳へ聞く人は、見ぬ戀にあこがれ……」としてゐるが、東京から離れた地方にも、漸く藝妓の擡頭し來つた様子が思はれる。

勿論、在來の勢力を或程度迄支持してゐた遊女のこととも、時々、描かれてゐることは、『閑情未摘花』の清

鶴、『春告鳥』の薄雲、『花街壽々女』の菊の井、『梅美婦禰』の此絲などによつてもわかる。が、春水の人情本に於ては、遊女よりも藝者が多く、そこに明和、安永、天明頃の時代とおのづから世態が變つたことを示した。茲にも江戸の現實がある。

尙ほ江戸の年中行事とか、縁日とかいふやうなことも、人情本では、略ぼ見た儘を描いてゐるので、江戸情調の閃光を一瞥することが出来る。例へば、『梅美婦禰』に遊里の年中行事の一つ——甘露梅を作ることに及び、毎年五月中旬より廓中の茶屋一同に甘露梅を製こしらへて、正月の年玉に用ゆ。今年の夏製たるは翌々年の春の配りとす。その製法の日は見板けんばんの唄女うたいじよ手すきなるが懇意の茶屋へ手傳ひに寄集る事なり。されば廓の四季を述たる端唄に其由を作れり。」と述べて、歌を引き、次に「これぞ流行唄廓の夏の趣なり。さて或茶亭の軒をうかゞひ看れば、則ち梅卷の賑はしさ。アノチヨイト喜助どん、梅をお呉れなヨウと言ひながら仲之町の往來を看て居る風情もつとも婀娜なる藝者なり。」と記してゐる。

縁日の光景については、曲山人の『娘消息』（天保五年）のうちに具體的な様子を描き、「今日は五月の御縁日、常にまさりて賑はしく、手遊、燈籠、小道具屋、十三文の選取店、甘酒、麥湯、氷水、鯛の附焼、鮓、天麩羅、大道狭しと立ち並びて、互に競ふ商ひは皆御利益の餘澤にて、此處に算盤の早割をひろけて日用の御重寶此上なしとバチ／＼饒舌る男あれば、編笠を被つて流行唄をどうまん聲にうなる讀賣あり。或は損品ひんぱん速繼すみぞめの金漆賣る親爺あれば圖をうり、鼠を使ひて景物を出す二才野郎あり。小銅八錢の聲色にて往來の人足を止

めて恰も蟻の集るが如く、ガヤと賞め、チャと笑ふ。」とある具合、それらの時代に於ける縁日の様子を看取することが出来る。

その他、人情本に於て、日常の些事を詳しく描くといふことの上に一つの特色を示した。讀本の扱ふところは、概ね日常に於ける非常事で、多く目を聳たしめるやうなものばかりだ。英雄豪傑を中心とする以上、それも當然の事かと思はれるが、現實の江戸ではそんなことはない。平凡人の平凡生活が日常の出来事で、戀愛による煩悶、苦心、そこから来る口説、駈引と云ふやうなことが寧ろ目ざましい事件とも見られる時代であつた。

或家の娘と或家の息子とが戀の世界をさまよつたと云ふことは、讀本作者が茶飯事として閑却せんとしたところであるが、人情本に於ては、これを描寫の對照として相當重く見た。英雄豪傑主義から見ると、それは一些事に過ぎぬとも見られるが、人情本の作者は、左様したところに生きた現實の存することを知つた。即ちその凡人主義であるところに人情本の特色があり、その存在の意味があつた。

### 七 『娘節用』から『梅ごよみ』へ

以上述べ來つたところによると、人情本は低級ながらも、現代人の心持にいくらか近く感ぜらるるところがある。この方面で、春水の作物以外に於て、有名なのは、曲山人の『假名文章娘節用』(天保元年—同五年)

であつた。作者曲山人の生涯は明白でないが、筑波仙橋と云ふ書家であつて、傍ら小説をも書いたらしい。別號を三文舍自樂、司馬山人など云つた。その世を去つたのは天保八年のことで、著作としては、他に『人情其儘女大學』、『娘消息』などがあるばかりだ。

彼れの『娘節用』は元祿十五年秋、歌舞伎役者金屋金五郎と籠屋町額風呂の湯女小さんが情死したことを材料としたのである。ところが、曲山人は金五郎を武士とし、許嫁のお龜が、後、藝者小さんと爲つた事とし、彼の女が義理にからまれて、金五郎と別れ、自殺するといふ筋にした。人情本の男主人公が概ね町人であるのを武士としたことは、一つの新工夫とせられ、また結末を悲劇的としたのも、風變りとされた。そんなわけで『娘節用』は相當多くの讀者を得た。殊に小さんの貞操を守ること厚く、その悲壯な心事が一般の同情を惹いた事と思ふ。

ところが、以上の如き趣向は、脚本の方では既にあつた。文化八年、中村座に上演せられた『東都名物錦繪始』がそれである。金五郎を上總の城主、萩原侯の臣とし、深川藝者小三と戀に落ちた爲め、肝腎、寶物詮議の役目を一時忘れたが、やがて御家の爲めとあつて、小三に愛想づかしを云ひ、小三を色敵の秋月一角に譲らうと決心したことなどを織り込んでゐる。他に淨瑠璃『滯標浪華瀉』(明和八年)並木五瓶作『隅田春妓者容性』(寛政八年上演)にも、金五郎を武士としてゐた。さうすると、『娘節用』の趣向は別に新しいとは云へない。

その描寫は無難であるが、特に腕の冴えたところがなく、小三が藝者となつた徑路も少しく不自然に思はれ、小三の姉のことを點出したのも、偶然を利用した嫌ひがある。けれども全體の調子が眞面目で、小三の操正しい心持を現はさうと力めたあたりは、流石に涙を誘ふ力があつた。そのため、曲山人の名を借りた或作家が、續篇『清談若縁』を書いた位で、人情本の本格は『娘節用』だと云はれた。丁度、春水の『梅ごよみ』が上梓せられた二年前のことである。

春水の作品は『娘節用』の影響を受けたとは思はれぬが、参考の料としたであらうと思ふ。春水が『梅ごよみ』を公にする前に書いた作品として、少しく注目すべきものは、『婦女今川』(文政九年—同十一年)、『孝女二葉錦』(文政十二年)などである。『婦女今川』は好男子藤次郎とお繁、お梁(元藝者お柳)、お花(女中)の四角關係を描き、筋を複雑にして、面白く讀ませようとしてゐる。お繁は本家の娘、藤次郎はその出店の息子であるが、本家からお繁を藤次郎に嫁せしめんとするに當り、藤次郎は小間使のお花に戀してゐる爲め、美しくして温和なお繁を嫌ふ。それが原因で、いろいろの波瀾を生むのであるが、春水はお繁を内氣で優しい理想的淑女として描き、藤次郎から、如何に取扱はれても反抗せず、結局、妾お梁の力添へなどで、藤次郎と一緒にゐることとしてゐる。快活で、さつぱりしてゐるお梁と溫和一方のお繁を對照し、そこへ性質のよくないお花を加へたところに春水の苦心があるらしい。筆路は、『梅ごよみ』などにくらべると、何處か、ただどしいが、兎も角終り迄讀ませるやう用意してゐるところに、春水一流の特色が見える。

が、彼れの作家生活の本道は、やはり、『梅ごよみ』あたりから始つたとするのが至當であらう。即ち天保年間にかけて出した彼れの作品の上に眞價が現はれてゐると一般に見られてゐる。『梅ごよみ』は全部六十卷で完結したのであるが、天保三年から十二年までに亘つてゐる。『春色惠の花』(天保七年)は後から書き加へたもので、年代からすると、『辰巳園』(天保四年)に次ぐこととなつてゐる。狂訓亭主人、金龍山人としての春水が得意の時代は、この『梅ごよみ』を書き續けてゐた間だつたと云つてよい。

春水が『梅ごよみ』によつて、人情本を大成したについては、その師、三馬に負ふところがあり、また京傳種彦に負ふところもある。三馬が會話の上に示した巧みな手法は、春水が竊かに傾倒、推服したところであつて、『梅ごよみ』は三馬の三部作即ち『辰巳婦言』、『船頭深話』、『船頭部屋』などから、ヒントを得たところが見える。『辰巳婦言』に於けるおとまが、新川の藤兵衛らを操ることによつて、情人に盡した、張と意氣とは、深川情調を鮮かに現はしてゐるが、春水の米八、仇吉も、一つはこの邊から來てゐる。

それに三馬は男女の口説を描く間へ、歌曲を挿入して、情趣を添へることに、可なり注意してゐた。『辰巳婦言』のおとまが、若旦那喜之助の怒りに觸れて困り、巧みにしんみりとした姿で云ひわけをするところへ三馬は歌曲を挿んだ。即ち隣家から物悲しく、泌々したメロデーで、左の如き歌が聞えてくるといふ場景を點綴して効果を收めた。

「おまへばかりに苦勞をさせて、わしは苦勞をせぬかひナ。

「鳥に歌はれ鐘にはせかれ、夜着にもたれし思案顔。

「つらやはかなや勤の身なりや、心ないこと疑はれ。

かうして女主人公おとまは喜之助に向ひ、「アレ隣でうたふ潮來節の文句を聞きな、みんなわたいが心意氣だ」と云ふのである。春水の『梅ごよみ』には、殊に歌曲を度々、挿入してゐるが、それは主として三馬などの感化、影響から來てゐることがわかる。

それから小説に於ける地の文も、結構、筋立などについても、春水は京傳に學ぶところがあつた。讀本に於ける京傳の文章は、マンネリズムに囚はれてゐるが、洒落本などに於て、彼れが執筆した自序、地の文などは彼れの藝術家肌を發揮し、名文とすべきものが少くない。春水が、この種の文章に敬服してゐたことは彼の著述中に於て、京傳の『娼妓絹麗』の一節を推奨したによつてもわかる。そこには秋のうら淋しい光景が能く描かれてあつた。『梅ごよみ』に於ける地の文は、それらから學んだところがある。その七五調は、馬琴などから學んだのかも知れぬが、より多く京傳に負つた點があつた。

それに『梅ごよみ』は京傳の『梅花氷裂』(文化三年版)から得た趣がないではなかつた。京傳のこの作は淨瑠璃『茜染野中の隠井』(原田由良助作)から趣向を借りたもので、『野中の隠井』の主眼とするところは俠客梅の由兵衛が忠義のために女房の弟長吉を殺すといふ上にあつた。その概要はかうである。備前兒島の藩士、唐琴浦右衛門は主君から預つた刀が紛失したので詮議に全力を傾け、その妻お吉を大阪方面に住

ませて探索に當らしめた。それを聞知した梅の由兵衛(以前唐琴家に仕へた若黨)はお吉に力を添へ、その名刀の所在を確め得たので、折柄、女房小梅の弟長吉が大金を持つてゐるのを奪ひ、これを殺して、名刀を受出し忠義を立てた。が、その所罰として由兵衛と小梅とはその筋の手に捕へられるといふのである。京傳はそれに鹽梅を加へ、浦右衛門の妻お吉を弟瀧次郎とし、瀧次郎が刀の詮議に力めるといふことにしてゐる。

春水の『梅ごよみ』の男主人公唐琴屋丹次郎は瀧次郎の換骨脱胎である。由兵衛の俠的精神は米八の上には現はれるといふ具合で、『梅花氷裂』から得たところが、いくらかある。更に種彦の『田舎源氏』(文政十二年—天保十二年)からも幾分、趣向を借りたところもあつた。『春色梅美婦禰』第五篇序文で「源氏は豎横の並びあり。所謂空蟬、夕顔は、帚木の豎にして紅梅と竹川は句宮の横なるなど、這は最も正しき文法にて、企及ぶにあらねども、僕が策子も横豎編」云々と述べてゐるのを見ても、『田舎源氏』を讀んで、私淑した心持が、ほの見える。『英對暖語』の岑次郎が或夜、お衆、お房の二人と語つた時、燈火が消えて、お衆とお房を取りちがへ、そつと握手した錯誤などは、『田舎源氏』から得た一趣向であつた。この種の例が二三はある。且つ種彦の正本製と稱せらるる小説の戲曲的結構なども、春水が参考としたところと思はれる。

## 八 人情本に於ける描寫

春水は右の如く、諸家の長所を參酌して有利に活用したが、それと共に、彼れは多少、自分の工夫をも加味

し、茲に人情本の一派を構成した。その長所は(一)會話に力を入れた事、(二)處々、歌曲を挿入して情趣を加へた事、(三)遊女、歌妓のみならず、往々、生娘の戀をも寫した事、(四)深川藝者の意氣と張とを可なりに表現した事、(五)時勢粧に能く注意した事などである。その短所は(一)地の文に力を入れた割に巧みならざる事、(二)すべて男主人公、女主人公の性格が類型的なるのみならず、戀愛も亦類型的なる事、(三)趣向上行詰れば、偶然の事件などを用ゐてその場を糊塗する事、(四)作者としての氣品、態度、調子などの低き事、(五)道念乃至理想に乏しき事などである。

それらについて略説する前、一應、『梅ごよみ』の内容に觸れよう。本書は第一流の青樓、唐琴屋浦右衛門の養子丹次郎(或貴人の種)を中心に唐琴屋の娘お長(丹次郎未來の妻)及び深川の歌妓米八、仇吉の三人が搦んで戀の四角關係を生じ、それへ千葉(木場)の藤兵衛、その愛人女俠お由が加はつて、一部の情史を展開し、相當の波瀾、曲折あつてから大團圓となるといふのが本筋である。

が、作者はそれ丈で、物足らぬとし、それへ既述した如く、宗次郎對お雪、お増、柳川。岑次郎對お京、お衆、お房。半次郎對お絲、お園などの情史をも加へた。すべて五組の戀愛事件が『梅ごよみ』を形造つてゐるのであつて、唯その本系が丹次郎一派だといふに留まる。傍系たる宗次郎及び岑次郎と他の女性との關係も、丹次郎のそれの如く、相當の纏れがあつて、米八、仇吉が三度も丹次郎のために嫉妬の喧嘩をするやうな、アトラクティブな事件はないけれども、小波瀾、小曲折があつて、讀者をして相當に心を揉ましめる。

それに丹次郎にはお長、岑次郎にはお京、半次郎には、編笠茶屋の娘お園といふ風に、遊女藝妓以外の素人娘を點綴したところに洒落本には見られぬ純な戀の繪卷があつた。それにお衆、お房の處女時代なども純な愛を唯一筋に岑次郎に注ぐといふ具合で、それらは、作者が彩りとして加へたのであらうと思はれる。

が、何と云つても、本系の丹次郎を中心にして、米八、仇吉が、愛する男を自分ひとりのものにしようとして、火花を散らさんばかりに、幾度か争ひ、幾度か煩悶すると共に、その渦中に捲込まれた丹次郎が双方の女に優しくしようとして却て困惑し、進退に窮するところが、一番覗いどころである。それへ米八に心を寄せた藤兵衛が義理責めに米八を動かさうとして小波瀾を生ずるあたりも亦『梅ごよみ』の一焦點であつた。

以上によると、『梅ごよみ』は、始めから一貫した筋を豫定して書かれたものではなかつた。春水は、始め丹次郎を中心とした情史を書かうとして筆を執つたが、思ひのほかには讀者の喝采を得たので、書肆に促される儘に次ぎから次ぎに應急的な構想をして、筋を組立てていつたのである。『春色惠の花』を『梅ごよみ』以前のロマンスとして書き加へたことなども、一九が『膝栗毛』の評判よきにつれて、後から發端を書き加へたのと同じ行き方だつた。

勿論、春水は本系、傍系の間を時々、連絡することを忘れないで、彼是照應するやうにしたが、それは一縷の脈を繋ぐに留まり、事實、獨立した中篇が四つばかり次ぎから次ぎへならべられてゐるのだとも見られる。散漫であるが、讀本などの首尾一貫、條理整うてゐるのに對して、また一種の趣が存するやうに思ふ。



この意味で深く難するに當らぬかも知れぬ。以上『梅ごよみ』の概説で、以下、人情本の長短二面に就て略説する。

(一) 蓋し人情本の特殊的情趣は半ば會話の上にあると云つてよかつた。それは洒落本の脈を引いたところから來てゐるが、洒落本では、その當面の一光景を寫せばよかつたのを、人情本は、長篇乃至中篇となつてゐるために、一層、會話に骨を折る必要があつた。即ち會話によつて老若男女を分ち、喜怒哀樂を現はし、處女、藝者、遊女の姿を髣髴すると云ふところに、人情本の一長所があつた。殊に口説を續けてゆく情景を會話によつて表現するの味は、洒落本以上で洒落本では、存外にそれがあつさりしてゐるたが、人情本では、層々情痴の世界を展開してゆくの、口説を取換はす男女の呼吸を縷々として述べ、綿々として語るといふ風であつた。それは概ね會話を通じて行はれ、地の文では、餘り説明せぬのである。この方面に於て、春水は確かに一頭地を抜いてゐた。例へば、藤兵衛が米八を口説くところで、米八は平生特に藤兵衛の世話になつてゐるのを感謝してゐながらも、丹次郎に對する誠實心から、藤兵衛に操を賣るまいと煩悶する場面の如きは双方の氣組を能く云ひ現はしてゐる。

(前略) 藤、コウ米八、手めへマア、そう意地を張るものじやアねへせ。義理と人情を考へりやア、少しはどふかそつちから、嬉しい返事もしすばなるまへじやアねへか。マア、それはそふと一盃呑つし」と盃猪口をいだす。米八はふせう／＼に手を出して猪口をとり、だんまりで出せば、藤は銚子をとつて、藤、ド

レお酌を」と笑ひ乍らつぐ。藤、ちよつぱり生姜といきやせうかね」と生姜をつまんで出す。米八は莞爾して、またつまんでとり、米、ハイ藤さん」と猪口を出す。藤、イヤモウやう／＼口を聞いたの。ヤレ／＼骨の折れたことだ。ドレ」と猪口をとる。米八は銚子をとつて、米、ドレお酌かね」と酒をつぎ「ちよつぱり生姜だア。私は行届かねへよ」藤、コレサそつちはどふも癪をいふから恨みだといふ所をやつぱり根がよく恨まねへの、米、そりやアそふとだれぞかけてやらふじやアないかねへ。さむしいよ、藤、また逃句をいふよ、そりやアいくらでも呼びにやるがい、何とか返事してもい、じやアねへか。ホイまた言出した。われ乍らどうもわりい」米、そりやアおまはん、誰が來たつて、しよふと思ふ返事ならしまはアな。また誰がゐなくつても、否ならしやアしませんわね」といふ下から、女、ハイお肴がまゐりました」とひろぶたを二階へあける。(中略) 米、サア藤さん何か來たから、お呑みな。私も呑みますは」と茶碗をいだす。藤、またひさしいものよ。今日はもう何も言はねへから、落着いて呑みねへ。茶碗もちつと恐しすぎるの」と優しくいふ。米、ナニそれで呑むのじやアねへはね。一三日よふじで居たから、さつぱり酒氣がないから今日は丁度よいよ。マアついで呉れなせへな」藤、そんならどふでもお心任せさ」とついでやる。米八うけて莞爾笑ひ、米、死なざ止むまいおつな持病だ」といひながら、ぐつと干して、藤さん湯呑じやアお否かへ」米、随分いゝのさ」米、よかアおあがりな、サアつぎますぜ」藤、マア酒と討死をする分の事よ」と請けて、コウの米字、手めへ廊に居る内は、こんな酒を呑みやアしねへと思つたつけ」米、マア呑んでも呑

まねへでもなしさ」「嘩、コレサ〜」此くれへの事は誠に返事をしてまい、じやアねへか。おらア今日はこふおとなしく何もいはずにゐるに、そつちからおかしくすると、どうもツイ疝癪にさわつてならねへ」「米、チャおつな事をお言ひだよ。何もおかしくも、どうもしやアしはないはね。私も一體恐しい我儘者さ。そりやアもふ他人ひとに云はれる迄もなく、随分手めへでも知つてゐるのさ。それだけれど、マアよく積つてもお見なせへな。此絲さんはあの通りわかたお方。それなればこゝを始めから、何もかも打明して、ぬしに頼んだわけじやアありませんか。實におまはんの深切は、身にしみ〜と嬉しいけれど」と少しうるみ聲「御存じの通りのわけ故に、どうも返事がなりにくし。といつて恩のあるおまはんに、無得心むつごんな挨拶もならずと、いろ〜考へても、思案の出よふ様もなし。實にわちきやアとつおいつ、思案してばかりいまはアな」と泪をふく。「嘩、コウよしねへ延喜がわりいわな。泣いて貰つちやア近頃氣の毒だ。いつも〜同じせりふも、もう聞き倦きた。」(下略)

彼れ語り、これ答へる呼吸は、迫眞の妙がある。それに丹次郎のことで米八と仇吉とが酔中、口論するあたりも、双方の意氣込が如實に會話を通じて現はされてゐる。

(前略) 「米、米八さんちよつと憚り乍ら上げませう」米八は聞えね様子なり。「米、モシ米さんいやかへ」米八氣がついたといふ様子。「米、オヤわたいかへちツと」仇吉は鼻であしらひ、「米、フン私かへどころか、最前から猪口のやり所もねえやうに憚り乍らの、おそれると下から出りやア恐しい高へ唄妓衆うたいぢゆうだの、はお

りさんだのが聞いてあきれらア」「米、オヤさうかエ。私やア此方こつちにちツと考へる事があつたから、氣がつかなんだサアいたゞこう」と猪口をとる。仇吉はその手を抑へて、「米、コレサ米八さん、他ひとが盃をさすのに考へる事があるからのまれねえなんぞと、ぶしつけながら、よくそれで押勤おしきんのなるほど違つたもんだ。」「米、オヤ仇吉さん、呑れねえと云やアしねえよ」「米、さうよのう、氣がつかなんだのか。猶わりいの。いつそまだ呑れねえといふ方が罪がなからうよと云はれて、米八もさけすむやうなる口調にて、前髪を掻きながら、顔をしかめて簪を落し、「米、よくいろ〜なふしをつけるの、面倒な酒ならよそうよ」とだんまりで知らぬ顔也。(下略)

(前略) 「米、知つての通り、私わたしと丹さんの仲は誰知らねへ者はねへから、いくらおめへが、はねばたきをしたつても、丹さんはマア私に見代る鳥はねへと思つてゐるよ、お氣の毒だが」といはれて、ぐつと仇吉も上り眼じりに反唇そら、せき立つ胸をせかぬ振、「米、モウい、かへ、もつとしやべんねへな、あんまりいろ〜な事をいつて、おめへの恥を多分かきな、自惚のねへものはねへといふが、おめへのやうにさう行止つてゐりやア何と氣のもめる事もあるめへ、マア第一おいらなら手前ていしの夫を他ひとにとられるといふも、あんまり智慧のねへはなしだ。しかしおめへ達の亭主を他ひとがなんとか思つてやつたら有がてへ事だと思つて居て丁度よからうのに」とすました顔にて、「かわいそうに、おめへもまだ洗ふて見たき沖の水だの」「米、なるほどおめへも餘程世話やきだの、妙正さまの坊さんじやアあるめへし、念をいれてお加持するの、清元の

節づけから、うぬほれの御異見迄澤山聴聞いたしました。ママよくつもつてお見よ、私だつても、どうやらこうやら、此處の土地では少し他人も知つてくれて居るのに丹次郎が事は此處彼處でいはれたり、笑はれたりしても、ちつとやそつとの事でやかましいと心ですまして、しらねへ顔をしてゐるのもおめへなり私なり斯ういふ活業しやうばいしてゐるからにやア、ちつとやそつとのちよい色ぐれへはあたりめへなわけだはね。それだけれど、おめへのやうにちよいとした事にも突か、つて見たがつたり、出合せへすりやア氣障を云つたりするもんだから、どうも三度に一度は此方も心持のわりい事だらけじやアねへか(下略)

### 九 處女の戀及び俠妓の戀

(二)については別に云ふ必要はない。唯歌曲の挿入が、人情本に抒情味を加へたと云へば足りる。が、春水のものに、それが多く用ゐられてゐるのは、當時下町に住む江戸人が概ね音樂的修養を有し、且つ新作新曲の類に對しても興味を感じるので、特にこの點を活用したのであつた。その一般人情本中に用ゐられたのは、長唄、淨瑠璃を始め、清元、一中、富本、宮園、都々逸、端唄などであつた。

(三) 春水が他の作家にくらべて、より多く處女の戀を寫したことは、彼れの長所の一つに加へらるべきである。洒落本に於ては、如何に巧妙に戀を寫しても、それは遊女、歌妓の戀に過ぎぬ。殊にそこには、遊女の戀が多かつた。かの女らにも眞實の戀があつたことは疑へぬけれども、もう洒落本で描きつくされてゐた。

歌妓の戀は、比較的にまだ新しい方であるが、これとても、實際を見ると、不純な方が多い。かの女らの戀は現實上、やはり爛れてゐた。

ところが、處女の戀は、概ねさうでなかつた。それは純眞であり誠實でもあつた。春水の『婦女今川』のお繁は内氣で、溫和すぎるほどで、寧ろ單純な女性であるが、それでもかの女の純眞には動かされる。お繁と共に描かれてゐるお梁は以前、花柳界にゐたといふので、その潤達な思ひやりある性質も、大體そんなものだといふ氣がするけれども、お繁に對しては、強く同情をそそられる。

それ故、『梅うめごよみ』に於けるお衆、お房の如きも、處女時代の行動の方が、初心まごころである丈に、無條件で同感することが出来る。春水が、かうした方面に着眼して、深窓に育つ處女の本氣な戀を描き、美しい場面を展開したことは、彼れの文學的成功を助ける所以であつた。

(四) 春水の描いた女性のうちで、一番、印象が強いのは、米八と仇吉の二人だ。かの女らは別に際立つた性格の所有者ではないが、春水によつて、純化せられ、張と意氣とに於ては、決して後へ引かぬといふ風に描かれてゐる。それは深川の歌妓の實際を穿つたものかどうか。素より疑問であるけれども、水郷の風趣ある深川を背景として、水仙花の如く、また白梅の如く咲匂ふ二人の女性を『梅うめごよみ』中に點綴したことは、全體の情趣を能く引立ててゐる。

蓋し『梅うめごよみ』の舞臺は、かの女ら二人のために提供せられたにひとしい。理想の深川藝者として、彼

の女らが意氣と競ふところは、江戸の女性たちを深く動かしたにちがひなかつた。と同時に、作中の女性に對して男性の讀者を見ぬ戀にあこがれしめたことも多かつたらう。かの女らは教養に乏しく、思慮、分別にも缺けてゐるが、丹次郎を思ふ誠實に於て、人を動かす力があつた。よし、それが春水の筆で修飾せられたにもせよ、その江戸式氣前は、容易に忘れられぬ點がある。これ亦春水の成功を助けた一要素だつた。

### 10 春水の苦心とその二三の短所

(五) 春水は、女性的な傾向をいくらか有したらしく、時代の流行風俗などについては敏感であつた。それ故、彼れはその觀察し得たところを小説中に用ゐる、眼前當面の生きた空氣を逸すまいと心がけた。その服装などの描寫は、精細を極め、寧ろ煩はしい程であるが、そこ迄ゆかねば、春水は満足しなかつたのであらう。

尾崎紅葉氏は、春水の人情本を可なり愛讀したと傳へられるが、氏の小説の中にも服装を記述したところは精細を極めてゐる。ところが、一時、氏と對抗した幸田露伴氏になると、服装のことなどには頓着しないが、露伴氏の價値はそのため、減じたとは思はれぬ。唯春水の如き立場にゐると、やはり、服装、持ち物などの穿ちをやるのが、當時の下町に於ける讀者などに受けたので、特に細心の注意をしたのであらう。それに春水は遊藝師匠、歌妓らと交際があつて、時勢粧を知ることによつていろいろの便宜があつたかも知れなかつた。何れにしても、それは春水の人情本に於ける一特色である。

如上、春水の小説に見る長所の主なるものを挙げたが、更に短所について一言する。春水の人情本に於ける地の文は、彼れが苦心したらしい割合に詩味がなく、その七五調は寧ろ嫌味であつた。それにセンチンスが割に長く、妙に讀みにくい部分も往々見える。例へば「それから心筑波根の峯も春めく夕榮に、霞の衣如月や這所も名におふ向が岡、世のうき事は白髭に誰が庵崎の夕越えて、こゝろ關屋のあなたより、簾おろせし屋根船に、一節さへた爪弾は昔を今に一中節。」と云つたやうな具合で、調子だけ、すらすらしてゐるけれども、情味、色彩に乏しい。

春水はそれがために、冒頭に時々、俳句を置き、情趣の足らぬところを補つたが、これとても、度々、用ゐられると、一種のマンネリズムに墮し、又かと思はしめるに過ぎぬ。勿論、春水が殆ど全力を打つたのは、會話であるから、地の文の比較的平凡なのは、止むを得ぬことであらう。

(二) 春水の人情本に於ける若き男女は概ね類型的であつた。この點は、既に述べたが、戀愛とても亦類型的である。中心人物にはつきりした個性がない以上、そこから展開する戀愛が、おのづから凡庸化するのことは當然のことである。眞の戀愛は決して妥協を許さぬ。が、春水の描く戀は、いつも妥協を許してゐるのみならず、終局が必ず圓滿である。何れかといへば、戀は破綻し易く、動搖し易い。それ故に失戀のため、はかなく世を去つたり、思はぬ人同志が結婚する場合が多いのである。

ところが、春水の人情本では、富裕で教養があつて風采さへよければ、その若者は必ず戀愛に成功するの

である。時に失意の境地に落ち、両親から勘當されても失戀せぬのである。それと共に、春水の描く若き美女は、一旦、思ひ込んだ男性に向つて、素人、苦勞人の別なく、身命を捧げようとする。それが決定的になつてゐるので、人間のタイプも、戀愛の進行も、最初の二三ページを讀むと、直ぐに想像が着く。嚴にいへばそれは生きた人物でなく、生きた戀でない。春水の空想によつて造りあげた人物であり戀愛である。そこに彼れの作品に於ける缺點があつた。

(三) 春水の人情本に於ける缺點の一つは、餘りに偶然を濫用することである。彼れは度々夢の場を展開する。或は久しく逢はなかつた男女が丸で豫期せぬ場所で、突如相見るといふやうな筋を見せる。春水自身も夢を度々用ふるについて自ら苦笑したらしく、『春の若草』で讀者の聲に託し、「また夢か、久しいものと云つて辯解した。それらは當時の戲作者の常用手段で、ひとり、春水のみが用ゐるたわけではない。

それに春水が夢を用ゐた場合も、時に適切妥當と思はるることもある。例へば、岑次郎が青森からの歸途お房の姿を夢に見るといふ如き場合(『梅美婦禰』)がそれである。が、宗次郎が柴又で危難に逢ひ、漸くのがれて、駈け入つた茅屋に、偶然その愛人で、久しく逢はなかつた増吉がゐるといふ事(『英對暖語』)は、餘りに誂へ向きすぎて、不自然に感ぜられる。何れにしても、春水が偶然を利用することに於て、度を越したのは、聰明な方法でなかつた。

〔四〕戲作者として、低く評價されるのが嫌ひで自ら高く標置した馬琴にくらべると、春水は餘りに卑下し過ぎた。勿論、それは春水の學力が乏しかつたによるが、何もそんなに輕んぜらるる必要もなかつた。ところが春水は、この點に反省せず、自作のうちで、故らに謙遜した態度を示し、それが時に卑屈にさへ見えた。一方に於て、彼れはそれと共に、自家吹聴をしたり、代作を辯護したりした。それは一種の愛敬であるが、自ら氣品を高める道を知らな過ぎた。然し無主張のもとに世潮に追隨する浮草的批評を書いたり、春水以下の甘い小説を書いて第一流文士を以て自任し、相當贅澤な暮しをしてゐる似非者の多い世の中から見ると、春水は存外の正直者かも知れぬ。

(五) 春水は餘りに人生を甘く見過ぎてゐた。彼れは深く人生について考へず、唯享樂を以て、利那的快感を得れば、それで足りるとするやうな見地に住した。勿論、彼れは町人道德としての義理について、いくらか注意を拂つたにちがひないが、それは唯通り一遍のことで、深く反省し、推究したわけではなかつた。それ故に、享樂のみに傾き易い人生の缺點を矯め、理性及び意志を以て、傾き易い感情を調攝してゆくべき必要を自覺せず、盲目的に本能の追隨をこれ事とするが如き傾きさへも是認し肯定する氣味があつた。

かくの如きは、春水に一個の人生的理想なく、道義的所信なきところからくる結果であつて、人生の體驗を深める所以でなく、生の向上を計る道でもない。享樂至上主義のために、人生の皮相のみを撥撫して、自ら甘んじ、結局、悲劇的に自己を導く憂ひがあることを意識せぬ缺點が明かに存在してゐた。春水の晩年はその具體化でなくて何であらう。

勿論、馬琴の如く、儒教的武士道主義に起つて、因果律の嚴存を信じ、人生道德としての五倫五常を信じ、これを以て、人生を規制しなければ止まぬとするが如きことも、文學上からすると、餘りに偏した見解にちがひなかつた。人生は流動する、人間は理性のみの動物でない。馬琴の如き冷めたい規則のみを以て、人生人間を一律に拘束せんとすることも亦偏したりといはねばならぬ。

けれども春水の享樂至上主義にくらべると、馬琴の方が、よし冷めたくとも、一個の人生的理想を有し、狭くとも、人生的意義に考へ及んだ點がある故に、遙かに春水の上にある。春水は人生を面白く見せる丈で、教へない、考へさせない。そこが狂訓亭主人たる所以であるけれども、思想的に自己の作品を價値付ける何ものも持たなかつた。茲に春水の一缺點がある。

## 一一 晩年の春水

春水の短所長所は右の如くであるが、それにしても、一時、彼れの婦女子間に於ける人氣は、すばらしいものであつた。恐らく當時のモダン・ボーイの多くも、彼れの小説を愛讀したことであつたらう。今日ならば第一流の婦人雜誌から引張り風になり、通俗的讀物を主とする新聞雜誌から寄稿を頼まれて、寸暇がないといふ全盛振であつたかも知れぬ。

かうした得意の境地にあつた春水に取つて一つの大きい打撃を加へたのは、天保の改革である。即ち天保十三年六月、閣老水野越前守の峻嚴な風紀振肅令により、春水の小説が風教を紊すといふので、手鎖五日の罰に處せられ、合せてその小説を絶版すべきことを命ぜられたのである。

それから間もなく、春水は歿したといふ説があるが、どうも左様でないらしい。或書には自暴自棄的となり、劇しく大酒して死を早めたかのやうに記してゐるが、事實、左様ではない。といふのは、天保十四年春に『勸善益身鏡』を出し、且つ爲永長次郎の本名で『意見早引大善節用』を出してゐるのにも、彼れの生存が知られる。蓋しその筋の詰責によつて、勸懲主義に早變りした春水は、そのペンネームをやめ、眞面目に謹慎の態度を以て、この書を公にしたのであらうと思ふ。

かく春水は謹慎したが、道德主義のもとに小説を書くのは素より彼れの本領でなかつた。彼れの遺稿と見るべきものに、『教訓ちかみち』、『孝信開運日記』(天保十五年版)などがあるが、素より春水の作として何れも見ると足らぬもののみである。京傳は文學的奇禍に逢つた後、流石に春水よりも學問があり、才能も大きかつたので、巧みに轉身術を行ひ、讀本一派を始めたり、或は隨筆の上に新生面を開いたりしたが、春水は、それ丈の鮮かさを示すことが出来なかつた。彼れは全く陸上の魚の如く、その自由を失つた。

茲に至ると、彼れの生活は脅威を受けざるを得ない。折角人情本一派を開き、これから先きも、多々益、辨じてゆかうとする彼れが、全く不得意な方面に轉じなければならぬことは、正に非常な苦痛で、彼れの生命は、そのために縮められたかも知れぬ。かくて彼れは天保十四年十二月、五十四歳で卒去し、その豫告し

た『忠孝名譽三十六佳撰』を出さずに終つたのである。

春水の著述は晩年に書いた前記の小説のほかには讀本數部、草双紙十數部がある。それらは彼れの特色を示したものでなかつた。然し『梅ごよみ』系の小説即ち天保七年頃に書いた『春曉八幡佳年』、その後から續いて出た『春告鳥』、『籬の梅』、『春の若草』などは『梅ごよみ』と共に記憶せられてよい作品であつた。即ち『春告鳥』以下の作は正に三部作ともいふべきで、その結構に於ても、書き方に於ても、風致に於ても、『梅ごよみ』に次ぐ佳作である。『春告鳥』は、鳥雅といふ若旦那の情史で、若くして富める彼れは樂隱居の身となり、迎鳥（向鳥）の別荘に起臥して、風雅に身をやつして、時々、遊女薄雲のもとに出かけたり、美妓小濱と戯れたり、小間使お民と美しい戀に落ちたりした。結局、鳥雅は、後一時、歌妓お花となつたお民を本妻とすると云ふ事で圓滿に終つてゐる。

その中で、或夜、鳥雅が初心なお民と別荘でしんみり話すうちに、遊女や藝者などない美を認め、次第にその心をお民の方へひかれる過程、お民とのんびりした日を送るところへ、訪問者などがあつて、折角の樂しさを破られて當惑するところなどが、能く描かれてある。若旦那好男子と小間使との關係は、『婦女今川』にも出てゐるが、『春告鳥』ではそれが鮮かな色彩によつて浮彫りにせられてゐる。

さういふところを除くと、大體に於て、『梅ごよみ』の蒸返しである。それから春水は『籬の梅』、『春の若草』に於て、鳥雅と同じやうな人物花曉を出し、彼れにお民に相當するお冬といふ小間使を配して、一篇の情史を展開してゐる。お冬が悪婆（周旋屋）に欺かれて、一時、花曉のもとを去つてからは、お捨といふ女が花曉に媚び、小波瀾を起したが、結局、花曉は再び知人東兵衛の盡力で、大分苦勞したお冬を望み通り、本妻に迎へるといふことで結局してゐる。即ち鳥雅、花曉、東兵衛などを中心に二三の美女を配し、『梅ごよみ』式の趣向で終りを告げてゐる。以上三部作の中に於て、東兵衛は『梅ごよみ』の藤兵衛に似てをり、それによつて遊女薦之助はお由に相當し、友吉といふ愛人のため心意氣を盡す藝妓仲吉は、一寸、米八に似てゐる。唯お冬が生活上、餘儀なく、東兵衛の妾にならうとして成らず、何處迄も、花曉に對して操を立て、その妻となつたのは、春水が少しく氣分を一轉して趣向を變へた結果であらう。

要するに春水の『春告鳥』以下三部作は『梅ごよみ』に次ぐものとして、一讀すべき價値は確かにある。例によつて「甘い」といふ感じは到るところにあるが、流石に口説の一段になると、彼れ一流の特色を發揮し、他の追隨を許さぬ。お民、お冬の初戀を描いた點も、亦或程度迄書きわけ、お冬の方へは花曉の妹お麗を配して、お民の場合と少しく趣を變へてゐる。が、『梅ごよみ』よりも、一層、ブルジョア氣分が濃厚になり、總じて有閑階級でない限り、今日のプロレタリアが見ると、反感を起しさうなところが往々ある。富めるもののみが女性と戀愛とを自由にすることが出来るといふ趣が全篇を一貫して流れてゐるからだ。が、時代的背景を考へると、止むを得まい。

春水の衣鉢を傳へたものとして茲に擧ぐべきは、松亭金水である。彼れは本名を中村保定といひ、積翠道

人とも號した。春水の原稿筆記などを手傳ふうち、次第に文學に接近して、時々、代作をした。その作品には『閑情未摘花』、『錦之魚』、『花筐』、『花廻志滿臺』などがある。作風は春水に似てゐるが、筆力是一段、下位にある。けれども健筆家といふことが出来る。彼れは春水の外貌だけを模して、その骨皮に及ばなかつた爲め、作品から放射する感銘力を弱めてゐる。

## 附 録

### 笑の文學に現はれたデカダン生活

#### (一)

江戸時代に於ける一流のユウモリストは一九、三馬の二人であるが、その流風を模倣した作家中に相應の佳作を提供した者が絶無でない。勿論、今日から見れば、幼稚な節が多くて單調な結構や、ワザとらしい作爲の痕を認める爲め、それが低級な皮相滑稽に墮してゐると思はれぬではないが、如何な作家も、時代のアトマスフィアから全く離れ得ぬ以上、あながち非難ばかりも出来ない。或意味に於て、寧ろ其の趣向と技巧とを賞讃せねばならぬ。滑稽本に於ける鯉丈、金鷺らの作がそれである。

鯉丈、金鷺らの『七偏人』、『和合人』、『八笑人』などに現はれた人物を見ると、何れも似寄つた類型的のもののみである。氣障な半可通と、平生、米代を知らないやうな道樂者に依つて、さまざまの滑稽が演ぜられる。而も其の云爲は今日から見ると餘りに馬鹿氣切つてゐるから、如何しても虚偽、假構のことに相違ないと思はれる位だ。然し爛熟した太平の空氣中に生息して、何れも親がかりの部屋住連で、生活の壓迫を知ら



ず、生の倦怠、生の單調に飽いて、毎日如何にして面白く可笑しく一日を費さうかとのみ焦慮屈托して居た手合の中には、『七偏人』や『八笑人』に見る如き道樂者が存在せぬことはあるまい。此の意味からすると、中には、作者の空想から編み出した人間も居ようが、一方には、略ぼそれらしい實際のモデルがあつて、それを描いたものが可なり出て居よう。江戸末期の頹廢相のうちのにのんびりした太平の空氣が尙ほ漂うてゐたことを想像すると、成程と首肯される節がある。即ち茲に現はれた半可通や、道樂者は、矢張、かうした時代の影を少し誇張したものと見てよい。

云ふ迄もなく、『七偏人』(文久三年版)は梅亭金鷲、『八笑人』(天保五年版)、『和合人』は瀧亭鯉丈の作である。此の二作家が滑稽に對する觀念は、明晰でなかつたらしい。ユウモアとして高級に位する悲壯的滑稽、苦痛的滑稽等は、到底、了解し得なかつたらしい。彼等は滑稽とは、揶揄程度の可笑味とのみ思つてゐた。これも當時にあつては、無理のないことであらう。此様な風であるから、その描くところは幼稚な滑稽である。ナンセンス極まる矛盾から、さまざまの滑稽を胚胎させて居るに過ぎない。通卷同じやうな滑稽が少し形を變へて續々出てくると思へば間違ひない。唯、時として其の滑稽が思ひ切つて幼稚で、馬鹿らしい處になると、何となく俗離れがしたやうに思はれて、『呑氣なものだ』と、覺えずそのナンセンス味に笑はされる處さへもある。それ等は、現代文士の手になつた出來損ねの揶揄よりは、却て罪がない。鯉丈、金鷲二作家の滑稽觀は、右に述べた通りで、別に長い時間の経過を待たないで、そのオチが如何なものであるかが分る單純さだ。

蓋しこの二作家は等しく早くオチのわかる滑稽を一篇毎に描いて、一々纏つた體にしてゐるので、『七偏人』でも『八笑人』でも、唯一篇だけ見れば、直ぐ全體の調子、結構等も略ぼ想見されるのである。勿論、場所と事件とは少し異なるが、その矛盾の仕方は、總べて同様だ。其處には、創作上の事情もあつたらうが、事情よりも作家のユウモア觀に十分な根柢がない爲め、單純、低調な作になつたと思はれる。従つて梗概と言ふ程の事を述べ立てる必要がないかも知れぬ。

然し江戸末期の頹廢的社會相を窺ふ一端として、茲に極く簡單に荒筋を述べよう。『八笑人』は、若隱居左次郎を中心として、眼七、卒八郎、野呂松、出目助、安波太郎、吞七、頭武六らの滑稽劇を描いた作である。第一は、飛鳥山花見の失敗、第二は、向島花見の失敗、第三は、兩國川涼の失敗、第四は、忠臣藏茶番の失敗、それらの失敗即ち一寸した矛盾に依つて、滑稽が續出する。その冒頭の一節は左の如くである。

(前略) 此に下谷のかたほとり、何屋某が惣領に甚六ならで、左次郎とて、生れついでに吞太郎。年中續くタアけにうくる家業もうるさしと、弟右之助に相續させ、おのれは隱居の身となりて、心の儘に不忍の池のほとりに寓居、同氣求むる香會所。おもての方よりしはかれたる聲にて『チト御めん下さりまし、あなたには安波太郎さまは御出なさりませんか』此の家にいづきの居せうろ眼七『ハイ今も内から呼に來ましたがまだあちらへは見へません』安波太郎は表を明てすつとはいり『コウ／＼内から誰が來た』

あるじ左次郎『ハ、べらぼうめエ誰も來ヤアしねへかへりうちをくらつたナ』眼七傍より口を出す『汝等如き不才を以て孔明を計ふとは、コレよく聞ッし、天へ向つて唾を吐ば却つて我身へかへる道理だア』アバ『イヤごたいそんなことを申上るハ、おれがあんまり聲を拵過たから悪かつた』トいふうち又た表の方より卒八といふ友だち此の家をのぞき乍ら『チイ安波公居るか』一寸來て見さつし美女々々『アバ』女か〜』とよろたへてかけ出す拍子にくつぬぎの下駄を踏みかへし足を痛め顔をしかめ乍ら障子をあけて『ドレ〜』卒八すつと這入つて上へあがり『あとを引寄てくだつし』アバ『女は何處へ來た』卒『あけて這入るが面倒だから足下に一寸木戸番を頼んだのよ、モウい、から表をしめて此方へ來さつし』アバ『此のべらばア』と座敷へ追ひ來り喰はせる。卒『コレよせエ〜あんまりこすりつくな木虱がたからア』アバ『チヤなを〜不届なことを言上するな』卒『ナンノ又その顔で女さんまいをするからのこつたア』

と言ふやうなふざけた調子で始つて居る。茲で左次郎、眼七、卒八、安波太郎らの駄洒落が續出して、卒八の花見茶番の話から一同乗氣になり、野呂松、出目助、呑七も來り加はつて最後に頭武六も來る。彼れは『呑友公御入イ、ヒイテン〜ツク〜ツク〜ツク〜ツク〜ツク〜』と云ふやうな調子で這入つて來た。一同は種々茶番の趣向を相談した末、左次郎が狂言方となり、『マツ筋は敵討だがコウと役割は色の黒いでくでくと肥満つた眼の大イ髭むしやくしやの憎々しいといふ面がほしい、ム、安波公やつてくだつし、立敵だぜ』と言

ふ、安波太郎は『立敵はい、が顔の容色があつらへ通じや嬉しくもねへ』と不平顔をするので、眼七が『チツと狂言方の割つけど、面不足をいふめエ』と抑へる。先づこれで收つて次ぎに左次郎は『おれと出目助が順禮の姿でそこ、と花を見乍ら、煙草を呑んで居る處へ安波公がのさりのさりと出かけて來る、これも同じくあちこちと見あるき、成丈人の目にかゝるやうにして程能所で順禮に煙草の火を借りようと吸ひ付けにかゝる、笠の中を覗てヤアめづらしや鳥目百味年來尋る親の敵と是から浮木の龜や優曇華のはなんでも彦兵衛で（通言かけあひの事）おもいれならべ立やう。安波公出たらめのせりふで、ドド不便ながらも返討だと編笠をとつて捨、金具ばりをスラリと抜く、おれと出目公は杖に仕込だやつをぬいて先達茶ばんに仕組んだ立合になりはどうだ』と言ふと誰も面白がつて異存がない。尙ほ最後に頭武六が六部に扮して、鉦をならして來かゝり、安波太郎、左次郎等の切り結ぶ中へ割つて入つて、暫時錫杖であしらひ乍ら『某一言いふことあり、しばらく〜』と、双方を引分け、笈を下した中から酒肴三味線を出して左次郎に渡すと同時にチャ〜チャン〜と弾出す、出目助、頭武六、聲を揚げて歌ひ安波太郎其の他一齊に踊り始めるといふ事に趣向を定めた。若し此の儘無事に行けば、單に一個の茶番に終るのである。

## (II)

處がそれ等の手筈の上に八分通の狂ひを生じて滑稽劇となる。彼等は、ザツと下稽古して、愈々出立する

事になり、眞先に出かけたのが、笈の中へ酒肴三味線を収めて六部姿になつた頭武六である。彼れは見事に第一番の失敗者となつた。と言ふのは、此の男、名詮自稱の頭武六で、酒と女にかけてはダラシなく、此の四五日間、家を外にして歸らない。母親や女房は心配の餘り、店受の判八と言ふ老人に意見を頼んだ折も折、池の端でチラリと頭武六の姿を認めたので、大聲を揚げ、「おれが見付けては一寸先へはやらねへぞ」と芝居がかりで引留めた。頭武六も驚いて振りかへると、苦蟲のやうな判八である。「こいつはたまらぬ」と言ひわけするにも、判八は金つんほでは仕様がなない。そこで笈摺を指し、かむりをふり乍ら、「是はぜうだんだ、花見にゆく」と言ふ思入で鼻と目で知らせても、判八は一向合點せず、「ナンダ六部に出るもいやだが、フウ鼻と目が役にた、ねへ、コレそれもいわねへことか。」と種々怒鳴り付けるので、群集は何時か此の二人を取圍む。此の有様に頭武六は降参して、目ざす飛鳥山へは行けず、自分の家へ引ずられていつて、隣人の異見やら、家主の理窟やら、女房の愚痴等を聞かされる。ヤツと辯解して、六部となつた由來が分ると、一同大笑となつたが、約束の時間に遅れて了つた。頭武六も氣が氣でないが、最早、飛んで至つても間に合はぬ。へたり込んで、笈の中の酒肴を獨占して、飛鳥山行は、御流れにして了つた。これが八笑人の第一失敗！

次ぎに左次郎、安波太郎、出目助は、一緒に出たが、安波太郎は一足先へ行き、後の二人は、ブラ／＼道灌山附近迄來た。處が兩人共酒の廻り加減で少し千鳥足になり、例の立廻りの復習をして居る處へ、西國邊の屈強な武士二人、何心なく來かかる鼻先へ、出目助の杖が少し觸れようとしたので、武士は忽ち立腹し、「此奴、乞食の身を以て武士を嘲弄いたし居るな」と、如何に謝罪しても聞き入れない。但し「格別の同情を以て、正當に立合つてやらう」と言ふ。二人は齒の根も合はず、出目助はブル／＼し乍ら「どう仕りましたお武士様に、手向ひ、奉りますものか、わ、私は、し、舌が、縮んで物が、いわれ、ません、ハイ拜みます。後生様で御座ります。どうぞ、命計りは御たすけ遊ばさせられ、下さるびよふ、エ、存じ奉ります。」と平蜘蛛のやうになる。それでも尙ほ許さぬ、「早く立合ひ居らぬか。」と、出目助の杖を取つて、鼻の先へ突付ける。その拍子に杖に仕込んである金具張の刀が二三寸スラリと抜けた。左次郎は、此の様なものを見せては、尙ほの事、面倒だらうと、手早くそれを収めたのを、一人の武士は屹と見付けて「ヤレ筑五殿、暫時控きやあさつしやれ」と留めた。彼れはそれを見て、「これは仇討だらう」と思つたからである。「コリヤ順禮殿、敵を尋ねる身の上か」と武士の尋ねに左次郎は江戸人丈に早くも頓智を出し、「左様でござる。」と旨く誤魔化して漸く生命を拾ふと言ふ第二の失敗！ 此の邊、稍ユウモアの旨を得てゐる。

それから八笑人の一行は頭武六を除いて、悉く飛鳥山に集り、愈々例の茶番を始めて、立敵の安波太郎は左次郎に向ひ、「コリヤ／＼順禮火を一ツかしやれ」と云ふ、左次郎は未だ烟草を呑み始めて居ぬので大狼狽、急いで火打を取出して煙草を吸付け「へい／＼サアお付け遊しまし」と編笠を覗いて、「ヤア珍しや鳥目百味、年來尋ねる親の敵」と呼ぶ。出目助も勢よく「尋常に勝負／＼」と例の大立廻りとなる。群集一同は「それ喧嘩だ、敵打だ」と驚いて逃げ出す。八笑人組は、愈々得意で十分切結んだが、肝腎留め役の頭武

六が出て來ない。その中、タテの仕組が種切れとなる。何れもスー／＼呼吸しながら、無意識に立合ふ處へ來たのは、以前の西國武士二人、『ヤレ順禮助太刀申す』と言ひさま、一度に氷の如きだんびらを眞向にかざして三人の中へ躍り込んだ。左次郎は驚いて『安波公早く逃げさつし』と注意し、皆逃げ出すので、安波太郎も烟に捲かれて逃げる。『ヤア卑怯なり、おどれ逃ぐるると逃さうか、ヤレ順禮間近になじか切付けぬ、後袈裟に打掛ケぬか、エ、埒の明かぬ。』と齒がみし乍ら刀を振つて追ひかけたが、大分、酔うて居ると見えて、歩行も自由ならぬ様子だ。此方三人は一生懸命、下道の方へ飛下り、木の根、茨に突懸り、衣類手足のわかちもなく、ばらかきになり、のたり廻つて漸く下道通へ下りて、命から／＼逃げ歸つたのが第二の失敗！物の見事に八笑人の本領を發揮した。以上は第一篇の梗概で、一つに纏つて居る。尙ほ第四篇（追加迄）の終りに至る迄、何時も茶番の趣向を立てては、途中で必ず失敗するのが常例だ。つまり、第一篇のやうな滑稽が少し形を變へて出る迄である。

## (三)

その中で第四篇の忠臣藏茶番の失敗は、壓巻に近い。此の様な滑稽は、今の芝居好の道樂物にもよく見當る筋で、現代式に書き改めると、一寸した喜劇にならう。その大要は、八笑人組が例の如く駄洒落を言つてゐる處へ、不圖、近所で固い人と云はれる、勢州屋質兵衛老人が來る。彼れは非常に眞面目な男であるから、勿

論、肌合の異つた八笑人らとは殆どそりが合はぬ。處がこの老人が長く出入する貴人の邸で、隠居の賀の祝があるので、茶番狂言をして見せることになつたが、商賣三昧の質兵衛には、その勝手が分らない。そこで止むなく八笑人の連中に、この事を依頼すべく來たのである。下地は好きなり、御意はよしと言ふので、一同、之れを快諾し、忠臣藏五段目を演ずることになつた、役割は左の通り定まる。

定 九 郎 (眼 七)

勘 平 (出目助)

猪 と 狐 (頭武六)

彌 五 郎 (吞 七)

與 一 兵 衛 (質兵衛)

以上の趣向は、大體、左次郎の考案に基づく。彼れは一々、説明の勞を執つて『お屋敷も御祝儀の事だから、人の死なねへ五段目といふ筋にしやせう。先づ勘平彌五郎の出合、立わかれと引込む、又もふりくる雨の足と、チョボにかゝると、正面の稻むらのかけで焼酎火をしやす。そこへ與一兵衛が出る。同じく定九郎も出て、いつもの通りあつて、止財布を引出して、口にくわへると、唐茄子ヨ、與一兵衛は吹けへで、案山子となる。所へテンテレツク、ツ、テン／＼ 猪が出る。』と（其の間、例の可笑味さまざまあつて後）定め、次に「頭武公は狐になるのだ。稻村のかけからヒヨイと出て、倒れてある案山子を、チョイと被つて、猪の身振サ、始終定九郎は、化されてゐる思入で、猪と可笑味の立廻りをつけて二人が思入もうけさつしな、乃でい、程に二人が仕ぬいたら定九郎は、かなはぬ體で逃げ込む、それをキツカケにズドン、狐も之に驚いて案山子をほうり出して、稻村へかくれると、後が寐鳥になる勘平出て、案山子へさぐり當つて驚く、い、時分に